

---

**なのはさんは死んでしまいました      転生ナノハの物語**

まおー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なのはさんは死んでしまいました 転生ナノハの物語

### 【Nコード】

N4056V

### 【作者名】

まおー

### 【あらすじ】

\*お報せ>IDの移転をすることを考え中です。

詳しくは活動日報で書いています。(9/23)

\*全体的に書き直しが入ります。

### 【タイトル変更：旧ナノハでいくの!!】

時空管理局魔導士だった【高町なのは】はアンノウン襲撃事件で死んでしまいました。気が付けば転生することになって。神が与えるという転生チート話を蹴っ飛ばして、【なのは】は【ナノハ】として生まれ変わりました。

ネギま！ 世界の英雄である【ナギ】の娘として再転生！？ 【幼少期】からハード人生が幕を開けて、今は【麻帆良学園】で小学生やっています！ すでに原作乖離、リリカル+ネギま！キャラ参入中。並行世界における【ジュエルシード事件】が始まりそう。【ジュエルシード】が分散してしまったようだ。【ユーノ】と【裕奈】の二人は石探しをすることに！？ 雪広騒動終結。

【1】なのはは死んでしまいました（改訂版）（前書き）

文章を全体的に見なおしていきます



レイジング…ハート……？ 答えて……。

だが、相棒であるインテリジエント・デバイスからの反応はなかった。リンカーコアとの繋がりが絶たれていた。体からどんだん力が抜けて冷たくなっていく。

それは死だ。

死を感じたことは初めてだ。初めてなのにそれを死と感じる。

おかしいな？ 死んだらどこに行くのかな？

みんなごめん……。

わたし、ここで死ぬんだ。

わたしは一生懸命頑張った、そのはずだった。

なのに何も……何もできなかつたんだ。

フェイト、ちゃん……。

金色の髪の少女が脳裏に浮かぶ。なのはが初めて、自ら友達になりたいと訴えかけて得た本当の初めての友達。

はやてちゃん……。

陽気に笑いかける、癖のある口調の少女。そして心優しい四人の騎士達。

アリサちゃん……。

ごめんね、もう逢えないかもしれない。一緒の中学行こうねって約束したのに……。

すずかちゃん……。

わたし達、友達だった。お互い言えないこともあったけど、今は違うよね？

お母さん……。

逢いたいよお。まだ習ってない料理、いっぱいあるよ。

お父さん……。

シュークリーム食べたいな。お父さんのお菓子作っていると好き

だったよ。

美由紀、お姉ちゃん……。

今度こそ彼氏さんできるといいね……。

恭弥、お兄ちゃん……

忍さんと結婚するのかな？ 幸せになってほしいなあ。

ユーノ君……。

言いたいこといっぱいあった。沢山二人でお話したよね。もっと、ずっと一緒にいられると思ってた……。

他のみんな……。

みんなの顔が思い浮かんだ。

これって走馬灯っていうんだよね？ やっぱり、わたし死んじやうんだ。誰も守れなかったんだ。

ごめん、みんな……。

そして、なのはは目を閉じた。もう何も感じない。意識が溶け込んでいく。

それは無の世界だった。白い光がなのはの傷ついた体を包み込んでいく。

ああ、わたし、天国行けるかなあ？ そしたら神様がいて、お前を生まれ変わらせてやるって言われたりするのかな？

フェイトちゃんと観たアニメにそんなのあったよね……。

もし、本当に生まれ変わるなら、またお母さんの子どもに生まれたいな。それでね、また、みんなと一緒に……。

なのは・フェードアウト

「問う、娘よ、貴様が高町なのはか？」

わたしが気がついたとき、そこは天国じゃ無かったように思う。うづん、ここが天国なのかな？

「おい…我はそれほど我慢強くないのだ。答えよ、小娘」

「あの…あなた誰ですか？」

「質問を質問で返すな。高町なのは、かと訊いているのだが？」

うわゝ このおじさん、すっごく偉そうです！ と、なのはは改めて自分の置かれている状況を何とか把握しようとする。

そこは、ありていに言うところ神殿だった。かのパルテノン宮殿を思わせる、装飾の施された円柱に、頭上はるか遠くの天井は五階建て分くらいはありそうだ。

神殿内は熱くも寒くもなく何故か光が満ちている。

なのはがいるのは、おそらく玉座の間だった。

ゆっくりスロープしたその間が一番奥に宝石を散りばめた玉座が存在し、一人の男が腰掛けている。その眼差しはまさに王者そのものであり、にじみ出る傲岸不遜さは霸王の雰囲気をも身にまとい、身を包む黄金の鎧は鈍く光り、戦においては並ぶものなどない覇気をまとっていた。

そこから対峙するように、なのはは一枚布を織り込んでようなギリシャ風の服を着ていて、玉座までは二十歩ほどという位置に立っていた。

「はい、高町なのはです！ おじさん、誰ですか？」

「我の名を貴様が知る必要はない。それと問うてよいのは我のみよ。あとおじさんではない」

「え、ええ…？」

すごく強引なのです……人の話を聞かない人です。ちゃんとお話ししたら聞いてくれるかな？

「時空管理局所属、高町なのは。所有魔力はAAA。時空管理局ではエース・オブ・ザ・エースと呼ばれる。先ほどの戦闘で死亡した」  
全部知ってるし！　なんでわざわざ聞いたんだろ？

それと…やっぱり死んじゃったんだ…ここが天国なんだ…。

「おい」

「ひゃい！」

「呆けるな。我の前で我を無視することは許さん。それとここは天国などではない」

「え？　わかりました……」

とりあえずお話を聞いてみることにしました。

なのはは背筋をぴんと立てて直立不動の姿勢になった。

「さて、貴様は死んだ。本来なら貴様の魂は天界に送られるのだがな。ここがどこなのか知っているか？」

「えっと、天国じゃないんですよね？」

「ああ違う、ここより先を進めばその先は地獄よ」

「はわわ……」

地獄、地獄って！　わたし、天国行けないんだ！　悲しくて涙出てくる……。

本当に涙が出てきそう、と目の端が濡れる。

「何か勘違いしているようだな？　天国と地獄の狭間には転生界があるのよ」

「てんせーかい？」

その名になのはは首を傾げる。聞いたこともない。

初めて聞く名前です！　時空管理局にもその名前は載ってないだろうなあ？

「有り体に言えば、死した者の魂が未練を背負っていれば辿り着く吹き溜まりよ」

「やっぱり、今のわたしって幽霊なんですよね……」

「そうだ。ただしこの吹き溜まりに落ちた者は霊界に縛り付けられ、永遠に彷徨うことになるのだがな。お前のような未練たらたらな魂

が辿り着く先は地獄より虚しい永久地獄よ」

「は、はとう……」

思わず呻き声が漏れる。

そんなのいやあ……わたし地縛霊になっちゃうの？

「そんな子犬のような目で見るな。我は暇つぶしをしているだけよ。本来なら、貴様は転生界に直行し、転生者として新しい人生を始めることになっているのだからな」

「えと、その転生界って、何ですか？」

「フン、神どもの娯楽よ。死した人間の魂を呼び出し、新たな人生を与えて戦いの中に放り込み、それを高みから見物し、賭けをしているのだ。いわば貴様達は神の遊技場で使われる駒、玩具に過ぎぬ。貴様は生前の活躍から、連中にはかなり気に入られることだろう」

それって……人権無視！？ 神様っておっかない人達です！

「あなたは神様じゃないんですか？」

何だかすごく偉そうだし、金ピカの鎧だし、物知りそうだからそうなのかなって思ったの。

そう尋ねると、我様はニヤリと笑いました。すごく邪悪でとても楽しそうに。

「我は我よ。神などに御されるつもりなどない。抗うのは運命、神や他人が敷いたレールなどに興味はない。そして神どもの企みなどすべて潰してくれよう」

不敵に口の端を吊り上げて笑う様はまるで極悪人です。

うわゝ 反逆者という顔つきです。うん、神様じゃないですね。

我様って感じですよ。すごい自信たっぷりです。

「高町なのは」

「はい？」

「どのみち貴様は転生することになる。自分の死後も人生を弄られる気分はどうだ？ 死した後も神の気まぐれで戦いに放り込まれるのだ。元の己の魂すらも書き換えられてな。終わらぬ転生の連鎖と

「いやつだ。次の世界で死してもまた別の世界に送られ、永遠の輪廻の中で戦い続ける宿命よ」

転生……生き返る……もし生き返れるなら……。

「考えていることはわかるぞ。だが貴様は元の世界には帰れん。もはや死が確定した世界ではその魂は同じものとして存在できぬのだ。ゆえに魂はこうして霊界に降りてくるのよ」

「はあ……」

なのはは思い切り溜息をついた。

よくわからない。自分の知る世界のこととはまるで異なるし、初めて聞くことばかりだ。

「己の運命を理解したか？ どう思った？」

なのはは我様の問う声に、その眼を見返した。

強い意志のこもった眼だった。我様なのはの視線をあざ笑うように受け止めてから、口元を釣り上げる。

ほう？ いい眼ではないか、気概の一つも無ければここで消滅させてやったものを、素材かもしれんな。

「すごく嫌です！ わたしがわたしじゃなくなっちゃうなんて……転生とか生まれ変わってなんか思ってたのと違うし、神様だってやっちゃダメなこともあると思うの！」

「ではどうする高町なのはよ！ 己が進む運命をどうしたい？ 狂った神の遊戯の盤上で、道化として終わるのか！ それとも巫山戯た世界を叩き潰すのか。答えよ、高町なのは！」

「自分が自分でなくなるのは嫌！ わたしはわたしなの！ 元の世界に生き返れなくなっただっていい。わたしの望みは自分自身でいられること！ たとえ、転生しても！」

わたしは我様に思い切り自分の言葉をぶつけていた。

こんなに強く、何かを願ったのは久しぶりだった。

「よかるう。貴様の意志、確かに見たぞ。これより次元の門を開く。光が貴様を転生界に導くだろう。神どもが唆すは悪魔より質の悪い誘惑。己が駒に仕立て上げる偽りの言葉よ。惑わされず、己が意思を貫くが良い」

「はい、えつと、我様。ありがとうございます」

なのは思い切り頭を下げた。

「フン、ただの余興よ。貴様がどう踊るのか、それを見させてもらうとしよう。最後に貴様が持ちし最も強力で、命を預けしものが何か問う。我からの餞別よ」

それって……わたしが命を預けてきた相棒。

その名を呟いていた。

「レイジング：ハート」

「それが貴様の武具の名か」

「はい、わたしをずっと助けてくれた。こんなわたしでも魔法で戦うことができた。いつだって一緒に戦ってきた大事な友だちで相棒なんです」

「よかるう、下がるがいい……来たれゲイト・オラ・ハビロン【王の財宝】！」

その言葉を発すると同時に幾重も魔方陣が重なり次元の裂け目が生まれる。

膨大な赤い魔力が迸り、我様を中心に幾千もの武器が姿を現した。  
「す、すごい」

「我、王の名において召喚する。我はギルガメッシュ！ いでよ、レイジングハート！」

すると、宙から現れる白い杖に大きな赤い宝石のついた武具がギルガメッシュの手に握られていた。

レイジングハート？

嘘、完全に破壊されたと思ってたのに……。

「これが私の宝具、ゲイト・オラ・ハビロン【王の財宝】よ。私の宝物庫に存在し得ぬ武具はない。受け取るがよい」

「はい！」

手に持ったレイジングハートは手に馴染んでいたが違和感もある。あれ？ 何だろう。

「フン、だがそれは貴様がかつて手にした相棒と同じではない。完全なるオリジナル品よ。それを使いこなせるようになるかは貴様と相棒次第だ」

んと…、つまりはまっさらのデバイス契約からなんだね、レイジングハート。

『イエス、私は産まれたばかりです。あなたが私のマスターか？』

「ううん、まだ、これから本当の相棒になるの」

「そやつはオリジナルゆえ少々人間臭い。元との違いはあまり気にするな」

「ありがとうございます！ ギルさん」

「礼など不要。貴様をつなぎ止めていた神殿はじき消え去る。己の運命を勝ちとってみせるがいい、高町なのは。最早、会うことはあるまい。いや、もしかすれば貴様は転生先で我の分身と出会うかも知れぬな……」

「はい、さようなら。ギルさん、分身？」

そう尋ねたわたしにギルさんは口端を歪めて笑うだけでした。最後に見たのはその背中だけ。

『管理主、ギルガメツシユよ。私を真のマスターの手に届けてくれて感謝する』

光が溶けていく。

次の瞬間、神殿は消滅し、ギルガメツシユもいなくなっていた。強い奔流がなのはとレイジングハートを押し流していく。

この先にわたしの運命がある。

そして高町なのはは転生の広間で選択をする。

胸に抱いた意志と意思は変わらない。

転生の広場で親身になってくれた女神様に別れを告げて、わたし

はレイジングハートと共にその門をくぐった。

行き先は魔法のある世界。

転生先のこととはよくわからないけど、この身は新しい命を与えられた。

今度は後悔しない。

決して諦めたりしない。

新生なのはの物語が今、始まります。

【1】なのはは死んでしまいました（改訂版）（後書き）

改訂版一ページ目。

移転する前に全て書き直します。

ギルさんフラグを立てておくお！

## 【2】ナノ八に転生！？

わたしの名前は高町なのは。

時空管理局の魔導士でした。

でした、というのは今は元になるのかな？

実はわたし、死んでしまいました。

何故そうなってしまったのかとか、後悔はしてもしきれない。

無理をしたのは本当で、自分の力を過信してた。

死んでしまった事実はどうしようもない。

でも次が、もし次があることを許されるのなら、力が足りなかったことを後悔することにはしたくない。

もう二度と会えない人達がいいます。

大事な大事な、大切な人達。

わたしがいなくなって、きっと…きっと悲しんでる。

わたしを生んで育んでくれた人達。

共に歩んでくれた友達。

仲間として支えてくれた人達。

新しい人生が得られるのなら、今度こそ、わたしの家族や友達になつてくれる人達を悲しませるような真似はしないし、させない。

今共に在るのはレイジングハート。

わたしの知っているレイジングハートではないけれど同等の存在。狂った神様の遊びにわたしは巻き込まれた。

それを教えてくれたのはとても偉そうで、すごく強い意志を秘めた男の人、ギルガメッシュ。

ギルさんは教えてくれた。

転生という名の終わることのない戦いの牢獄の世界。

転生界に来て出会った神様や女神が語ったことは、ギルさんの言葉に裏付ける証拠となっていた。

この人達は転生者に無限とも言える力を無条件で提示してきた。それこそがこの人達が転生者を縛り付けるために用意した甘い罠。

わたしはその条件をすべて断った。

驚く彼らに、わたしは、わたし自身でいられることと、レイジングハートだけいけばいいと意思を押し通した。

神様は切れかかって特典がどうか、ごちゃごちゃ言ってたけど、わたしは自分の意志を徹底して守った。

何だか神様は悔しそうだったけど、女神のお姉さんは泣いてた。感動したらしい。

お姉さん苦勞してるのね……

そして、わたしは転生のゲートをくぐり抜けたんだ。

ゲートをくぐるとわたしは世界から落下していた。

体がどんどん小さくなっていく。

レイジングハートも赤い宝石になってわたしの胸に落ちて消えていく。

ああ、地球が見える。

そしてもう一つの火星に重なる世界が魔法世界だろう。

力の奔流に身を任せ、わたしはその中に融け込んでいく。

生命が宿る、大樹のイメージが流れこむ。

世界と一つになって、柔らかい温もりに包まれる。

そしてわたしは一つの生命となって、その女のお腹ひとに宿った。

生前最後の記憶はそこで途絶えている。

自分が何者であるか、何者であったかを思い出したのは二歳の頃だった。

それまで、その記憶は夢でしかなかった。

その記憶の中のわたしは今のわたしと少しだけ姿が違う。

でもわたしはわたしだ。

神様は約束を守ってくれたようだ。

そして受け継いだものはもう一つ。

よちよち歩きのわたしは何とか鏡台の前に立つと、鏡の前でわたしは自分と向かい合っていた。

何せ前世のことを思い出す前は、自分がどんな顔であったのかも

忘れていたのだ。

鏡に写るその顔は、記憶にある、高町なのはの幼い頃と同じ顔だった。

異なるのは赤い髪で、髪を下ろした姿は高町なのはというより、ヴィータちゃんを思い起こさせた。

父親から受け継いだというその髪の色以外はわたしそのものだった。

とはいっても人種的に英国人の肌の色だし、瞳の色は右が青で左が緑色だった。

はにゃ……なんか随分印象が違うの！

わたしの名前はナノハ・スプリングフィールドという。

なのはをカタカナ呼びにしたその名前は、わたしがわたしであるための名前だった。

そしてわたしを呼ぶ声が聞こえる。

そうだ、お昼寝してたのを起きだしてきたんだった。

鏡台の前で座り込んだわたしを見つけたのはネカネお姉ちゃんだった。

わたしより五つか六つくらい年上の女の子でスプリングフィールド姓を名乗る従姉妹だった。

「ナノハちゃん、こんなとこにいたのね。まだおネムかな？」

わたしはひよいと抱き上げられると、赤ちゃん用の寝台ベッドに

戻され、ネカネお姉ちゃんの子守唄の旋律の前に眠りについていた。

ここはウェールズにある小さな村だ。

ウェールズはイギリスの一地方で、わたしが記憶する日本の風景とは何から何まで違う牧歌的な村だった。

山間に位置していて、綺麗な湖がすぐ近くにあつて、周囲は緑豊かな自然に囲まれている。

羊飼いや木こりや猟師に牧師さんもいたりして、週に一度は村の礼拝堂に人が集まり、日々の営みの後は家庭的なパブに集まってみんなで騒いだり、ときたまわたしもスタンお爺ちゃんに連れられて行ったり。

そんな時は何故か大歓迎されたり。

次の日にナノ八にはまだ早いのに！ と、ネカネお姉ちゃんに説教されるスタンお爺ちゃんだったり、毎日は何気なく過ぎていく。

もう一つ言っておくと、ここは魔法使い達が暮らす村でもあった。

村の人達はみんないい人達だ。

親のいないわたしに親身になって面倒を見てくれる。

わたしもお返しをしたいけど、まだ数えで二歳だから何もできない。

親がいないって言ったけど、わたしには両親の記憶がまるでない。生まれてからこの日までずっと、両親の温もりをわたしは知らない。

周囲の大人達はお父さんであるナギの話を井戸端会議や集会では口にするけど、お母さんの名前を聞いたことは一度もなかった。話題にすら上がらない。

いや、ナノハの前では特に口を閉ざすようにしているのではと勘ぐってしまう。

赤子の前でそんな訳もないとわかってもいた。

何せ、どんな人なのかすらわからないのだから。

写真の一つも無いのでは、手がかりのとっかかりにもならなかった。

逆にお父さん……ナギ・スプリングフィールドの写真は残っていた。

子どもの頃の写真はない。

十歳で村を飛び出して、戦争の後に英雄と呼ばれるようになり、一時期村に帰ってきた時に撮られた写真が残っていた。

それを持っていたのはスタンお爺ちゃんだった。

「英雄ご一行様じゃよ。これがナギ、エーシユン、アルなんたら、タカミチ。ジャック・ラカンが写ってれば完璧なんじゃがな。わしはジャックのファンでな」

少し古ぼけた写真に映るお父さんは少し不機嫌そうで、若かった。スタンお爺ちゃんにひつついて、アルバムを食い入る様に見ていたけど、お父さんの他の写真はなかった。

お母さんのものもなかった。

アルバムにあったのはどれも他の村の人のものばかりだった。

わたしを産んでくれたお母さん、どんな人なの？

高町なのはであった頃、わたしの家族はいつも一つだった。

泣いて笑って、嬉しいこと悲しいこともそこにはあったけど、本当の温もりがそこにあった。

だから一人が……辛い。

どこかに両親に繋がる痕跡がないか探してしまう、そんな癖がついていた。

村の人達。

スタンお爺ちゃん。

ネカネお姉ちゃん。

一つ年上の遊び相手のアーニャ。

決して寂しくないはずなのに。

お母さんのことを思うと胸が苦しくなった。

お母さんに、会いたい。

想いがはじけて涙が出てくる。

ポロポロ、ポロポロとそれは溢れてくる。

わたし泣いてる……止めようにも止まらない。

「ナ、ナノハ。どうしたんじゃ!? いきなり泣き出しおって」

戸惑うスタンお爺ちゃんの声。

優しいお爺ちゃんの手がわたしの頭を撫でる。

それでも、自分の意志で涙を止められなかった。

「ナノハちゃん! ちょっとスタンさん?」

ネカネお姉ちゃんの声が室内に響いた。

お姉ちゃんの手を握るような声にお爺ちゃんが言い訳をする声を泣きながら聞いていた。

ふとふんわりとお日様の匂いがわたしを包み込む。

「よしよし、ナノハちゃんどうしたの?」

お姉ちゃんの匂いと腕に抱かれて、しゃくりあげるのをなんとか留めると、わたしはお姉ちゃんにしがみついていた。

「あらら?」

ネカネは微笑んでナノハの顔を覗き込むと、体を軽く揺さぶって抱える格好を作ってナノハを抱いていた。

鼻歌を歌いながらゆっくりと揺り籠のように体を揺らすと、ナノハのむずかりは収まってネカネの腕の中で眠ってしまった。

「疲れてたのかな? 眠かったのかな? ナノハ…お休み」

と、そっとナノハにネカネは囁いた。

「ふう、やはり女は女同士じゃな。仕方あるまい、本来なら母親にまだ抱かれてる歳じゃからな」

「スタンさん……」

「睨むなネカネ。ナノハには母親が必要じゃよ。男なら父親の背中というものがある。ナギというでっかい背中がな。村のガキどもでナギに憧れてないのはいないくらいだ。おかげで悪さをするクソガキに焼きを入れるのに事欠かないがの」

「じゃあ、私がナノハのお母さんになるわ!」

「はっは、乳も出ない小娘がかの。いただ! これ、蹴るでない」

「そーいうの、セクハラというらしいですよ、スタンさん」

そう言い放ち、ネカネはナノハを抱いたまま、午後の柔らかい日差しが降り注ぐ路地に出て丘の上を目指した。

子守唄。

それは子守唄だった。

暖かさに包まれたまま見上げた先にあるのはネカネお姉ちゃんの横顔。

木の葉の影がネカネの足元で揺れる。

ざわわと風が吹き抜ける。

上から差し込む木漏れ日は眩しい。

眠気に誘われて目を閉じる。

トクン、トクンとお姉ちゃんの心臓の音が耳に響く。

この音は知っている…お母さんの音だ。

「お…かあさん……」

「へ!？」

半ば抱くナノハと共に心地良い風に身を任せていたネカネは、聞き間違いではないかとナノハを見おろした。

もぞもぞと体を動かしたナノハはすぐに規則正しい寝息を立て始める。

「寢言…？ まさかね、まだ二歳だけど喋った…お母さん、って言ったのよね？」

自分でも自信がなくてネカネは呟いた。

それはさつきスタン老人に言った言葉が尾を引いた。

「お母さん、か……」

母親が身近にいるネカネには孤独という意味が分からない。でもそれがとても寂しいものであることはわかる。

生まれてから二年という短い月日も幼子にはとても長い時間だ。

ナノハは村人全員が気にかけている。

でも、親には、母親には決してなれないのだ。

それはスタン老人にも無理な話だ。

「ナノハのお母さんになる」

そう口にした言葉は、もう戯れではなく、ネカネの本心だった。

その日からネカネのすべてはナノハに注がれることになる。

空白の二年間を埋めるように。

そして、ゆっくりと月日は流れてくる。

## 【2】ナノハに転生！？（後書き）

### 指定安価

【なのはの世界で親しかった友人を一人登場させる】

1. キャラ名を書き込んでください。

（どのタイミングで登場するか。ナノハとの年齢差など。初期でのナノハとの関係なども指定可能）

この安価は凍結です。

ちなみに外見が同じだけでネギま！世界の住人です。転生者でもありません。

なのはにとつてこだわりのある人物です。

複数あげても問題有りませんが、登場するのは一人とさせてもらいます。

注意することは一つ。

なのはは11才で死亡してるので、それ以前の知り合いであることが前提となります（ヴィヴィオとかはありえないということ……）。ちなみに淫獣は人間に変身できてもいいと思う……この意味はわかるね！ 安価待ってます（フへへ）。

### 禁じ手

フェイトでフェイト・アーウェルックス（笑）。

これは私も考えたけど禁じ手とさせてもらいます。

それ以外でならフェイト登場はあります。

三話目でもう一度安価飛ばします。

上記の安価が無意味になる安価になるかも知れません。

究極……安価！

### 【3】運命の出会い

あれから一年半が過ぎた。

わたしが初めての練習用の杖を買ったのは一年前になる。

数え三歳で難なく立ち上がることができるようになり、みんなを少し驚かせたりもした。

アーニヤと最初にしたのは村の探検だっただけ。

誕生日を迎えて貰ったプレゼントはアーニヤとネカネお姉ちゃん  
が作った手作りの杖だった。

魔法を覚えてくれたのはスタンお爺ちゃん。

最初に習ったのは《着火》アールデスカットだっただけ。

まだ魔法は早いと言ってたお爺ちゃんも、あまりにわたしがせがむのでしぶしぶといった感じで引き受けた。

「プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ！」

ボシユツ！

やった、一発なの！

「あちち！ これナノハ！」

火が着いたのはスタンお爺ちゃんの帽子だった……ごめんなさい

わたしの魔法の才能が周囲の大人に初めて認知されたのもその頃だった。

風を起こしたり、光を灯したりと、わたしの知るミッドチルダ式のものとは違って、日常生活でも役立つものもあって、魔法って便利なのね、と結構新鮮だったり。

魔法使い見習いならば必ず学ぶ、サギタ・マキカ《魔法の射手》と魔法障壁の展開も一ヶ月ほどで修得できました。

概念的にバリアジャケットなんだけど、自分の魔力をそのまま身につける感じで、魔法障壁を展開していると肉体の運動能力も上がるみたい。

それとは別に魔力による肉体強化の方法もあるみたいで、でもスタンお爺ちゃんはまだ早すぎるって、そればかり言うんだ。

わたしはそんなに子どもじゃないもんなって言うと、子どもはみんな同じこと言うって怒られた。

この世界の魔法は術式（呪文、魔法陣）から術者の魔力を引き出して、杖というデバイスで増幅して撃ち出す方式だ。

精神力を消費して術式を使うのはミッドチルダ式と共通だ。

杖に特定の術式を組み込んだマジックアイテムに相当するものはあったけど、杖そのものに術式すべてを組み込んだデバイスに相当するものはないし、高性能な術式を付与されたものもたいていは、ある程度の制限がつきまとうものばかりだった。

唯一の例外が【アーティファクト】だ。

【アーティファクト】は使用する者の能力に完全特化したマジックアイテムで、その存在はデバイスに近いけれど、契約によって産み出される完全オーダーメイドであるせいか世間に出回ることもない。

デバイスに依存せずに魔法を使う人はミッドチルダにもそれなりにいるけれど、精度や威力、術式の緻密度で勝負するならば、やはりデバイス持ちが有利になる。

デバイスならばデータの書き換えでいくらでも改善ができるからだ。

デバイスに慣れすぎたわたしにとっては、どんな杖を持ってもある程度の魔法を使える世界というのは、ある意味カルチャーショックでした。

デバイスにその能力を特化していく傾向がある魔導士は、その能力に癖がついていくのが普通だ。

つまりは特化していくほど汎用性に乏しくなり、個としての能力は秀でて、柔軟性のある動きができなくなってしまう。

ミッドチルダ式もベルカ式もどちらかと言えば戦いのための魔法が多い。

それ故に一つの能力に特化していくのが相手に打ち勝つ勝機の道となるのだ。

どちらかという、わたしはガチガチのデバイス派筆頭で、デバイスなしで魔法を使ったことがあまりなかった。

むしろ、デバイスという存在に縛られていたわけで、デバイス一つに縛られず、自分自身の術式とどの杖を持ってても、ある程度の上下の差はあっても魔法を行使できるというのは魅力的でした。

前の世界ではデバイスが一番とか、そういうのに囚われていた気がする。

だから、この世界の汎用性のある魔法術式は興味深い研究対象です。

わたしの得意とする属性は光と風らしいです。

風はお父さんが得意とする属性だったみたいで、得意とする属性の魔法を使った時の感覚は、他の属性より遥かに効率的で威力も強くなるのを発見したり。

ただこの世界の魔法はすごく術式が荒くて、結構ピーキーな出力だったりします。

威力の若干の差は、注ぎこむ魔力でカバーするのが一般的らしく、それってなんて力押し！？ と、魔法っていい加減なのねと悟ったり。

術式の練度が上がればそういうことも少なくなるんだけどね。

半年ほどで初心者が学べる魔法は学び尽くしてしまったらしく、村の人はさすがナギの子だと褒めてくれるのだけど、わたしとしてはもっと上級の魔法を教えてほしいなあ、とか思ったり。

それと、レイジングハートを呼びだそうとしたけど、何故か無理でした。

透明な赤い宝石が胸に浮かび上がるイメージからどうしても進まない。

でもそこに在るのは確かに感じるから、要、研究なのかな？

レイジングハートがあれば術式の解析と開発ができるから、その日が待ち遠しい。

今のわたしでも術式を弄るくらいのはできるのだけど、魔法術式ってプログラムなしで弄るととんでもないことになったりする

んだ。

普段使う分には、大体の術式は応用と理論だけで運用できるから無理やり弄る必要はないんだよね。

さあ、今日も練習しようっと！

根を詰めて魔法の修業をするわたしを見て、さすがに周囲が止めた。

「努力家なのはいいが早すぎるわい。少しは子どもらしく遊ばんか」「はい……」

練習用の杖を取り上げられてしょんぼりするナノハに、ここで甘い顔はいかとスタン老人は三日の魔法禁止を言い渡した。

おかげで暇なの……

「ほらナノハ、森に行きましょうよ！」

アーニヤがわたしの手を引いて森の中を歩く。

鳥のさえずりや森の木々の気配に、繁みが揺れるたびにわたしはビクビクしてしまった。

だって、ちょっと怖かったんだもの……肉体に精神は引きずられるものらしい。

小さなわたしにはこの世界は大きく見えて、子どもの肉体というものがどれだけ脆弱であるのかを思い知る。

すると、アーニヤはいちいち立ち止まってナノハの様子を伺うのだ。

「ほらナノハ、葉っぱ付いてるよ」

アーニヤの手がナノハの頭についた葉っぱを取ってみせる。

「うん、ありがとう」

「いい、そこはね、ありがとう、アーニヤお姉ちゃんよ！」

アーニヤは腰に手を当てると、ナノハの鼻面にびしっと指をにつきつけてみせた。

「にゃ！ 何故!?!」

「いーいからー。お姉ちゃんと呼びなさいー」

「う、うん。お姉ちゃん…?」

「アーニヤお姉ちゃんよー！」

「ふええ……」

「アーニヤお姉ちゃん」

「……」

一瞬、沈黙が訪れる。

「えと、よ、よろしい！　これからはアーニヤお姉ちゃんって呼ぶのよー！」

「わ、わかつたの」

その時だ。

囁くようなか細い声を聞いたのは。

「誰？」

「なあに、ナノハ？」

アーニヤ…お姉ちゃんが首を傾げて問いかける。  
気のせいなのかな？

その日、わたし達は木の実を拾って帰った。

次の日、どうしても気になったわたしはまた森の中に一人で踏み入っていた。

危険だから一人では入ってはいけないと言われてたけど、どうしても気になって、一人、誰にも言わないで森の中に踏み込んでいた。

森の中は奥に進むほど暗く鬱蒼とした緑に覆われていく。空を見上げても青い空は木々と葉に隠れてしまい、次第に道を見失っていた。

どうしよう…帰ろうにも方角がわからなくなっていた。

そして、あの声をまた「聞いた」のだ。

『タスケテ……』

か細くて、消え入りそうで、その声を聞いたとき、わたしの胸の奥が驚掴みにされたような気がした。

これって……念話！

『どっ、どっにいるの！』

『聞こえるの？ 助けて…ください。畏に……』

『待ってて、今行くから！』

わたしは精神を集中して森の中の魔力の気配を感じ取るうとする。かすかでも魔力の流れを感じられればと、魔法を使うときの意識を拡大する感覚をシミュレートする。

魔力を慎重に薄くバターののように広げていく感覚に包まれて、世界に自分を同化させていく。

杖を取り上げられた原因である、《サキタ・マキカ魔法の射手》を範囲に降らせってしまった時の失敗で気がついた方法だった。

魔力を探る《エリアサーチ》を術式ではなく、体感で使えることがすごい発見だった。

円形に拡大されていく魔力の触覚は、自分以外の魔力が触れれば何となくわかるのだ。

欠点は完全に無防備になることと、相手の魔力から誰かを把握するのは難しいということ。

慣れれば見分けくらいつくようになるのかも知れないけど、今はまだ無理だった。

そして魔力センサーがその残滓を捉える。

「あつちだ……」

進む先は森の奥。

張り出した枝葉が容赦なく服の上からわたしの肌を傷つけて赤い筋を作る。

先日降った雨で濡れたのか、いつの間にか服もびしょ濡れにもなっていた。

滝が派手に音を立てて落ちている。

その音を聞きながら、わたしはそれを見つけた。

その姿を見つけたとき、またあの感覚に包まれる。

それは既視感<sup>デジャ・ブ</sup>だった。

足を畏に挟まれたオコジヨが傷ついた姿で横たわっていた。

「あ……」

ナノハの声に反応したのか、ピクピクと耳を震わせてうっすらと目を開けるがすぐに閉じてしまう。

『さっきのはあなたなの？』

『もしかして…さっきのひと？』

『そっだよ、どうしてこんな酷い罠…』

わたしはその子の側に膝をついて、罠の鋭く光る刃を見た。

オコジヨ…最初、フェレットかと思ったの。

この間動物図鑑を読んでいたから違いはわかるけど、どうしても記憶にあるフェレットの姿を思い浮かべてしまう。

一人のわたしの記憶の奥深くにいる少年…ユーノ君。

『君の力じゃたぶん無理だ』

『うっん、やってみる！』

わたしはその罠を観察する。

村で獵師をしている人が使うものとは違って、魔法の仕掛けがある罠らしいことはわかる。

獵師のミレさんが言ってたけど、こういうのは確か……スイッチになる場所に魔力を流し込むと外れるんだって言ってたっけ。

『できるのかい？』

『わかった！ 外すから、じっとしてて』

魔法の杖はない。

わたしは木の枝を拾い上げると、それを罨のくぼんだスイッチに当てる。

できるだけ気をつけて最弱の威力にする。

「リリ・カル・マジカル・テクニカル！ 《魔法の射手》<sup>サギタ・マギカ</sup>！！ 収束光の一矢」

ボシュン！

光の矢がスイッチ部分に命中すると、金属の牙が音を立てて外れていた。

ようやく罨から解放されたオコジヨは、しかし動かない。

し、死んじゃったの！？

冷や汗がわたしの背に流れる。

恐る恐るオコジヨの体に触れると、胸が上下してるのが見て取れて、ほっと息を吐いた。

よかった…生きてる。

その子を抱き上げて、わたしは水が落ちる滝壺まで何とか降りると、岩棚に寝かせて両手で水を掬う。

何とかこぼさないように歩いたが、ほとんどがこぼれ落ちてしま

う。  
水をオコジヨの口元に持って行くと、鼻がその水の匂いを嗅いで動く。

『飲んで』

『うん、あり…がとう』

『よかった…』

わたしの瞳から不意に涙がこぼれてオコジヨの体に落ちた。

『泣いてるの？』

『え？ ニヤハハ…な、泣いてないよう』

くるりとオコジヨに背を向けてわたしは答える。

『…さっきの魔法ですね。驚きました』

『えへ、わたしも驚いたよ。念話できるんだね』

『はい、僕も一族以外で使える人を見るのは初めてです』

『怪我、酷いよね？ 動けないかな？』

『大丈夫…これくらい…』

『全然、平気じゃないじゃない！ 酷い怪我なんだよ。歩けなくなるかも知れないんだから』

『すみません……』

『治癒の魔法は使えないの…村の人なら治せるの』

『でも…ご迷惑をかけるし…』

『安心して、って言っても信じられないかも知れないけど、あの罫を仕掛けたのは村の人じゃないの』

『そうですか…信じます』

『あ、ありがとう』

『あなたなら信じられるから』

信じてくれた。

何だか嬉しかった。

『村に連れてくからね。拒否してもダメなんだから』

『はい、お願いします』

『わたしはナノハ！ ナノハ・スプリングフィールド』

『え！？』

『にゃ？』

『いえ…なんでもありません。僕はユー…いえ、アルベール・カモミールです……』

『アル君？ カモ君？』

『どっちでもかまいません』

『それじゃ行くよ！』

カモ君を抱き抱えて、わたしは村の方角を確かめながら歩き出していた。

さっきの魔力の探知の要領で、何とか消えそうな自分の魔力の残滓を追っていた。

夢中で気がつかなかったけど、時刻はとつくに夕方を過ぎていた。傷だらけ泥だらけで繁みから現れたナノハを村の捜索隊が見つけたのは、日が沈んで暗くなりきった頃だった。

その後こつぴどくスタンお爺ちゃんに叱られた。

ネカネお姉ちゃんはわたしを抱きしめてひたすら泣いた。

泣かせてしまった後悔が胸を打つ。

アーニヤお姉ちゃんは治療が終わったカモ君を興味深げに見て、今日のことをあれこれ尋ねる。

包帯を巻かれてバケツトの中に寝かされたカモ君は疲労からか深い眠りについている。

わたしはネカネお姉ちゃんにパジャマに着替えるのを手伝ってもらい、仁王立ちするお姉ちゃん監視の元ベッドに潜り込むと、すぐに睡魔に襲われて規則正しい寝息を立てて眠りについていた。

### 【3】運命の出会い（後書き）

ユイノ登場。

わけあってカモの名前を使います。

安価のやりなおしをします！

前回は忘れてください。

ネギま！ 軸主体にするか。

なのは 軸主体にするか少し悩みました。

ネギま！ ストーリーでの「なのは勢力」による進行。

ネギま！ ストーリーでの「ネギま！勢力」による進行。

原作に近いかは約束できませんが！

そのどちらかを考えています。

ちなみにフェイト・Tはそのどちらでも登場させる予定。

魔法に関してはネギま！世界のものとしします。

ミッド式、ベルカ式は忘れたまえ！

A F デバイスで補える感じかな？

なのは勢力優勢の場合、ネギま！原作キャラは最低限進行に必要な人数の登場となります（アスナとかね）。

でもネギま！勢力のキャラはNPC的な扱いで登場することになると思います。

というわけで安価

【原作キャラ主体か、リリカルキャラ主体で進行？】

- 1．リリカルなのは 勢力
- 2．ネギま！ 勢力

究極安価。

もう戻れない！ 戻りにくい！

なお、多数決安価ではありません。

安価を参考に必要な部分を組み合わせ構築することになります。

（ヴォルケンリッターが敵とか敵とか敵とか！ もあり得る）

この安価は凍結しました。

#### 【4】イツワリの平和と雪の降る夜の惨劇

「いただきます」

『いただきます』

朝の食卓に座った四人と一匹が同時に唱和して、ココロウア家のいつもの朝ご飯の時間が始まります。

食欲をそそる、焦げ目のついたベーコンの匂いに、厚みのある焼いたトーストに焼き立ての目玉焼きをのせ、湯気を立てるココアが人数分マグカップに注がれていくのを、わたしは待ち構えて受け取ると、フーフー息を吹きかけて冷まします。

食卓にはわたしとアーニヤお姉ちゃんが並んで座っていて、向かい側の席にアーニヤの両親のおじさんとおばさんが座っています。

カモ君はというと、テーブルの下で与えられたクルミを行儀よくかじっていた。

ネカネお姉ちゃんがメルディアナ魔法学校の寮で生活をしているため、休日にしか帰ってこれないんだけど、今年からアーニヤお姉ちゃんも魔法学校に通う生徒となり、来月になれば入寮して、ネカネお姉ちゃんと同じメルディアナの一年生として通うことになっていた。

すでに学生服も届いているのだけど、アーニヤお姉ちゃんは入学まで遊び倒すと決めたのか、まだ一度も袖を通していなかった。

ネカネお姉ちゃんと言えば、週に一度は必ず帰ってきて、その度にわたしを独占しようとするので、アーニヤお姉ちゃんが頬を膨らませて拗ねてみせるのだ。

「あなたね、ネカネお姉ちゃんとあたしのどっちを取るの？」

「アーニヤちゃん？ ナノハが困ってるでしょ。ナノハはわたしと遊びましようね？」

わたしを睨みつけるアーニヤお姉ちゃんと、静かに笑ってみせるネカネお姉ちゃん。

二人の視線がぶつかり合って、どっちも怖いの!？

『助けてカモ君』

『いや…無理、女の子って怖いよね……』

と、カモ君に見捨てられたり。

とはいっても、ナノハとアーニヤは仲が良いし、ネカネも本気ではないから、結局、休日は三人一緒に過ごすことが多かった。

絵本を読んだり、湖で遊んだり、草原で花を摘んだり、少女達の休日はいつも穏やかに過ぎていくのだ。

そしてその風景に少女達を見守る一匹のオコジヨを加えるのだ。

ナノハがココロウア家にやっかいになることになったのは、スタ

ン老人のぎっくり腰が再発したのが原因だった。

それで、それまで持ち回りだったナノハの世話をココロウア家が一手に引き受けることになったのだ。

今ではナノハはスタン老人のところへは主に勉強のために通っていたが、ぎっくり腰のせいも、複雑な魔法とか使つと腰が痛くなるため、現在は魔法の修行は中断していた。

アーニヤの両親は、むしろ喜んでナノハの世話を引き受けたと言つていい。

英雄であるナギの娘ナノハは娘の友達でもある。

ナノハは家族同然に迎え入れられた。

二人はナノハが出来るだけ不自由ないように配慮してくれた。

「ねえナノハ、そのオコジヨ…カモ君だっけ。どうするの、飼つつもり？」

「え、んつと……」

わたしはおじさんとおばさんの方を見る。

傷ついたカモ君を森の中で拾ってから二週間が経ち、体もすっかり回復したらしく、こうして自由に歩き回れるようになった。

カモ君の足の怪我も猟師のミレさんが治してくれた。

あの罫を仕掛けたのが誰かは知らないけど、ミレさんはカモ君を親身に介抱してくれた。

初めは人見知りしてたカモ君もココロウア家の空気に慣れたようで、すっかり家族の一員になっていた。

体が良くなったのだからいつでもこの村を出れるはずだが、一向

にその気配がないので、わたしは一緒にいらねえなと思っ  
ていたのだ。

「何、オコジヨの一匹、二匹何の問題もない。そうだる母さん」

「別にあたしやかまいませんよ。大人しい子だし、ナノハの言うこ  
とよく聞くしねえ」

「じゃあ、飼っていいの？ 母さん」

アーニヤが勢い込んで言う。

実のところ、オコジヨの可愛さにすっかりご執心なのはアーニヤ  
の方だった。

機会あれば触って抱こうとするので、カモ君はおっかなびっくり  
でその度に体を固くする。

「やったね、ナノハ！ カモ君可愛い」

と、食事中のカモ君をアーニヤが抱きかかえる。

「助けて、ナノハ！」

「ニヤハハ、アーニヤお姉ちゃん、カモ君のこと好きなんだよ」

「え！？」

「どしたの？」

「……………」

はえ？

カモ君、真っ赤になって黙っちゃった。

「これ！ アーニヤ。食事中よ。カモ君を離しなさい」  
「はい」

と、未練がましくアーニヤはカモ君を解放する。

おばさんに感謝の視線を投げかけて、カモ君はクルミの残骸を綺麗に平らげた。

『ナノハは薄情者だよ』  
『にゃ……』

反撃されたの……

「ナノハ、今日は湖で魔法の練習よ！ 見てなさい、今日は勝ってやるんだから」

「うん！ 負けないからね」

あれよあれよと魔法を覚えたナノハに對抗心を燃やしたのか、最近のアーニヤは魔法の練習に熱心だ。

それとナノハ程ではないけど《魔法の射手》<sup>サキタ・マギカ</sup>の練度は中々のものだ。

アーニヤが得意とするのは炎の矢だった。

二人して湖に的を用意して、撃ちあって撃墜数を競うのが最近の日課だった。

すでに村の子ども達が入れるレベルの遊びではなくなっていた。

どうやらカモ君もついてくるようだ。

ナノハの行くところにカモ君はよくついてくる。  
最初は物珍しさから村の子ども達までついてきたが、今ではそんなこともなく普通に馴染んでいた。

「リリ・カル・マジカル・テクニカル…」  
「フォル・テイス・ラ・テイウス・リリス・リリオス…」

二人の魔法の始動キーが湖畔に響き渡る。  
唱えるのは《魔法の射手》<sup>サキタ・マキカ</sup>。

狙うは湖上の的達。

光の矢と炎の矢が三本ずつ射出されて打ち消しあう。  
まずは牽制から始まり、再び《魔法の射手》<sup>サキタ・マキカ</sup>の詠唱が始まる。  
若干ナノハの詠唱が早い、アーニヤは唱え終わると同時にポケットに忍ばせたソレをナノハに向かって投げつけた。

「ハニヤツ!!」

ペタリ、緑色の蛙がナノハの顔に張り付いた。  
光の矢はあらぬ方角へ飛んでいき、的はアーニヤの炎の矢が貫いて消滅させた。

「アーニヤお姉ちゃんずるいの!」  
「勝ったー!!」

「もう一回なの〜」

その光景を波打ち際で一匹のオコジヨが見守っていた。

やれやれ……と、僕はお馴染みの二人のやり取りに苦笑する。  
周囲に気を配りながら、特に何の問題もないなど、茂みの気配や  
小動物の動きを耳で追っていた。

意外なほどの平和。

これなら大丈夫かな？

英雄の娘。

ナギ・スプリングフィールドの娘。

ナノハ・スプリングフィールド。

当然ちよつかいを掛けてくる輩がいても不思議ではない。  
でもこの村にそんな事を考える輩は存在しない。  
よく守られている。

だから僕は必要ないはずだ。

折を見てこの村から立ち去るつもりだった。

でも、もう少しだけ…彼女達と一緒にいられたら……

その気配は村を見下ろしていた。  
見えない悪魔の目。

じつと、湖で戯れる二人の少女をその大きな目玉で映し出していた。

何だ？

気配を感じて僕は空を見上げる。  
それと同時にその気配は姿を消した。  
妙な予感を感じる。  
それが杞憂であればいいと、僕は湖で戯れる彼女達に視線を移す、  
もう魔法の打ち合いから水の掛け合いになっていた。

無邪気に笑いあう少女達。

できるなら、この平和が長く、長く続けばいいのに。

## ウェールズの冬

あれから三ヶ月が経つ。

今日はネカネお姉ちゃんの帰って来る日だった。

ココロウア家は家族総出で雪山キャンプに参加していた。

ココロウア家一同とわたしにそしてカモ君を加え、一緒に山の口ツジで団欒の一時を過ごす。

アーニヤは事前に休暇申請を出していて、家族と過ごすことを認められていた。

わたしも来年になれば、お姉ちゃん達二人と同じメルディアナの魔法学校に通うことになっていた。

幸いなことにわたしの両親は、わたしが学校に通うだけの生活資金をスタンお爺ちゃんに預けていたらしい。

だから学費とか食費は心配しなくてもいいのだけど、人から受けた恩だけは一生かかっても返せるかはわからなかった。

わたしはネカネお姉ちゃんが帰ってくるからと、先に帰ることに

なっていた。

アーニヤは不満気に口を尖らせたけど、仕方ないわねと送り出してくれた。

村から迎えが来て、その面倒見のいいおじさんと一緒に山を降りた。

『ナノハ!』

『カモ君?』

念話に振り向くと、置いてきたはずのカモ君が降り積もった雪の白さに紛れて、木陰から顔を覗かせていた。

『僕も帰るよ...』

『アーニヤとおじさん達には?』

『黙って抜けだしてきた...仕方ないだろ?』

『うーん、わかった。いこうカモ君』

わたしは手を繋ぐおじさんに一言断ってからカモ君を抱えて山を降りた。

そして

雪が降るその夜。

村が燃えていた。

天空を紅に染めて、赤く赤く、煙る空に飛び交う異形の怪物達。

その光景を写す湖畔も赤く波打っていた。

わたしは呆然と丘の上からそれを眺めていた。

何もかもが悪夢の中の世界。

ふと頭上にその悪魔が現れ、鉤爪を振るう。

鮮血が飛び散って、わたしの手を繋いでいたおじさんの上半身が消滅する。

「あ……」

ぴちゃり、と熱いものが頬にかかる。

赤くて熱い血だ。

人が死んだ。

昔からよく知っている、わたしによくお菓子をくれたおじさん……

あっさりと殺された。

『ナノハ！ 逃げるんだ』

『カモ君！』

逃げ場はない！

燃え盛る村の中に追い込むように、その悪魔は二人を追い回すように黒い弾丸を放ってくる。

わざと外して追い立てているのか、その翼の羽ばたく音が嘲笑の響きにも聞こえた。

悪魔の仲間達が舞い上がって、空から二人を囲む。

「お姉ちゃん！」

逃げるわけに行かない。

ネカネお姉ちゃんが村にいるかも知れない。

そう決断して、わたしは村の中に飛び込んだ。

そして飛び込んできたものは

石像と化した村人達……

ある者は逃げよう……

ある者は子どもをかばおうとして、もろとも……

ある者は戦おうと……

その中にミレさんの姿を見つける。

どうしてこんな……こんな酷いことが……

すぐ背後で悪魔達が本当に口を釣り上げてあざ笑う。

『クソ！ ナノハ。駄目だ』

絶望的な状況。

「ナノハあああ……！」

「お姉ちゃん！？」

飛び出してきたネカネお姉ちゃんの手には杖が握られ、スタンお爺ちゃんもいた。

「ネカネ！ 早くナノハを連れて逃げるんじゃ！ 《魔法の……》」

杖を掲げたお爺ちゃんが動きを止める。  
色を失い、灰色に染まっっていく。

「く……」

「お爺ちゃん！」

「ネカネ…後は頼む……」

「危ない！」

完全に石になったスタンに駆け寄るナノ八をネカネが押し留めていた。

次の瞬間、ナノ八の耳元でネカネが悲鳴をあげる。

「お姉ちゃん？」

「足が！」

ネカネの足が石になっていた。  
つま先からゆっくりと上に侵食していく。

「ごめんね……ナノ八…守ってあげられなくて……」

悪魔の横ぶるいの一撃がネカネを捕らえる。

砕け散る、石と化した足。

壁に激突して崩れ落ちるネカネは伏して動かない。

悪魔に跳びかかる白い影。

「ナノ八！ 逃げて」

「ダメー！……」

悪魔の鉤爪が軽く振るわれ、白い毛を赤く染めてオコジョが投げ捨てる。

赤、赤、赤。

視界が全て赤に染まる。

「許さない……」

頭の中で何かが弾けていく。

レイジングハート

赤い宝石。

意識が沈み込んでいく。

今までのイメージだけではない。

自らと繋がる魔力の波長を感じる。

そしてわたしはその言葉を解き放つ。

我、使命を受けし者なり

契約の下、その力を解き放て

風は空に、星は天に

そして、不屈の心は

この胸に

この手に魔法を

「レイジングハート・セットアップ！」

『Stand by ready .

Set up』

宝石から杖に姿を変え、ナノハの手にレイジングハートが握られていた。

記憶にあるレイジングハートとそっくりそのまま心強く感じる。杖の先端の黄金の中心には大きくなった赤い宝石。

杖は長く、今のナノハには持て余す長さだが重さはまったく感じ

ない。

『力を貸して。レイジングハート……』

『イエス。すべてを打ち払う力を貴女に』

『魔法障壁を利用したバリアジャケットを展開。魔力の固定化完了。マスターのイメージをどうぞ』

『お任せ』

『All right .

Barrier jacket』

ナノハの着ていた服が掻き消え、光がナノハを包んでいく。

その身を包むのはバリアジャケット。

前の世界で初めてレイジングハートを手にした時と同じデザイン  
のバリアジャケットだった。

そのイメージは白を基調としたデザイン。

突然光に包まれたナノハが姿を現したとき、悪魔が咆哮を上げた。  
時はほとんど動いていない。

「絶対に、許さないんだから！」

レイジングハートが光を放ち、無数の光の矢がナノハの周囲に展開していく。

無詠唱による《魔法サギタ・マギカの射手》連弾23矢が悪魔達に襲いかかる。それは戦いの狼煙の合図だった。

絶望的なナノハの反撃が、今始まる！

## 【5】紅の悪魔と父の肖像（前書き）

読む前に注意：

初めに言っておきます。

このレイハはバカである。

造られてすぐに保管されたオリジナル品で、魔法のインプットがされてない状態です。

今後、ナノハがセットしていきます。

ちなみに、ミッド式の魔法は、なのは世界のリンカーコアを持たないナノハには使いこなせません。

ネギま！世界のものをアレンジするしか今はできません。

## 【5】紅の悪魔と父の肖像

問答無用の宣戦布告である光の矢の着弾と同時に、ナノハはレイジングハートと共に空に駆け上がった。

それを追って六体の悪魔が羽ばたき吠えた。

黒い翼を羽ばたかせる悪魔の群れから、黒い無数の弾丸がナノハの背中に迫るが、見事な飛行制御技術を駆使して回避してみせる

ナノハは風を切る音を聞きながら、後ろ目に悪魔達に速度で勝ることを確認する。

『レイジングハート、矢の自動制御を任せるね。一体だけ分断するよ！』

『イエス、マスター』

『Allow Shooter』

「いつけえ！」

レイジングハートの先端に光が収束し、追いつがる五体に向けて

無詠唱の光の矢が飛んで着弾する。

計算された避けられない速度だった。

ほぼ全弾が五体に着弾したが、無詠唱の矢ではダメージを与えられても異界に還すに及ばない。

そして一体が先行する形でナノ八を追う形を作り出していた。

まず一体！

ナノ八は飛行制御を解き自動落下。

突然停止し、落下するわたしに悪魔が急降下で迫る。  
目測で悪魔との距離と速さを測る。

かかったの、動きが直線的すぎるよ！

「リリ・カル・マジカル・テクニカル！ 光の精霊31柱！ 集い  
来たりて 敵を射て！！」  
《魔法の射手》<sup>サキタ・マキカ</sup>！ シュート！！」

詠唱が完成し、その収束された光の一矢を放つ。

無詠唱と比べた場合、詠唱付きで一本にまとめた光の矢の威力は、  
無詠唱の比ではなかった。

無残にも胴体と翼を貫かれ、落下して地面に激突する悪魔。

そしてその姿は透明になり消滅していくが、それを確かめる間も  
ない。

ナノ八は地面すれすれで飛行制御を取り戻すと、低空飛行で湖畔

の上を駆け抜けていた。

何とかもう一体！

『レイジングハート、飛行制御任せるね、ぎりぎり追いつかれない  
速さで』

『飛行制御コントロール受け取ります。考えがあるのですね？』  
『うん』

ナノハは《魔法の射手》サギタ・マジカの詠唱を開始する。  
今度は五体同時に足を止める！

『リリ・カル・マジカル・テクニカル！ 《魔法の射手》サギタ・マジカ！！ 連  
弾 光の五矢！ 散開！！』

五体の悪魔に放たれる光の矢は、着弾の瞬間、悪魔の手前で閃光  
となって爆散する。

緻密にコントロールされた、閃光の魔法を組み込んだる光の矢  
だった。

『森へ！』

鬱蒼と茂る暗い森の中にナノハは降り立つ。

瞬時の目眩まじだった。

全部に効果があるとは思いはしないが、森に降りるナノハに気がついた悪魔が警戒のためか叫びを上げる。

隙は逃さない。

狙い撃つ！

「リリ・カル・マジカル・テクニカル！ 光の精霊31柱！ 集い  
来たりて 敵を射て！！」  
《魔法の射手》！ シュート！！」

羽ばたき回避しようとする悪魔の頭が消失し、あっけなく森の中に落下して消滅していく。

あと四体！！

荒い息が漏れて、わたしは自分の活動限界が近いことを悟る。

これだけ動いて、魔法を連発するのは初めてだった。

この体での限界がわからないけど、息は切れるし嫌な汗も出る。

鍛えられていない幼子の肉体では大魔力を運用し切ることなどで  
きはしない。

今の何の術式も組もこまれていないレイジングハートでは戦いの  
幅は極めて限られてくる。

《魔法の射手》<sup>サキタ・マキカ</sup>で仕留めた悪魔は二体だった。

あと、ではない、まだ四体いるのだ！

仲間の悪魔が倒され、残った悪魔達がナノ八を空中から包囲する。

止まったら不味い！

森に入ったことが不利を生み出していた。

そうしなければあの一体は仕留められなかったのだが……

『低空飛行で森を離脱するよ！』

『マスター！ 敵の攻撃、来ます！！』

黒い弾丸を四体の悪魔がナノ八に向けて同時に放つ。

「デフレクシオ  
《風盾》！」

回避する時間はなかった。

受け止めるしかないと判断し、とっさに風の盾を展開する。

デフレクシオ  
《風盾》は風系の防御魔法だ。

スタンお爺ちゃんが、初心者が覚える魔法をすべて学んだナノ八

に教えるつもりだった呪文だ。

本からメモ帳に写して書いてたのに中々教えてくれないから、お爺ちゃんがない間にこっそり盗み見て憶えてしまったのだ。

そのお爺ちゃんも…石になってしまった。

バリアジャケットの強度を過信するつもりはない。

デフレクシオ  
《風盾》も初めて使う魔法だ。

『レイジングハート、回避運動を！』

森の中では飛行運動に制限がかかるせいか、レイジングハートの飛行制御も動きが鈍い。

風を切る音に頭を引っ込めると、樹を丸々一本巻き込んで倒壊する音を聞いた。

ダメだ。

ナノハは袋の鼠と悟る。

『回避不能が二発…！』

黒い弾丸を回避しきれず、態勢を崩したナノハの正面から重い一撃が襲い、《デフレクシオ風盾》を削って、風の盾は消滅する。

思ったより強い攻撃にレイジングハートを握る手が痺れていた。横から襲う、もう一撃の黒い弾丸の直撃を受けてしまう。

吹き飛ばされるが、その力を利用して、一瞬の隙について包囲網を突破する。

もし先程一体倒していなければこの包囲は抜けなかっただろう。

低空飛行で森の中をぬうように移動する。

もはや速度の有利はなく、森の上に出れば狙い撃ちされるのが目に見えていた。

こうなった誤算はナノハの勘違いもあった。

ナノハはレイジングハートを前の世界で使っていたレイジングハートと同じ感覚で使っていたのだ。

当然ながら工房から取り出してすぐに保管されたオリジナルであるレイジングハートの術式記憶領域はノーインプット状態、基本の飛行性能以外はすべて空だったのだ。

つまりただの杖に過ぎず、普通の魔法の杖よりはマシ程度でしかなかった。

後悔が脳裏をよぎるが、さっきようやく呼び出せたばかりのレイジングハートを責めることもできない。

圧倒的に不利な状況での戦いである。

体中が悲鳴を上げていた。

あの場に留まっていれば待つのは死だった。

バリアジャケットの魔法障壁は完全に機能して、致命的なダメージ

ジは受けていないが、黒い弾丸の衝撃の威力まで相殺できたわけではない。

それが今のナノハの肉体には辛い。

肉体はとつくに活動限界を迎えていた。

疲労はナノハから余裕を奪っていく。

それは致命的な失敗に繋がる。

それがわかっていいたから体裁も何もなくその場を離脱した。

冷静に！

落ち着けわたし！

ここで敗けるわけにいかない。

諦めたら、すべてが終わってしまう！

森の端が見え、燃え盛る村の光景が目の前に飛び込んでくる。

わずかな猶予すら与えられない逃避行。

最大速度で森から飛び出し、もう一度、分断を狙うしかないと判断する。

だが成功率は低い。

先程の二体を倒せたのは奇襲と油断を誘ったものだった。

でも、やるしかない。

その刹那

その気配を感じ取ったのは僥倖。

心臓を鷲掴みされたような感覚、それは心と魂を押し潰すほどの殺気だった。

『マスター！』

「なっ」

振り返ると同時に、ナノハの体は空中から叩き落され、弾丸のよ  
うに村の中に落ちていった。

悪魔が放つ黒い弾丸の直撃の比ではない衝撃は、バリアジャケット  
の防御を突破して、全身の骨という骨が軋み声を上げた。

飛行制御による速度減衰も間に合わず、ナノハは燃えて倒壊した  
建物の壁に激突していた。

意識が弾け飛ぶ感覚に、己の意志を集中させて、何とか気絶を免  
れる。

だが立ち上がることはできなかった。

「く、かはあっ」

内蔵を損傷したのか、口の中に溢れる血を吐き出す。  
視界が血で揺らぐ。

動け、動け、動けえ！！

空にはナノハを追ってきた悪魔達と、もう一体の悪魔が眼下の建物を見下ろしていた。

ナノハを叩き落とした悪魔の放つ殺気は尋常なものではなかった。

その悪魔が笑う。

そして少女の前に降り立ち、落ちたレイジングハートを燃え盛る建物に放り投げ捨てる、倒れ伏す少女の頭を掴み上げた。

《くくく。幼子とはいえ、精鋭の悪魔を二体屠るとはなあ……しかしこの程度か？ こんなものが魔法界の連中の切り札だというのか？ 余興と思っただが、話しにもならぬわ。この程度が切り札、だとお？ 笑わせてくれるわ！！ ナギ・スプリングフィールドの娘え……つまらぬ茶番であったな。残念だがここで幕引きだ》

「レイジング…ハートオ……」

《ほう、まだ意識があるか？ いい眼だ、子娘》

悪魔をわたしは睨みつけていた。  
熱い……咽るような熱気と燃え盛る建物を背景に悪魔の顔が浮き彫りになる。

紅く染まったその怪物　　紅の悪魔の顔を刻みつける。

この悪魔が……村のみんなを……スタンお爺ちゃんを……ネカネお姉ちゃんを……

《この歳にしてその力、闘志を忘れぬ胆力。惜しい、惜しいがここで終わりだ。貴様に生きていられてはあ、困る連中がいてねえ。死んでもらう。ぬう!?!》

次の瞬間、ナノハの体は宙を舞っていた。

虚空に投げ出され、放物線を描いて地面に叩きつけられる。

その衝撃の後にバリアジャケットが解除されてしまう。

「あ……くう」

何とか痛みを堪えて顔を上げると、目の前を雷が嵐のように吹き荒れて、建物ごと消滅させていた。

空に舞い上がった悪魔達が散開する。

そして大地を蹴ったローブ姿の男がそれを追うように空を駆け抜けていた。

まるで雷そのものであるかのように。  
そのすぐ後に幾千もの雷の嵐が天空を覆い尽くして、世界が光に包まれるのを、わたしは遠のく意識で辛うじて知覚していた。

ナノハ・フェードアウト

それは夜明けの空だった。  
地平線の向こうには淡いグラデーシヨンの空。  
朝日が朝靄を突き抜けて、冷たい風が吹く丘の上はどこかいつもの景色とは違って見えた。

ナノハは全身の痛み之苦痛の声を上げる。  
気がつけば、肩口にかけられた毛布。  
すぐ横に温もりを感じて、そこに寝かせられているのはネカネお姉ちゃんだった。  
そして気配が動いて誰かが立ち上がる。

「起きたか？」

聞きなれない声……  
誰？

わたしを見下ろす一人のローブ姿の男。  
長い杖。

赤い髪。

若い、青年と言っているいい男が立っていた。

「お前がナノハだな？」

と、その青年はわたしを見下ろしたまま尋ねる。

その言葉に頷いて、わたしは彼を見つめていた。

その眼差しは知っていた。

写真の中でしか知らなかった。

この世界にたった一人しかいない人。

ああ、この人は…この人が…わたしの。

「よくやった。頑張ったな」

言葉を探したわたしの頭を、彼がしゃがみこんで、ぐしゃぐしゃと撫でた。

あ……

この人がわたしのお父さん。

何故か、熱いものが頬を伝っていた。

会いたくて会えなかった、この世界でのわたしを生んでくれた二人のうちの一人。

前の世界の記憶にある家族も、わたしの中で薄れて消えてしまっ  
たわけではない。

大事であればあったほど、家族の温もりを知っていたからこそ、  
この世界での孤独は、まだ見ぬ父や母への会いたいという気持ちに  
変わっていた。

「泣くなよ……お前はあいつに似てるな」

「……おかあ……さん？」

「ああ」

わたしは彼……お父さんに抱きついていった。

「お、おいおい……悪いな、そばにいてやれなくて」

と、もう一度わたしの頭に手をのせて、今度は優しく撫でてくれ  
た。

その言葉にわたしは何度も首を振って答えていた。

今こうして近くにいることを、存在していることを確かめられた。  
それだけでわたしは嬉しかった。

「お父さん」

「ナノハ……」

わたしの体を抱き抱えて、お父さんは村を見下ろした。

「ナノハ、ネカネは大丈夫だ。石化は止めた。命に別状はないが……お前の友達も大丈夫だ。お前を守ってくれたみたいだからな、その少年には礼を言っておきな。傷も治療はしておいた」  
「にゃ？」

少年？  
誰？

「あ？ そのオコジヨだ」

お父さんの視線の先に、毛布の端に包まったオコジヨの白い毛先が見えた。

「カモ君！？」

カモ君の無事を確かめたくて、わたしがジタバタすると、降ろし  
てくれる。

わたしはカモ君の側に駆け寄って、起こさないように覗き込んだ。  
傷を追ったであろう箇所には包帯が巻いてあって、そこに血が滲ん  
でいた。

触るのは躊躇われて、おっかなびっくりでその鼻先に指を近づけ  
ると、少し呼吸は荒いけど、ちゃんと生きていた。

「よかった…カモ君」

「な、無事だろ？」

「うん、お父さん、ありがとう」

「な！ つ、ついでだ。お前を守ってくれたからな。いいか、ネカネのついでに怪我を治しただけだ」

「ありがとう」

ギュッと、わたしはお父さんの足に抱きつく。

また、お父さんの大きな手がわたしの頭を撫でる。

「お前に、俺のこの杖をやる。いらねーと思ったら薪にくべて燃やしちまってもいいけどな」

と告げて、地面にその杖を突き立てる。

そしてそっと引き離れた。

「ナノハ…強く生きるよ。幸せになれ」

その言葉がお父さんのわたしが聞いた最後の言葉だった。

強い風が吹いて、目を閉じる。

再び眼を開けたとき、丘にはわたしとネカネお姉ちゃんとカモ君だけが残されていた。

それが今も残るわたしの原風景の一つ。  
ナノハ・スプリングフィールドの記憶。  
何年経っても、この日の出来事だけは色褪せることはない。

燃え盛る村。

石と化した村人達。

紅に染まる悪魔。

お父さん。

そして悪夢の夜を経て、月日は残酷に流れ去る。

【5】紅の悪魔と父の肖像（後書き）

幼少編終了です。

読んでくれてありがとうね。

魔法の始動キーを変更。

紅の悪魔ヘルマンの声は若本ボイスで脳内再生してください。

## 第一次設定集（前書き）

### 【設定】

レイジングハート

ナノハ・スプリングフィールド

ユート・スクライア

雪広アリサ

月村すずか

## 第一次設定集

「オリジナル設定集」

### レイジングハート

普段は赤い宝石としてナノハが所有している。

前の世界の高町なのはが死亡した時点で、レイジングハートも完全破壊により起動停止。

その後手に入れたレイジングハートはまったくの別物である。

なのはが死亡した後に出会ったギルガメッシュの王の財宝に埋もれていた。

工房から出してすぐに保管された状態だったらしく、ミッド式の魔法術式は魔法の制御と飛行、バリアジャケットのみだった、

そのせいか、悪魔襲撃時点ではまったくの役立たずであった。

ネギま！世界の魔法術式を組み込み、アレンジしてミッド風に組み直した魔法を収めるデバイス。

ナノハが本気になったときに使用される切り札ともなっている。基本的に空戦での高速戦闘を目的とした術式運用を展開できる。

【ミッド風術式】 【非殺傷設定】 など、ネギま！魔法にはない特殊な魔法を使用できるようになる。

ネギま！魔法と異なる大きな点は、デバイスの中で術式展開を行うため、どれだけ大きな魔法でも魔法の詠唱は必要がない点。

破損してもナノハの魔力の供給で回復するが、欠点は細かいメン

テナンスができないこと。

メンテナンスが必要なほどになると、威力A以上の砲撃魔法が使用できなくなる欠点がある。

レイジングハート・術式（主に光属性）

\*WIKIから拝借していますが、原作との違いはあります。

誘導系

《デヴァインシューター》

【誘導操作弾 射程A 攻撃力B+ 操作性S+】

無詠唱の魔法の射手（光）を誘導襲撃型に改造したもの。

移動・戦闘を行いながらの高速戦闘に特化した戦術運用を行うことができる。

基本的に【非殺傷】で使われるが、その正確性は脅威の一言に尽きる。

生み出せる弾数は最大で32までとなっているが、溜めが必要になる。

12発程度なら瞬時に展開し、待機させておくこともできる。

大概はこれだけでフルボッコ確定である。

《アクセルシューター》

【誘導操作弾 射程A 攻撃力B B 操作性SS】

カートリッジシステムが必要。  
3 2 発動時運用が可能になる。

《デヴァインシューター・ロングスナイパー》

【誘導操作弾 射程 S ～ S S 攻撃力 B 操作性 S】

デヴァインシューターの射撃型。

超射程で砲台としての威力はないが、長距離からの誘導弾からは誰も逃げられない！

ため時間で射程を伸ばすことができるスナイパー仕様で滅多に使われない。

## 砲撃系

《デイバインバスター》

【砲撃魔法 射程 A + 攻撃力 A + 発射速度 C】

光の矢を束ねて砲撃に特化したもの。

ためが必要となる。

《デイバインバスター・エクステンション》

【砲撃魔法 射程 S 攻撃力 A A + 発射速度 D】

カートリッジシステムが必要となる。

超射程からの砲撃が可能となるが、レイジングハートのサポートが必要。

《デイバインバスター・フルパワー》

【広範囲砲撃魔法 射程 A + 攻撃力 A A 発射速度 D】

広域直射型の砲撃魔法。もはや爆撃機である。

《ショートバスター》

【砲撃魔法 射程 B 攻撃力 A 発射速度 B】  
デヴァインシューターとデイバインバスターの中間の威力を有する。  
ただし速射性には難がある。

必殺技

《エクセリオンバスター》

【砲撃魔法 射程 A 攻撃力 S 発射速度 D】  
デイバインバスターを越える大威力の砲撃魔法。  
その威力はスターライトブレイカーの次に強力。

《エクセリオンバスター A・C・S》

【突貫魔法 近接（笑） 攻撃力 S+】  
レイジングハートも真つ青な突撃魔法。  
接敵した上でのゼロ距離射程からの砲撃。  
使用者も巻き添えを食らう、無茶ぶりのある意味禁断の必殺技。

《ストレイトバスター》

【砲撃魔法 射程 A 攻撃力 A A 発射速度 D】  
エクセリオンバスターの応用である直射砲撃魔法。  
対象に反応し、密集地域では連鎖炸裂して爆発を引き起こすエグイ  
技。

《スターライトブレイカー》

【砲撃魔法 射程C 攻撃力S 発射速度D】  
周囲の魔力を取り込んで放つナノハ最大の砲撃魔法。  
魔力が殆ど無い状態でも放てるが消耗は著しい。  
使用されるタイミングはすでに戦場であり、魔力が散逸されている  
状態であればいつでも撃てる。

《スターライトブレイカー+》

【砲撃魔法 射程B 攻撃力S+ 発射速度F】  
スターライトブレイカーに結界破壊能力が付与されたもの。  
威力も射程も「馬鹿でかい魔力」を最大限に活用した最凶の魔法の  
一つ。

《スターライトブレイカーex》

【砲撃魔法 射程B 攻撃力SS 発射速度E】  
使用すると一定時間の魔法の使用が不可能になる。  
レイジングハートもメンテナンスが必要となるため、最後の切り札  
となる。

## 防御系

《バリアジャケット》

【魔法障壁 対物・対魔効果】

0・ジャケット無し

【魔法障壁 対物C・対魔C+】  
防御値はナノハの魔力から算出。

1・ノーマルモード

【魔法障壁 対物B・対魔B】  
無印 のものだがナノハは好んで着用する。

2・セイクリッドモード

【魔法障壁 対物B + ・対魔B + 機動性 - 0・5 魔力消費 + 1】  
A・sのもの。

3・アグレッサモード

【魔法障壁 対物B・対魔B + 機動性 + 0・5 魔力消費 + 1】  
軽量で汎用性に優れる。

4・エクシードモード

【魔法障壁 対物B + ・対魔A 機動性 + 0・5 魔力消費 + 2】  
空戦にもつとも適したモード。

#### 《プロテクション》

【防御 対物 + 1 効果】

風盾を参考に光属性で組み上げた防御魔法。  
バリアーをバリアーバーストすることでダメージと爆風で距離を取  
ることもできる。

#### 《プロテクション・パワー》

【防御 対物 + 2・対魔 + 1 効果】

カートリッジシステムが必要。

使用法はプロテクションと同じ。

#### 《ワイドエリアプロテクション》

【範囲防御 対物 + 2・対魔 + 1 効果】

範囲型のバリア。

プロテクションのように攻撃的な使い方はできない。

《ラウンドシールド》

【防御 対物+2・対魔+2効果】

一方向防御に特化した円形の盾。

#### 捕縛系

《レストリクトロック》

【拘束魔法 射程A 効果範囲B】

範囲型の拘束魔法で、目標を光の輪で収束する。

《フープバインド》

【拘束魔法 射程C】

近距離であればほぼ確実に捕らえる。

《チェーンバインド》

【拘束魔法 射程B】

鎖状の魔力で対象を縛り上げる。

#### 探知系

《エリアサーチ》

【広域探知魔法 範囲A】

500m～1km程度の範囲に渡って魔力を探知可能。

十秒集中で最大範囲に。

ナノハが学んだ、風と光属性の魔法を術式解析し、開発し直したものが上記の魔法となる。

ナノハ・スプリングフィールド

本編の主人公？

時空管理局の魔導士だったが、アンノウン襲撃事件によって死亡する。

死んだ後に転生を選択するが、神の提示する条件をすべて蹴るという選択をしたため、神の計画した転生チート主人公から逸脱した存在となる。

英雄の娘として生まれ変わるというハードモード人生を歩むことになるが、元々チート性能のなのではあった。

悪魔による村襲撃事件で多くのものを奪われてしまう。  
父親と出会い、その杖を託される。

九歳時点での麻帆良学園開始編ではA・S終了時と同等の技量を持つ。

所有魔力はSと原作、近衛木乃香と同等の大魔力を保有していて、確認される中ではおそらく最大クラスの一人。

超絶魔力を運用する【砲台型特化】の魔法使いであり、最大魔法であるスターライトブレイカーは文字通りすべてをなぎ払う。

魔力による肉体強化術を習得していて、すでに【瞬動】【虚空瞬動】を使いこなすことができる。

ナギ譲りの赤い髪に青い目（右）と緑の目（左）を持つ少女。  
頭の両側をリボンで結っている。

パーソナル魔力の色は桜色。

魔法の始動キーは『リリ・カル・マジカル・テクニカル』。

マジステル・マギを目指すが、それは父と母に会うためであり、また、ネカネの失われた足を治すためでもある。

少しばかり家族にこだわる性格になっている。

## ナギの杖

ナノハの普段使用する魔法は、通常時ではネギま！魔法を運用し、ナギから貰った杖を使用する。

また、その際に使用する魔法も光と風がメインとなる。

無詠唱による矢の威力は、その一矢一矢が原作ネギが詠唱した矢と同程度の威力を持つというテラチート（魔力Sのゴリ押し）。

なおレイハでないと【非殺傷】設定の魔法を放てず、持ち変える必要があるが、術式効率に関してはナギの杖が若干上回る。

レイジングハートの起動時は圧縮されて、レイハの中に収容されるようになってる。

なお、お父さんの杖！ ということで、ナギの杖を持ったナノハは風系の魔法を好む傾向がある。

使用する魔法はネギとほぼ同じだが、雷の斧や千の雷も使用可能となっている。

## ユーノ・スクライア

オコジヨ妖精スクライア族の少年。

彼が名乗ったアルベール・カモミールの名は、スクライア族の男が外の世界に出るときに使う偽名である。

つまりこの世界に後何人かアルベール・カモミールが存在するが、スクライア族は並列知識の共有という形で情報をやりとりすることができる。

原作ネギの使い魔であるカモミールはユーノの叔父に当たる。

念話はその力の一端を表す力で、スクライア族は総じて、念話を

通じて同族と会話をすることができる。

ユーノのオコジヨ変身は実は簡単に解ける。  
キスすると変身が解けるので、うっかりすると美少年が街中で剥かれて現れる（ハハ、ワロス）。

また一族の掟によると、人前で人間になることと、本当の名前を明かすのはパートナーの証であるとされている。

現在はナノハの使い魔的ポジション。

人間形態になると、杖を必要とせずに、さらに無詠唱で魔法を使うことができる。

主に防御系の技に秀でていて、魔法の射手は一矢撃てればいいほうである。

ネギま！魔法に属さない結界魔法を使用できるが、結界の大きさに応じて消耗は激しくなる。

雪広アリサ

麻帆良学園の小学3年生（麻帆良学園編開始時）。

大財閥雪広家の次女。

雪広あやかの妹でもある。

原作とは異なり、あやかの妹アリサが生まれることにより、あやかと明日菜の関係に若干の差がある。

アリサが明日菜に懐く>あやか嫉妬、アリサを猫かわいがり>明日菜がアリサをもっと可愛がる>あやかと明日菜の間に戦争勃発>の連鎖反応でよく喧嘩が起こるが、仲裁するのもアリサとなる。

なお、本作で一番最初にナノハの魔法バレするのがアリサとなる。

月村すずか

アリサの同級生。

暇があれば葉加瀬の工房とロボット工学研に出入りしている。超と同じ未来人であるが、目的を同じとしているのかは不明。ナノハ・スプリングフィールドが存在した未来から来ているのは共通である。

この世界唯一のデバイス・マイスターでもある。デバイスの設計・組み立て・修理・改造何でもござれの天才。

財力に依存しなければただの少女であるため、雪広財閥に技術提供をしてスポンサーとしている。

その繋がりもあり、意外と重要人物指定されている。

葉加瀬>茶々丸の繋がりからエヴァンジェリン宅に居候している。

## 第一次設定集（後書き）

ちなみに私のリリカルの記憶は無印、A・S、StSまでとなります。

ソレ以外は無知です。

設定だけで四千字使ってしまったと…これだから設定厨は！（笑）

なお、アリサとすずかが登場します。

ユーノはもう…救いがたい淫獣でOK。

## 【6】レイハ改造計画！

惨劇から数ヶ月後

ナノハ・スプリングフィールドの朝は早い。  
チクタクと静かな室内に響く時計の秒針は午前四時を指す。  
まだ誰も活動していない、早朝の空がまだ暗い時間。

「フニャア……」

ベッドの脇のバケットの中で眠るオコジヨを起こさないように、  
寝ぼけた眼をこすりながら、わたしは起き上がって、着替えを済ま  
す。

その間も眼はトロンと垂れ下がっていく。

うん…眠ひ……

コクリコクリと首をもたげて、立ったまま眠りそうになる。

『おはようございます、マスター。起きてますか？』

「おはよあ…レイジングハート」

わたしは少しだけはっきりした頭で、欠伸を噛み殺しながら眠気

を払う。

テーブルの上の小箱に入れた赤い宝石、レイジングハートを身につけて、誰も起こさないように、周囲を伺ってから外に出る。

隣室で眠るアーニヤやネカネ達に気がつかれたら事である。

何せあの事件からまだ二ヶ月あまり、こんな時間に出かけるのが見つかったら説教確定である。

いつも用事は六時まで済ませて家に戻るようにしているから気がつかれたことはない。

家と言っても、今住んでるのはウェールズのとある町だ。

ここに移り住んで一ヶ月と半ばが過ぎた。

わたし達が住んでいた村は焼き払われ、村人もみんな石になってしまい、もう住むことができない場所になってしまった村にはいられず、ココロウア一家とナノハとネカネは共々に町に移ることになったのだ。

その手続きをしてくれたのがドネットさんと言って、メルディアナ魔法学校の人だった。

ドネットさんは親身になって面倒を見てくれる、とてもいい人です。

郊外に位置する閑静な住宅街の側に森があり、ナノハは森に向かって走りだす。

これからするのは魔法の練習であるから、誰にも見られるわけにはいかなかった。

手持ちの魔法で使えるものを展開し、実際に放つと目立つので、魔法の矢などはひたすら溜めの待機状態を維持してみたり、苦手な属性の矢を組み合わせてみたりと研究に余念がない。

そのデータを元に、レイジングハートにシミュレーション情報を蓄積していくのだ。

それを軽くこなしてから、レイジングハートを呼び出す。

こんなところだからバリアジャケットはなしだ。

『レイジングハート、イメージトレーニング開始』

『仮想空間・イメージエリア構築。スタンバイOK』

「始めるよ!」

『All Right』

一瞬意識が飛び、眼を開けるとそこはレイジングハートの生み出した仮想空間。

飛行を維持したまま、バリアジャケットとレイジングハートの調子を確かめる。

性能は現実空間とほぼ同じだ。

訓練とか懐かしい。

昔もこうやって訓練したんだ。  
ユーノ君っていう優秀な訓練教官もいたしね。

フェレットに変身してたけど、本当はわたしと年が近い男の子だった。

わたしはペット扱いしちゃってたんだけどね……  
それにしても、カモ君を見てると何だか思うんだ。  
ユーノ君にどこか似てるなって。

仕草とか、話し方とかもそうで、わたしもついついユーノ君って呼びそうになっちゃう。

本当、不思議な感じ。

ずっと知ってる、身近にいた人のように思える。  
でもオコジヨでフェレットじゃない。

近いけど違う存在。

あまり考えないでいたけど、この世界には他にも私を知る人に近い存在がいるのかも知れない。

カモ君をユーノ君と勘違いしたように、似た姿形の人とか。  
もしそうなら素敵だな。

叶うなら、もう一度出会って友達になりたい。

『マスター？』

レイジングハートの声に我に返る。

考え事に没頭してしまつたようだ。

「ごめん、ごめん。レイジングハート、《魔法の射手》サギタ・マギカの術式解析は終わつてるよね？」

『はい、すでに記憶領域にセットアップしてあります』

「これをね、【ミッド式】にアレンジしようと思うの。できるよね？」

『可能です。すべて書き換えに近くなりますが？』

「そのつもりだよ。術式に【非殺傷設定】も組み込みたいし。この世界の魔法って力任せでしょ？ しかも魔法詠唱しての調整とか効率が悪いの。ミッド式なら出力も安定するし、詠唱のプロセスも省けるから」

『なるほど、わかりました。まず何から開発しますか？』

「んーとね、まずは光の矢から誘導弾の《デイバインシューター》を。風の盾を光属性にして《プロテクション》にしたいな。後バインド系もね……」

まずは取り捨て選択から。

基本的なデバイスとしての機能がなかったレイジングハートを、どうにか私の知るレイジングハートの姿に近づける。

結構時間がかかるけど、《デイバインバスター》クラスのものは最低でも実装しておかないと、またあの悪魔みたいのが現れたときに対処できなくなる。

最終目標は《スターライトブレイカー》の開発だ。

でも私の手持ちの術式では、今から組み込む魔法程度しか開発できない。

つまり、もっと上位の術式魔法を学ばなければならない。

お父さんが使ったという『雷の斧』『雷の暴風』『千の雷』『クラ  
スの術式があれば何とか成るはずだった。

光属性の上位でもいいんだけどね。

何となくお父さんの術式が欲しかったりするし、雷属性なんてま  
るでフェイトちゃんみたいだから、何だかカツコイイじゃない？

『マスター、《デイバインシューター》であればすぐにも使用で  
きます。誘導弾式の術式換装も三分いただければ。《プロテクショ  
ン》も問題有りません。実戦を一度経験しているのでデータは十分  
です』

「じゃあ、お願い」

『イエス・マスター』

レイジングハートがプログラムを組んでくれたおかげで《デイバ  
インシューター》と《プロテクション》を使えるようになっていた。  
仮想空間で出た目的目がけて誘導式の光弾が飛んでいき目標を破壊  
する。

速さも威力も十分だ。

それに《魔法の射手》<sup>サギタ・マギカ</sup>を扱うよりしっくり慣れた感覚が心地よか  
った。

新たなのが現れると同時に、《魔法の射手》<sup>サギタ・マギカ</sup>の炎の矢が何本も飛  
んでくるのを《プロテクション》を展開して数本受け止め、後は光  
弾で撃ち落とす。

「うん、こんなものかな？」

『まだコントロールが甘いですね』

「うーん、《魔法の射手》<sup>サギタ・マギカ</sup>って元々が誘導式じゃないしね。微調整していくしかないね、レイジングハート」  
『そのようです』

『マスター、そろそろ戻る時間です。それと今日はミス・マクギネスの訪問があつたかと』

「ふえ？ ドネットさんかあ。ドネットさんって綺麗だよねえ」

『そうですか？ 私には人の美醜の区別が今のところつきませんが、造形で言うならミス・マクギネスの顔は平均的な顔つきです』

「ダメなの。レイジングハートは物置に置かれすぎてるから、ちょっと女の人を見る目を養うべきなの」

『必要に思えません』

「レイジングハートにはお仕置が必要なの」

『マスターが理不尽すぎます』

「そろそろ戻らないと。解除するよ、レイジングハート」

『了解』

杖モードのレイジングハートを宝石に戻し、わたしは家に向かって走り出していた。

春が過ぎ去って、悪魔の襲撃を受けた村はもはや存在しなかった。山間の湖に面した、美しいのどかな村はもうない。石像と化した村人達は運びだされ、残った焼け焦げた村の残骸もきれいに撤去されている。

村のわずかな生き残りは山にキャンプに行ったココロウアの一家と、ナノハとネカネだけだった。

村人は死んだわけではない。

二百人近くが全員石化し、二度と元に戻らない。

永久石化の魔法を解く術はなかった。

強力な呪いは、生半可な治療魔法では刃が立たなかったのである。逆に治療に当たった魔法使いの腕が侵食され、一時的に石化する呪いを受けた。

これほどの強力な魔法に手を出すのは危険とされ、石化した村人達はメルディアナ魔法学校の管理下に置かれることになった。

湖畔にスーツ姿の一人の青年が立つ。

何を思うのか、煙草を啜えてポケットに手をつまむ。

火はついていない、煙草を啜えるのは男にとって一つの癖になっていた。

タカミチ・T・高畑。

この青年の名である。

「何か見つかりました?」

青年の背後から声をかけたのはスーツ姿のドネット・マクギネス。

メルディアナ魔法学校からタカミチを案内してきた女性だ。  
三十代ほどだがまだ二十代に見える、肩口で髪を切りそろえた美女だった。

「いえ……ただ、まだ信じられませんよ。こんなことができるなんて。ここは魔法学校の膝元ですし、多くの魔法使いが住んでいたのに……」

「仰りたいことはわかりますわ。なのに何故襲撃を受け、英雄の娘を危険にさらしてしまったのか、でしょう？　優秀な魔法使いを抱えているにも関わらず、悪魔の侵入を許した」

ドネットはタカミチに微笑んでみせる。

「いえ…すいません。そうは思っていません。襲撃者の意図がわからなくて」

タカミチはその視線から逃げるようになって村があつた場所を見た。  
額に皺が寄る。

少し厳しい顔つきになっていた。

「でも彼女は生き残った。僥倖ですわ。ココロウア家とネカネ・スプリングフィールドが生き残ったのは幸いです。おかげでこの重要な襲撃事件の一端を知ることができました」

「悪魔ですか……」

「ええ、おそらくは召喚され、使役されて村を襲った。しかも永久石化を行使するほどの上級悪魔です。そしてその悪魔を退けたのは

「ナギ・スプリングフィールド？」

「はい、その通りですわ。死んだと噂された魔法界の英雄。彼の存

在を彼の娘さんが自身で確かめられてます。それと杖を託したことも」

「彼が生きている……」

タカミチは空を見上げる。

その事実を飲み込んで、知れず彼は苦笑していた。

これは、黙っていた方がいいのか？

タカミチの脳裏に黄金の髪を持つ一人の少女が浮かぶ。が、すぐに打ち消してドネットに体を向ける。

「彼女に、ナノハ・スプリングフィールドに会わせていただけませんか？」

「最初からそのつもりでウェールズまで出張してきたのでしょうか？ 慌てなくても大丈夫ですよ。ここから車で一時間ほど行った先の町に事件の当事者を集めて暮らしてもらっています」

「あ、すいません。気が急いちゃって」

「タカミチは昔から変わりがありますね。ナギ・スプリングフィールドが関わると冷静さを欠くのは」

「すいません……」

「行きましよう」

車を止めた街道までドネットは歩き出す。

もう春とは言えない少し暑い陽気。

風が吹く丘を下り、タカミチはもう一度村を眺めてから踵を返した。

## 【6】レイ八改造計画！（後書き）

安価じゃなくてアンケートを一つ。

場面転換・キャラの視点転換に「SIDE:」はつけた方がいいのかな？

登場キャラクターが多いから、よく使われるのは見るんだけど。

私自身が使ったことあまり無いんですね。

SIDEを使うのは実力不足という意見を見たことあるけど、私はそうも思えないわけで、わかりやすいなら使いたいと思うわけですよ。

も一つは安価です。

ナノハの魔法学校在学時に一年間、留学生として麻帆良学園で小学生をするか、という安価。

ナノハはネギより早く学習過程が終わる予定なので、早く終わった分の一年間を麻帆良学園で小学生するという学園長からのサプライズ。

ちなみにメインストーリーには全く影響しません。

安価外れたら、初期アリサとすずかの出会い方が変わるくらいの誤差です。

ストーリー安価

【小学生編やる？ やらなきゃ先生として赴任する時間まで時間を吹っ飛ばす】

- 1．小学生編行くよ！
- 2．キンクリして魔法先生行くよ！

【安価】と【アンケート】の違い。

アンケート>>>参考にする。設定の募集など。

安価>>安価はある意味絶対の決定権を持つ。

ちなみにちょっと区分けしてないときもある。

安価を凍結します。

多数で「小学生編」希望となりました。

【7】タカミチ来訪と弟子入り（前書き）

安価の結果により「小学生編」入るよ！

まだ少し準備期間ということだ・・・

ココロウアをココロウアと書いてた件・・・

## 【7】タカミチ来訪と弟子入り

穏やかな日差しが降り注ぐ緑の芝生の上でその二人は出会った。

一人は三、四歳ほどの少女で、赤い髪に瞳の色が左右違う少女。まだあどけない、まだ親に甘えたい盛りの年頃の女の子だった。右目は青く、左目は緑色だった。

少女の双眸に映るのは一人の青年の姿。

背は高く、笑顔にどこか少年っぽさを残してるけど、もう大人の落ち着いた雰囲気を持つ人だった。

「ナノハ・スプリングフィールドです。はじめまして」

わたしは淑女よろしくスカートを摘んで丁寧に挨拶をしてみせた。

居間にあつた「淑女の礼儀作法」というマナー本に書いてあつた通りに再現してみせる。

首から提げた赤い宝石、レイジングハートが揺れて鈍く光る。

「はじめまして、ナノハちゃん。僕の名前はタカミチ・T・高畑。日本で中学の教師をしてるんだ」

タカミチと名乗った青年は、わたしを見て笑顔を作る。

よかった…優しそうな人だ。

タカミチ？

その名前に聞き覚えがあるような気がした。

すぐに思い浮かんだのは、古ぼけた一枚の写真とアルバム。

そしてスタンお爺ちゃん。

写真の端に写った一人の少年の肖像。

そうだ、お父さんと一緒に写ってた人だ。

二人が挨拶する庭の向こう側では、ココロウア夫妻が昼食のバーベキューの準備をしている。

アーニヤお姉ちゃんとネカネお姉ちゃんの姿は見えなかった。

車椅子のネカネお姉ちゃんは一人では外出ができない。

いや、外出を一人ではしなくなってしまった。

常に誰か、特にナノハがいると安心するようで、可能な限りわたしはネカネお姉ちゃんに付き添うようにしている。

ネカネお姉ちゃんの足は治らないと魔法使いの治療師から告げられていた。

呪いの進行はナノハの父ナギによって解除されたものの、あの日砕かれた両足の断面はまるで硬い石のように硬質化し、それに合わせられる義足を作ることができなかった。

その呪いは今もおネカネお姉ちゃんを苦しめ続けていた。

はじめは見ているのも辛かったけれど、わたし達は身を寄せ合って、辛い夜は一緒に泣いたんだ。

この時間は、いつもならわたしとアーニャお姉ちゃん、ネカネお姉ちゃんの三人で近くの公園に散歩に行くのだが、今日ばかりは客の来訪で、わたしは行くことができなかった。

ドネットさんはおじさん、おばさんと話し込んでいて、時折こちらに視線を投げかけている。

「あの！」

「ん？」

「タカミチさんは、お父さんと旅したことあるの？」

「何故それを？ ドネットさんから聞いたのかい？」

その問いにわたしは頭を振って答える。

ドネットさんがお父さんのことを話したことはなかった。

わたしの身に起こった、つい最近の事件の調査のために話を聞きに来ることはあった。

でも取り調べとかじゃなくて、ただ来ては世間話をして遊び相手になってくれたり、ケーキを作ってくれたりと、結構家庭的な面もみられる人だった。

今日もそうなのかと思ったけど、連れてきたのがタカミチさんだったのだ。

「写真…」

「ん？ 写真？」

「スタンお爺ちゃんが昔の写真を持ってて……タカミチさんも写ってました」

「スタンさんか、憶えてるよ…スタンさん……村の人達は残念だったね」

タカミチさんが屈み込んでわたしに視線を合わせる。

穏やかで静かな、どこか安心できる眼だった。

その大きな温かい手がわたしの頭に乘せられて撫でていた。

くしゃくしゃと柔らかい、お父さん譲りの赤い髪が崩れて落ちる。

どこか心地良くてわたしは眼を閉じていた。

お父さん？

ううん、その感覚はまるでお兄さんを思い起こさせる。

お兄ちゃんか……でも恭也お兄ちゃんに似ているわけじゃない。

タカミチさんの雰囲気がそう感じさせるのだ。

お父さんのようであり、お兄さんのようである。

初めて会ったのにそう感じさせる人だった。

「僕達は旅を、いや、当時は戦争中だったんだ。魔法世界はどこに行っても戦争、戦争でね。僕は戦災孤児だったんだ。そこをガトーさんという人に拾われてね。その後、君のお父さんのナギと出会って旅をした。【赤き翼<sup>アラルブラ</sup>】と呼ばれてね。戦争が終わった頃、彼の故郷、君の村に行ったことがあったから、その写真はその時撮られたものだね。その写真は残ってるのかい？」

「うっん、アルバムごと焼けちゃって」

今はもうただの灰となったのだろう。

「そうか……」

「お父さんのこと、教えてください」

わたしはタカミチさんを見上げてそう言った。

もしかしたらお母さんのことだって聞けるかも知れない。

村の人は教えてくれなかったけど、お父さんと旅をしたタカミチさんなら何かを知っているかも知れないという希望から出た言葉だった。

「いいとも、何から話そう……」

「ナノハー！」

その時、通りからわたしを呼ぶ声が聞こえる。

アーニヤお姉ちゃんの結ったツインテールが柵の向こうに見えて、車椅子のネカネお姉ちゃんもいた。

アーニヤお姉ちゃんがこっちに向かって手を振っていた。

わたしも大きく手を振り返す。

「アーニヤお姉ちゃんとネカネお姉ちゃんです。紹介します」

と、タカミチさんの手を引いて二人に紹介する。

アーニヤお姉ちゃんは初めは警戒するようにタカミチさんを見ていたが、ネカネお姉ちゃんがきちんとした挨拶をすると、おずおずと挨拶をして頭を下げた。

さすがに女の子三人に囲まれて、タカミチさんも戸惑っていたみたいだけど、二人もタカミチさんの自然なスタイルに馴染んだのか、すでに家族同然の空気となっていた。

「ナノハ、あれは誰だい？」

突然の念話に振り返ると、家の戸口からカモ君が顔を覗かせて、タカミチさんの方を見ていた。

「日本から来た、タカミチ・T・高畑さん。中学校の教師さんなの？  
え！？ 本当に？ あっちでは結構有名人だよ」

「有名人なんだ」  
「アラブアラ【赤き翼】、今は【悠久の風】のメンバーで、こっちではNGOとしても活躍してる人だよ」

「そうなんだ」

「そんな人が教師やってるなんて。世界中飛び回ってるのかと思っ

たよ』

『ウエールズには出張だつて言つてたよ?』

『君に会いに来たのかもね』

『え? そんなことないでしょ?』

『君も相当な有名人だつてこと自覚した方がいいよ……』

と、カモ君は溜息をつく。

「ナノハ、ぼーっとしてないで手伝つて。野菜洗つてもらつんだから」

「はい、アーニヤお姉ちゃん」

「私が切る役です。あら?」

ネカネお姉ちゃんが包丁を片手に軽く振ると、スツポ抜けて足元に突き刺ささつていた。

『うわああああ!』

カモ君がいた……

「あら、ごめんなさいカモ君」

「お、お姉ちゃん……」

「大丈夫よナノハ、次はちゃんとヤルから」

その言葉にカモ君が逃げ出して茂みの中に隠れてしまった。がくがく震えている。

ネカネお姉ちゃん…それって聞きようによつては危ない人だよ…

…

ちなみにわたしはまだ包丁とかは危ないからと持たせてもらえない。

わたしが厨房にいるときはたいてい、おばさんの眼が光っているので、簡単な目玉焼きの一つも作らせてくれないのだ。

あの事件の後、ナノハの立場は少しばかり過保護な空気に包まれていた。

おじさんもおばさんもとことなく神経質になっているようだ。

わたしも気をつけているけれど、どうにも気の張りあいがない。

最近、料理してないなあ……

最近と言つても今のナノハになってからはその機会がなかったし、危ないからと料理からは遠ざけられていた。

今では簡単なお手伝いくらいしかすることがない。

そのうちにちゃんとした料理を作ってみんなを驚かせてみるつもりだったから、キッチンから持ちだした料理のレシピはすべて覚えてしまった。

なにこの記憶力……

生前のなのはは自分の記憶力は並から少し上程度だと自覚していたのだけど、ナノハになってからの同時思考である【マルチタスク】

は初めからできたし、見たもの、学んだものはあつという間に脳に詰め込まれ、いつでも引き出しから引き出せる状態だ。

つまりは、おそらくこの肉体に宿る脳は生前のなのはよりかなりハイスペックである。

別に神様に頭良くなるお願いとかしてないんだけどなあ？

それ以外で考えるとおそらく両親のスペックなんだろうね。

お父さんはすごい人だと聞いているし、実際に会ってみて、とんでもない魔法を使ってみせた。

何だかやたら期待される意味もわかる気がする……

お父さん、英雄なんだよね。

それも世界を救った救世主。

そんな人と結ばれたお母さんもすごい人なのかもしれない。

でも全然話を聞かないってことは隠蔽されてる？

そこまで思考して、洗うものがなくなっていた。

やることもなくなり手持ち無沙汰だ。

野菜と肉を焼く音。

庭のあちこちでくつろぐ人達。

わたしはその輪に加わらず、膝を抱えてそれを見ていた。

このままでいいのかな？

レイジングハートを強化して戦えるようになりたい。

でもそれだけじゃダメなんだ。

この間の事件だってわたし一人でできたことは限られてる。もっと違う戦い方もできたはずなんだ。とても無力だった。

わたしはいつの間にかタカミチさんを見ていた。

多分、あの人は強い。

今の私よりずっと強い。

かつて私は高町なのはとして、時空管理局の職員として、魔導師として多くの任務をこなし、エース・オブ・エースの名を冠された。それは沢山の才能と力を持った人達とのぶつかりあいでもあった。その頃の記憶が告げるのだ。

タカミチ・T・高畑は間違いなく強者であると。

そしてそれは純粋な戦いの力だけではないように思う。

ほんの少し話をしただけだが、その眼鏡の下にある、心にある強さ、それを感じとれるような気がした。

「お肉焼くわよー」

おばさんの声が庭に響き渡り、お腹を空かせた子ども達とオコジヨ、そして大人達が立ち上がる。

「タカミチさん、これどうぞ！」

「ありがとう、ナノハちゃん」

「どういたしまして！」

わたしはタカミチさんにお皿を差し出す。  
お肉にお野菜を乗せてタレも添えてある。

「うん、美味しそうだね、ナノハちゃんの分はあるかい？」

「わたしの分もあります。取ってきます」

と、予め用意してテーブルに置いてあった皿を手に戻り、芝生の上に敷いたシートの上に座る。

ドネットさんはおじさんと談笑中。

アーニヤお姉ちゃん達はおばさんと一緒にいて、ネカネお姉ちゃんはカモ君に野菜を食べさせている。

「いいのかい、僕のところぞ？」

「はい、タカミチさんをお願いしたいことがあるんです」

「え？ お願い？」

一瞬、間をおいてタカミチさんが答えた。

そしてわたしが発した言葉は、予想外の言葉だったのだらう。

「戦い方を、教えてくれませんか？」

「なっ」

タカミチさんの口から嚙んだ肉が皿の上に落ちる。

わたしはタカミチさんの眼から眼を放さない。

断られてもいい、それでもまた同じことを言うつもりだった。

「教えてください」

眼差しは決して揺るがない。

意志は変わらない。

どれほど時間が過ぎたのか。

折れるようにため息を吐き、頭をかいたのはタカミチさんだった。

「君のそういうところ、お母さんにそっくりだね。決して意志を曲げぬ強い人だった。だからかね、僕はその意志には逆らえない」

！…お母さん。

やっぱり、お母さんのことをタカミチさんは知っていた。

「あ、ありがとうございます！」

「ただし、僕は魔法の詠唱ができない。それ以外の気が魔力を運用した戦い方しか教えられるし、こっちでの滞在中に限られる。それでも構わないかい？」

「はい！ お願いします」

「はは、お安い御用だよ」

と、また大きいあの手がわたしの頭を撫でてくれるのだった。

【7】タカミチ来訪と弟子入り（後書き）

タカミチ弟子入り>というか、ネギも似た様なことでタカミチからのアドバイス受けてると思いました。  
ナノハは一步踏み込んだの形ですけど。

最初の方の安価でタカミチの妹になってたら容赦なく弟子でしたが！  
期間が短いので、一年ごとの出張で教えていくことになるはず。  
ウェールズでの滞在期間は一ヶ月ほど。  
基本だけを教えてく形ですね。

最終的に居合拳の基本くらいは扱えるくらいになるかも？

『居合崩拳・零式！』とか妄想してたわわ。

## 【8】カモ君の秘密

ウェールズ 6月

チャンプン！

音を立ててナノハはバスタブに張ったお湯の中に身を沈める。訓練で疲れきった肉体に熱いお湯が浸透していく。

「にゃー、極楽なの〜」

ミシミシ悲鳴をあげる体を完全に肩まで沈めて、わたしは染み染みと呟いた。

英国人で風呂が好きな人間はどちらかというところ希少だ。そして三歳児とは思えないセリフだった。

実年齢は実もう15に届くかという少女なのだが……同じ事である。

多少肉体に精神が引つ張られて幼児退行しているが……

『ナノハ、お疲れ様』

バスタブの縁で毛づくろいをするカモ君がねぎらいの言葉をかける。

日本から来たタカミチさんに居合い拳の手ほどきを受けて、ここ数日走りこんで体作りをしながら居合い拳の型を学んでいたのだ。今までもろくに体術など学んだことのないナノ八にとってはかなりのきつさだったが、わずか三日で居合い拳の基本の型を肉体が覚えてしまった。

驚異的な修得スピードに、教えを施したタカミチさんも吃驚するくらいで、才能があると褒めてくれた。

でも成長を阻害するからこれ以上の方法で鍛錬するのは禁止と言われてしまった。

でない、ジャック・ラカン筋肉達磨になっちゃうぞって、脅されたの……筋肉達磨は嫌なの……

『あれ試してみようかな？』

『あれって？』

『体術と併用するなら気との相性が抜群なんだって。だから自分の中の気を感じ取ることが修行で一番重要なんだって』

『なるほど、でもナノ八は魔力はすごいけど、気を使ったことないよね？』

『うん、魔力なら感じ取れるけど……まだ広範囲は無理なんだよね』

『え？ それってすごいことだよ。熟練の魔法使いでもそんなことができる人少ないし、すごいレアスキルだよ』

『はにや？ そうなの？ カモ君探すときに使ったんだ』

『それって……僕と初めて会ったあの森で？』

『そうだよ？』

『そうか……あの森の中で念話だけで僕を探すなんて無謀なことだよ。正直、助けが来るなんて思ってなかったし、ナノ八がいなければ多分死んでたかも……あの畏、かかった獲物の魔力を吸い取る仕掛けがしてあったんだ。気がついたときには遅くてさ……ナノ八が

いなければ本当に死んでたんだ』

『カモ君……』

今ではカモ君は家族の一員だ。

みんなもカモ君を家族同様だと思ってる。

ネカネお姉ちゃんが笑えるようになったのもカモ君の力が大きかったんだ。

でなければきっと、お姉ちゃんとわたし達も潰れてしまっていたかも知れない。

おじさん、おばさんだって大人だから言わないけど、心労で疲れていたはずだ。

でもそれを乗り切ったから、わたし達は本当の家族になれたんだ。だからカモ君がいなくなるなんて考えられなかった。

『ねえ、ナノハ。そろそろ、いいと思うんだ……』  
『ん？』

改まった様子でカモ君がわたしに向き直る。

『ここ数ヶ月、本当に楽しかった。厳しいこともあったけど、みんな一つになって乗り越えたよね？ 君達是一つだ。だからもう大丈夫』

カモ君の言葉に一抹の不安を覚える。

まるで、まるでそれは……その先は何だか聞きたくないような気がした。

手を伸ばしてわたしはカモ君を抱きしめていた。

『むぎゆ！？ ナ、ナノハ？』

『カモ君はわたし達の家族だよ！ だから離れ離れになんて決してならない。ずっと……ずっと一緒だよ』

『ナノハ？』

熱いものが、涙が零れて頬を濡らす。

カモ君の顔にもそれは落ちて行く。

『わたし……わたし……カモ君とお別れなんてしたくない！』

『……ごめん。本当はもっと早く言っつもりでいたんだ。君達を守りながら、平和に村で暮らす君達が幸せならそのまま立ち去るつもりでいたんだ』

『カモ君……』

『でも災厄はやってきた。もう立ち直れなくなるかと思った。でも君達は強さを見せてくれた。誰にも負けない、潰れない強さを。その強さがあれば……』カモ君は！』

それを遮る形でわたしは叫んでいた。

『カモ君はどう思ってるの。わたし達を家族だって思ってくれてるの？』

『僕達は…家族だ。僕、両親がいないんだ。叔父さんはいるんだけどね。だから、おじさんとおばさん。ネカネさん。アーニヤちゃん。そしてナノハと出会えて、まるで本当の家族ができたみたいだった』  
『うん……』

『正直に言っと、離れたくない。みんなと一緒にいたいんだ。ただ僕は……』

『僕は？』

『その…僕はオコジヨ妖精なんだ』

『うん、妖精？』

初耳かも…オコジヨの妖精なんているんだね……

『僕達一族は外に出るとオコジヨ妖精として幾つかの仕事をしなければならぬんだ』

『お仕事？』

『うん。その一つが遺跡の探検とかで、危険な魔法がないか探してそれを集めたり、魔法使いと従者の仲介とか…これは僕の仕事じゃないけど。とにかく魔法世界に関する仕事をする事になってるんだ』

『遺跡の探検ってどういうことするの？』

『基本的に魔法世界にある古代遺跡の発掘とかだね。それに従事して認めてもらえると、渡航免状が発布されるんだ』

『とこーめんじょう？』

『うん、この世界と魔法世界の行き来をするゲートの利用が面倒くさい手続きなしでできるようになるんだ。フリーパスだね。僕達一族には必要なもので、一人前のオコジヨ妖精の試験パスにもなってるんだよ』

『つまりカモ君は一人前のオコジヨ妖精になりたいんだね』

『うん、だからここにいたい気持ちは嘘じゃないけど、僕もやらなきゃいけないことがある。だから少し、ほんの少しだけ離れることを許してほしい』

『どれ…くらい？』

『三年、いや二年。頑張ればもつと短くなるかも知れない。とにかく魔法世界に貢献した証であるパスが貰えれば、後はフリーのオコジヨ妖精としてやっていけるんだ。』

『長い……』

『え！ や…頑張るから…その』

□ごもるカモ君。

離れ離れになるのは嫌だけど、カモ君はやるべきことをやることしてるんだ。

ほんの一時の別れ。

でもそれが終わればわたし達は一緒にいられるんだ。

『約束、だよ？』

『うめん……』

『約束の証拠だよ』

わたしは抱きしめてすっかり濡れそぼったカモ君の鼻面にチュッとキスをする。

『あ!?!』

『はにゃ!』

カモ君はしまったという顔をして叫んだ。

腕の中のカモ君がみるみる大きくなっていく。

オコジヨの白い毛が消えていく。

手に伝わるのはすべすべした素肌。

そして一人の男の子を抱きしめていた。

触れるほど近くに男の子の瞳があつて眼があつた。

そしてわたしは叫んでいた。

「にゃー!!--」

「うわああ、まっ、ちょっと待って!!--」

慌てて立ち上がろうとした男の子はバスタブの床に滑って転ぶ。

その先にナノハの頭があつて、二人は頭部をぶつけ合つて転がる。

「にゃ...にゃあ.....」

頭の中にスパークするお星様。

わたしは遠のく意識でその少年の名を呼んでいた。

ユーノ君……

「な、！ 何事！。 ナノハ大丈夫！？」

扉を乱暴に開けて、バスルームに飛び込んできたアーニヤはバス  
タブに倒れる二人を見て絶句する。

ナノハに折り重なるように同い年くらいの男の子が襲いかかって  
いる（アーニヤ視点）。

「な、な、な…何なのー！！！」

アーニヤは手当たりしだいに物を投げつける。

目標は立ち上がってアーニヤを困惑した顔で見つめていた。  
当然ながら何も何も身につけていない。

男の子の可愛らしいシンボルがそこにあつた。

「ま、待ってアーニヤ…ぐあっ」

アーニヤが適当に投げたデッキブラシ？ が脳天に直撃し、倒れ  
るが、追い打ちをかけるようにアーニヤは石鹸を投げつけて、起き  
上がりかけた男の子の顔に命中させた。

「来るな！ 来るな！ 来るなあああ！！」

「アーニヤ！ 何をしてるの！？」

そして騒ぎを聞きつけたアーニヤの母がバスルームに踏み込んだ時、そこは混沌とした風景になり果てていたという……

### ココロウア家・居間

居間ではココロウア家の重鎮であるおばさんが仁王立ちしていた。その後ろではネカネお姉ちゃんとおじさんが見守っていた。

「三人ともそこに正座！」

「はい」

「はい……」

「な、なんであたしまで……」

三者三様の返事が返る。

リビングの床に座らされているのは、ナノハ、人間になったカモ君、アーニヤである。

そして、ジト目でアーニヤは隣の少年を睨んでいた。

「あはは、何でだろうねえ……」

と、少年は頭に手をやって、のんきに笑っているのをアーニヤは睨みつける。

「ガルルウウ……」

「そこ、お喋りしない！」

鋭いお婆さんの叱咤が飛んで、牙を向いたアーニヤは瞬として小さくなる。

「さてと、大体の事情は聞いたよ。あんたがオコジヨ妖精でじつは人間に変身できるなんてね。お婆さん吃驚だよ」

「その…黙っててすいません」

「いいよ、今回は事故なんだろう？ それにあんた、カモ君じゃなくて、何だっけ？」

「ユーノ、ユーノ・スクライアです」

その名前に、アーニヤの隣のナノハがビクリと反応するのを、アーニヤは訝しむように見た。

ナノハがあたしに隠し事してたなんて……

お姉ちゃんとしての威厳が……

く…それにしても不覚だわ。

オコジヨに偽装してたなんて気がつかなかった。  
どうして今まで気がつかなかったのかしら？

ナノハも知らなかったみたいだし、多めに見て上げないこともないけど。

それにしてもこの淫獣え……

ユーノと名乗る少年はオコジヨ妖精だった。

そしてスクライア族の掟に従って魔法世界での仕事をしなければならぬのだという。

その話を聞いて、お母さん達は、あんたも苦労人なんだねえ、その歳で、としきりに感心していた。

なんか……むかつく。

ずっと一緒にいたのに今まで打ち明けなかった。

何よ家族の一人ですみたくない顔して、黙ってたなんて酷いわよ。

あんたを泣き枕にして泣いたことだってあったのに、中身は普通に男の子でこうして隣りに座ってるなんて何の冗談よ。

風呂場での遭遇を思い出してアーニヤの頭が沸騰しそうになる。

そんなアーニヤにユーノは笑いかけるのだ。

何、この無神経は……

思わず、アーニヤはユーノを掌底で張り飛ばしていた。

「これ！アーニヤ！！」

おばさんの叱咤する声が居間に鳴り響いて、ドタバタと母娘の追いかけてっこが始まる。

「はぁ……いつも通りだね」

正体がバレてしまったユーノ君が溜息をついた。

「うん、これから大変だね」

「そうだね、頑張るよ」

わたしはユーノ君の横顔を眺めていた。  
その顔は記憶にある少年より遙かに幼い。  
見た目の歳は私より一個上くらいにしか見えない。  
でもやっぱりこの世界のユーノ君はぶれない強さを持った子だった。

そんな歳で遺跡発掘の仕事をするのだ。

「みんな、意外と冷静だったね……どうなるかと思ったよ」

「ねえ、何で変身解けちゃったの？」

「え……そ、それは秘密なんだ……」

ユーノ君は赤くなってもじもじする。  
何だか怪しいの!?

わたしの詮索から視線を落としてユーノ君は黙ってしまっ。

「必ず戻るよ、ナノハ」

でも今は……その言葉があれば十分だった。

「うん、待ってるからね。戻って来る頃には私も強くなってるからね!」

「期待してるよ」

と、ユーノ君の手がわたしの頭に添えられる。

何だか顔が熱くなる。

胸がドキドキする。

何だろっ、おかしいな?

ユーノ君とした約束を胸にその日はベッドに眠りについた。  
全然眠れなくて、次の日は寝不足になってしまったけれど。  
そして二度の夜を経て、ユーノ君はみんなが見送る中、魔法世界へ通じるゲートに向けて、オコジヨの姿で駆け出した。

光りに包まれるゲート。

行ってしまったユーノ君。

でも大丈夫、ユーノ君は必ず帰ってくる。

そう、だって約束したんだから。

それから9月になり、わたしはメルディアナ魔法学校に入学した。アーニャお姉ちゃんと一緒の学校だ。

車椅子だけど、ネカネお姉ちゃんも苦労しながら学校に通った。

タカミチさんに教わった居合い拳の練習は欠かさない。

もつともつと強くなって、みんなを守れるようになりたい。

レイジングハートの術式解析による魔法開発は、学園図書室に忍び込んでいるんな魔法書を読み漁って術式を手に入れたから、かなり高度の術式を組めるようになった。

本当は忍びこむなんていけないんだけどね。

勉強はそれほどでもなかった。

座学とか記憶が主体となる勉強方法のものはほぼ満点を取れた。

魔法の方は周囲に合わせるのが難しくて何回もやりすぎちゃったかなあ……

おかげで学年トップをもらって、前の世界では成績とかイマイチ

だったから微妙な気分。

そしてあつという間に一年が過ぎて、再び出張してきたタカミチさんに居合い拳の基本は完璧と告げられ、新しい技をいくつか教えてもらったつもりもした。

二年目で一年飛び級して三年生になってしまった。

アーニヤお姉ちゃんと同学年になって、お姉ちゃんのメンツがとブーブー文句を言われたりして。

ネカネお姉ちゃんはメルディアナを無事卒業して行って、今は新しい技術で作った義足を慣らそうと家でリハビリに励んでいる。

一年は長いようで短い。

早くユーノ君に会いたいな。

何ヶ月かに一度、ユーノ君からの手紙が届く。

遺跡の発掘作業は楽しく、毎日が発見の連続だという。

ユーノ君から貰った手紙は捨てずに、今も大事に机に仕舞い込んでいる。

そして三年目がきて、さらに一年飛び級して五年生になりました。成績は相変わらずトップを維持。

「何だか、上手く友達できないなあ？」

「みんなどこか避けてるみたいで、嫌われてるのかも……」

「なんてアーニャお姉ちゃんに言ったら、みんなあんたが凄すぎてついていけないのよ、と言われてしまったの。」

「そういうもののかなあ……」

「友だちができないのは、とにかく前へ進まなきゃと、毎日タカミチさんに教わったことを実践し続けてたせいかもしれない。」

「その成果として瞬動と虚空瞬動を覚えることができた。」

「方向転換が上手くできないのが欠点だけどね……改良の余地あるかな？」

「後、自身との契約による魔力による肉体の強化は本当にすごくて、とろい私でも人並み以上の動きをすることができるようになり、周囲との隔絶感が半端ありません！」

「こづついつの時空管理局でもあったなあ。」

「でも周囲にすごい人いたから目立たなかったんだね。」

「今さらそんな事を自覚したりして。」

「居合い拳は気に乗せる概念を教えてもらい、何とか五メートル先の的に当てることができるようになっていた。」

「威力は魔法の矢一矢程度。」

「うーん、実戦には使えない？」

「でも体を動かすのは楽しい。」

「学んだことすべてを吸収していく感覚は何ものにも代え難い充足感がある。」

感を生み出す。

基本的な魔法に関してはもう学ぶことはなくなってしまった。

一度術式構成における論文を提出したら、アリアドネー魔法学院アカデミーに是非来訪して欲しいと丁重な招待も受けたことがある。

学業を理由に行かなかったけどね。

そんなこんなでわたしなりに充実した学校生活を満喫したら、ある日学校長先生に呼び出されました。

わたし、何かやらかした!?

そんなわけで緊張しながら分厚い学校長室の扉を開けるのです。

【8】カモ君の秘密（後書き）

駆け足だけどこの章はここまで、次回から小学校編のOPとなりま  
す。

実質八話め。

あれ展開遅いかしらん？

## 【9】日本への留学

学校長室の窓際に据えられマホガニーテーブルの背後の窓ガラスから陽の光が満ちて、わたしは眩しくて少し眼を細めた。

頭の両脇で結った髪がお気に入りの白いリボンと共に揺れる。姿勢を正して、わたしは正面を見つめた。

室内にいるのは三人だけだった。

一人は椅子に座り、背筋を伸ばして威厳を示す学校長、通称、おじいちゃん先生。

生徒達はみんな愛情を込めてその名で呼んでいる。

白い長いヒゲがトレードマークで常に優しさを眼に湛えている、みんなのおじいちゃんでもあった。

その横には水色の清楚なスーツに身を包んだドネットさんが立っていて、秘書らしく控えている。

わたしの姿を認めたドネットさんが口元に笑みを浮かべると、片手を振ってみせた。

「失礼します。ナノハ・スプリングフィールドです」

少し緊張気味のわたしは入口の扉を閉めて直立不動して挨拶した。ちょっと硬すぎた？

あ、あれかな：呼び出された理由って、図書室に勝手に忍び込んだことがバレたのかしらん？

封印のかかった禁術指定の本も封印解いて読んじゃったし、元には戻しといたけど、やっぱりバレちゃった？

もしかして退学とか……それは困るの……退学になったら偉大なマキス魔法使いになれないの。  
魔法使いテル・マキ

偉大な魔法使いになると世界のあちこちに行けるし、コネクションができればお父さんやお母さんの手がかりが掴める可能性が高くなるし、何よりネカネお姉ちゃんの足を治す事ができるようになるかも知れない。

だから退学は不味いの！

おじいちゃん先生はいつものように笑ってみせてるけど、実は雷ドカーンだったりするの！？

「これこれ、そんなとこに立つとらんでこつちまで来なさい」

「は、はい！」

あれ、違うのかな？

親しげで優しい声の響きにわたしはほっとする。

よかった、怒られるわけじゃないみたい。

おじいちゃん先生が本気で怒るのを見たことがない。

その度量は大きいけれど、こういう人が本当に起こると怖いかも

……

「ナノハ・スプリングフィールド君。来年は六年生じゃの、他の生徒とはうまくやっておるかの？」

「えと、はい。特に問題はありません」

飛び級二回もしたから最初は敬遠されたけど、今では溶け込めるようになった。

何よりも魔法術式の授業で先生を論破しちゃって、それ以来クラスのみんなの眼が変わった。

さらに全校集会のみんなの面前で、アリアドネーの魔法アカデミーから表彰されてからちよっとした有名人になってしまった。

いや、それまでも色々注目はされてたんだけど、それは遠巻きから眺めるといったもので、決して親しげに話しかけてくるようなものではなかった。

それが今では下級生、上級生を問わず、ナノ八の実技を一目見ようと、合同の課外授業では注目される始末。

どこへ行くにも注目を浴びて、少しばかりわたしの周囲は騒がしかった。

「去年提出された論文じゃが、実に斬新で革命的じゃった。いやいやわしも老いぼれるわけじゃ。君のように将来有望な偉大なる魔法使い候補マキキの生徒を持てたのは、開校以来の快拳の一つじゃな。もう一つはお主の父のナギじゃがな。あれは破天荒だったが、その娘は天才と来る。親子揃ってメルディアナに名を残すとは、まさに英雄の血じゃな」

「コホン、学校長？ 本題に入りましょう。脱線してますよ？」

学校長の隣にいたドネットさんが学校長に注意を促す。

「ああ、そうじゃな。さて、君にアリアドネーのセラス女史から感謝状が届いておる。何でも新術式の一部実用化が成功したらしくてな、そのための研究施設を作ったらしい。今でも諦めきれんらしくてな。ぜひアリアドネーに来て欲しいと言ったな。行く気はあ

るかね？」

「え？ アリアドネーですか…興味はありますけど。まだ学生です」

「うむ、そういうわけで、セラス君には悪いが正式に断っておいたわ。こっちも手放す気はないでな。ヒシシ」

と、おじいちゃん先生は肩を揺すってユーモアたっぷり笑った。

「さて、ナノハ・スプリングフィールド君、君は成績優秀であり、本校の教育プログラムを普通の生徒を遥かに上回る速さで修得し、二年ほど飛び級をしたが、すでに君は六年生が学ぶ課程をも修めておる。故に飛び級を持って来年は七年生になってもらうつもりだったんじゃが、少々有名になりすぎたようじゃ。連日取材の申し込みが来ているの。少しばかり対応が大変なんじゃ」

「は、はあ……」

取材って、まったく気がつかなかったの。

きつと内々で処理してたのね。

「さて本校には日本に姉妹校がある。麻帆良学園と言ってな。わしの友人がそこで学園長をしておる。事の次第を説明したら、では君を留学生として迎え入れてはどうかと打診が来てのお。どうじゃろうか、日本に留学してみる気はあるかね？」

「日本……」

「期間は一年。来年の春からの一年を留学期間に当てるつもりじゃ。」

行ってみるつもりはないかのー？ 六年生で学ぶ課程は修士済み扱いにするし、ちょっとしたバカンス気分で行ってもらって構わんぞ？ 向こうでは年齢に応じた小学生の学年で通学してもらうことになるかの」

えと…つまり火消し期間なの？

おじいちゃん先生はニコニコ笑ってるけど、ドネットさんは結構真剣な顔。

あれ…ドネットさんに色々皺寄せが行ってるのかな……

苦労させてごめんなさい！

わたしは心の中でドネットさんに謝ってみせた。

「日本の留学に当たって問題なのは保護者の問題なんだけど、それについては身元の引受は麻帆良学園教師のタカミチ・Ｔ・高畑氏が後ろ盾になってくれるわ。それと表向き麻帆良学園は魔法に関わらない一般生徒が多いの。だから向こうでの魔法の使用は極力控えることが求められます。色んな意味でこのメルディアナとは魔法認識の違いがあるから、その点は気をつけて欲しいの。何せあなたは目立ちますから」

「あはは…はい」

ドネットさんの言葉にわたしは頷いて答える。

日本かあ……

一度日本の地図をじっくりと見て確かめたことがある。

生前の高町なのはが生まれた海鳴市は存在するし、地理もわたしの知る日本とほぼ同じだ。

違うのはこの世界に魔法が存在し、地球ではその存在が隠匿され、魔法を知らない人々はすぐ間近に魔法使いがいても気がつかないでいるということだ。

認識阻害という魔法で、魔法の術式に組み込まれる基本魔法ともなっている。

だから一度行ってみたかったのだ。

もしかして、もう一人の私、高町なのはが存在するのかと……自分と鉢合わせとかしちゃったらどうしよう！

過去未来を行き来する映画にそういうのあったよね……

未来を変えてはいけないとか！

あれ、でもわたしは生まれ変わった存在だからそういう枠組みじゃないのかしらん？

と、思考をあらぬほうに飛ばしていると、おじいちゃん先生と眼があった。

いけない、いけない……返事しないとね。

「ぜひお願いします。日本に行ってみたかったです」

ペコリとお辞儀をしてみせると、おじいちゃん先生とドネットさんが視線を交わせ合う。

「決まりじゃな」

「そうですね」

「では来年の春から一年間、メルディアナ校からの留学生として行ってもらうことになる。ナノ八君」

「はい？」

「君のような生徒を持っててわしは幸せじゃ。我らの誇りであり、我らの代表としてその名に恥じぬ振る舞いを期待しておる。わしらの話はお終いじゃ。下がってくれていいぞい」

「はい、ありがとうございます。頑張ります」

わたしはピンと背筋を伸ばして答えていた。

安堵感と少しばかりの興奮が見を包んでいた。  
退室して寮までの長い廊下を歩く。

通りすぎりに上級生の女の子達がナノハに手を振ってきて、同じように応えると揉みくちやにされたりして、わたしってすっかりいじられ役になってる！？

えと…ナノハ・ファンクラブ…何それ？

と、本人のあずかり知らぬところでファン・クラブが立ち上がったいたり、有名になるのも考えものだねと思う。

時空管理局にいた時もある有名だったらしいけど、こつこつ風なのはなかったなあ……

日本に行けるんだ。

向こうで友達できるかな？

ココロウア家の人になんて言おう？

アーニヤお姉ちゃん怒るかな？

ネカネお姉ちゃん、一人になっちゃう。

わたしは馬鹿だ。

もう少し考えてから返事すればよかった。

夕暮れ時の中庭が見えるテラスでわたしは深い、深い溜息をついた。

## 学校長室

机を挟んで向い合う学校長とドネット。

白い見事な長いヒゲを学校長が手で梳いた。

「ふう……行ったのお。これで懸案の一つは解消じゃの」

「本当にこれでよかったですでしょうか？」

「何、仕方あるまい。あまりこちらに注意を向けられると不味いしの。アリアドネーの連中にお灸を据えてやりたいところじゃ」

「それはもう十分ではありませんか？ セラス女史の要請を無下に断ったではありませんか」

「あのお嬢ちゃんはわかっておらんな。英雄の娘をそうホイホイと渡せんよ」

「しかし麻帆良学園には送るのですね。どのような意図が？ 例えご友人でも……」

「何、あやつならそうむざむざと利用しようとする輩を近づけさせぬよ。日本の魔法協会はこちら側とはあまり関わりがない。新世界の、特に元老院の連中を寄せ付けないことが肝心じゃ。ここではそろそろ限界なのもある。英雄の血とは言ったが、あの娘自身が台風の目じゃったな。少しばかりわしらの認識が甘かったとも言える」

ドネットが腕を組んで考えこむ素振りを見せる。

「新術式の開発の件ですか？ あのデバイス・システムという」

「うむ、むしろとはまったく発想の出所が異なるが、あれを理解したセラスのお嬢ちゃんは流石よ。だが今の魔法界の風潮からは逆行する技術。特に偉大なる魔法使い<sup>マギステル・マギ</sup>を目指す者からすれば眉唾もの新術式じゃからな」

「優れたシステムであつてもですか？」

「うむ、どちらかと言えば、あれは軍人が好みそうじゃわい。戦争などなりふり構つてはいられんからの。だが今は戦争の時代ではない。新しい世代を育む時代よ」

「アリアドネーに渡すわけにはいきませぬね。その力の拡散も事前  
に防いだと見ておきましょう」

「打てる手があるうちに打っておくのがわしらの務めよ。ドネット君には日本に飛んでもらうことも検討しておる」

「わかりました」

「元老院や【<sup>コスモエンテレケイア</sup>完全なる世界】が動く前にのお………」

学校長の眼が細まって虚空を睨みつけていた。

## 【9】日本への留学（後書き）

これまでの話の一部書き直しをする予定です。  
1～8話に追記、修正、削除をしていきます。  
大きく話が変わる部分はありません。

## 【10】ユーノ失踪！？

ユーノからの手紙

ナノハ、元気にしていますか？

今僕はアリアドネーの発掘チームと遺跡の調査発掘に来ています。約束した二年を越えてしまったことはごめんなさい。でもあと少ししたら帰れるから待っていてください。長引いた理由は、思ったよりも遺跡の規模が大きかったことと、仕掛けられた魔法の罠を解除するのに戸惑っていたからなんだ。僕達スクライアの一族はそういうのにすごく鼻が効くんだ。おかげですつとき使われてただけだね。

でもおかげで現場監督になれたんだ。

僕みたいな子どもには大役だけど、任されたからには一人の怪我人も出さずわけにはいかない。

今住んでるのはテントでみんなそこで暮らしてる。

中には助っ人に来てくれたオコジョ妖精の仲間達もいて、作業も効率良く進むようになりました。

多分、あと三ヶ月もあれば遺跡の調査は終了すると思う。

追伸：

日本に行くそうですね。

春前までには戻るから、僕も日本に行ってみたいな。

かしこ。

「なんでえ兄さん、恋人に手紙か？」

テントの中で手紙をしたため終えて封をしたユーノに千鳥足のオコジヨが話しかける。

遺跡調査で共に仕事をするオコジヨ妖精の仲間の一人だった。

「え？ 違いますよ。ナノハは僕の友達で」

「ほうほう友達かい？ 人間の女の子か？」

「はい、そうです」

「それってもしかしてよー！。あれか、あれだな？ ユーノ、てめえがキスした女の子なんだな！？」

「ちよ、声が大きいですよ！ 人前で止めて下さいよお」

僕は慌てて彼の口を塞ぐ。

「グフフ、人としての正体ばらした挙句、名前まで名乗りあった仲間なんだろうが。結婚したも同然じゃねえか。俺がおめえくらいの時にゃ、女になんてまるで縁がなかったのによ。まあ、それどころじゃなかったんだけどな」

そう、オコジヨ妖精は子どもの中に外に出され、試練を受けることが義務付けられているのだ。

いったん外に出れば大人同様の扱いをされ、厳しい世界に投げ出される。

しかし外に出たオコジヨ妖精のネットワークは発達していて、仲間の身に何かあれば、それとなくその情報が仲間に伝わるのだ。

ユーノが体験した事件や負った怪我のことも仲間内には伝わっていたはずである。

ついでにユーノの正体がバレてしまったこともだが……

スクライア族にとって、人としての姿をさらすのは余程の緊急事態か、心を許した相手にのみである。

彼がからかうのはつまりそういうことだ。

どうもナノハのことは、仲間内ではユーノの恋人で将来の嫁だろうと半ば確定しているようだ。

そんな将来のことなんてわからないのになあ……

僕は溜息をつく。

そりゃ、ナノハは可愛い子だけど、好きとかそういう気持ちはよくわからない。

ただあの優しい少女が今後も困難に投げ出されるであろうことは、嫌でも予測することができる。

英雄ナギ・スプリングフィールド。

サウザンドマスターの娘というだけで利用しようとする人間はいくらでもいるはずだ。

だから少しでも早くこの遺跡の調査を終わらせて戻らなきゃならないんだ。

僕の力を彼女に貸してやりたい。  
それに……たった一つだけ僕にもわかることがある。  
僕は彼女の、ナノハの側にいたいんだ。

「てーへんだー！！ チーフ、てーへんだよ！！！」

「え？ 何ですか？」

テントに一匹のオコジョが飛び込んでくる。  
その彼の慌てた様子に僕は立ち上がる。  
何か重要なことが起きたようだ。

「おいおい、何だつてんだよ？」

「アリアドネーの発掘チームが霊廟の扉を開けたんでさあ」

「「何だつて!?!」」

驚きの声が唱和する。

この遺跡調査で最も困難を極めたのは、霊廟と名付けられた巨大な遺跡の存在である。

何が収められているのか、誰が眠っているのかもわからないその遺跡は、魔法によって嚴重にシールを施されており、その結界には

うかつに触れることすらできない代物だった。

結界を破壊しようとするれば、霊廟そのものが傷つく可能性が高かったからだ。

スクライア族が協力すれば、一ヶ月もあれば結界を完全無効化できるのだが、そんな繊細でデリケートな重要作業を任せてもらえなかったのだ。

調査チームのオコジョ妖精の中でもそのことで不満の声が上がっているのを、ユーノが懸命に宥めて騒ぎには至っていない。

「でも、どうやって？」

「穴を開けたみたいですよ。防御の弱いところにこう、魔法のドリルでね」

「…本当に？ 強引すぎるなあ……向こうの人達って何でも魔法で解決するから……向こうの責任者は……」

「その責任者のインバークの爺さんが率先してやってるんでさあ」

僕は頭を抱えなくなる。

貴重な魔法の遺跡を平気で傷つけるなんて！

アリアドネー発掘チームの責任者であるインバーク氏は著名な人物だが、名誉欲が強い人物でもあるようだった。

僕達とも意見が何度か対立し、アリアドネーの発掘チームとオコジョ妖精の調査チームに分かれ、東と西と別々に発掘することになったのだ。

遺跡の調査が遅れていたのは、この対立があつたせいでもあつた。インバークチームが東で霊廟を発見したのだが、どうしてもこじ開ける方法が思いつかず、ユーノが監督するオコジョチームに、アリアドネー本部から応援の要請が来たのだが、インバークはそ

れを拒否したのだ。

そして僕や仲間の忠告を一切無視しての、突貫作業による開通である。

正直何がなんだかわからない。

遺跡を保存して守ろうという気がないのだろうか？

意見の対立があっても、そこは同じ遺跡を発掘調査するチームであるはずだった。

アインバーグ氏の個人的な名声と名誉への渴望がそうさせるのか、僕にはよくわからない。

「今すぐ行くよ！ みんなを起こして！！」

「へい！」

僕は指示をして駆け出していた。

「フハハハ、どれ、結界なんぞ呆気ないものじゃないか。オコジヨの小僧風情が能書き垂れおって。さあ、わしは中に入るぞ。お前達はここで邪魔者がこないように見張つとれ」

霊廟に無残に穿たれた穴を見ろして、アインバーグ老人は発掘チームの先頭に立って中に入り込む。

霊廟に描かれた彫刻などは、今では失われた生態系を表すものが描かれていたが、孔を開ける際に石棺を固定した痕が残り、貴重な

壁画は見るも無残に破壊されていた。

「ククク、ここにあるはずだ。【ユグドラシル・ドロップ世界樹の涙】がな」

狂喜の笑を浮かべたアインバークが霊廟の中に消えた頃、ユーノは霊廟の下にたどり着いていた。

その進路を塞ぐように発掘チームの数人が入り口を塞いでいた。

「なっ、まさかこんな……アリアドネーはこんなことを許しているのか？ アインバークさん！ 中にいるんですかー!?」

「悪いが帰ってくれ、通すわけに行かないんだ」

「何を言ってるんですか？ あなた達は何をしたのかわかっているんですか？ アリアドネーは……」

押し問答するユーノと発掘チームの青年。

「うるさいぞ、オコジヨ妖精。お前らごときが荣誉ある発掘チームに参加させてもらってるだけありがたいと思えっ！」

ユーノは突き飛ばされ、床に転がるが、隙を突いて青年二人の足を駆け抜け、霊廟の中に飛び込んでいた。

「あ！ くそ。待てえ」

背中に投げかけられる罵声を無視して、僕は霊廟の中を走り抜ける。

霊廟というのはあくまでも呼称にすぎない。

その実は巨大な建造物であり、何のために造られたものなのかは全くの謎だったのだ。

しかし、これは…この構造はまるで…と思考はそこで止まる。  
霊廟の最深部。

その間は一面葦に覆われていて、水面の揺らぎが波打ち、周囲は青白くほんのりと輝いていた。

台座とも呼べるその奥にアインバーグはいた。

恍惚の笑みを浮かべ、壁に刻まれた彫刻に沿ってできた溝から溢れ出る魔力に包まれていた。

「アインバーグさん！ 何をしてるんです」

ユーノの呼びかけに老人、アインバーグが振り向く。

「オコジヨの小僧か！ 貴様ここで何をしている!？」

「聞いてください、アインバーグさん。あなたは何が目的でこんな暴挙をしたんですか？」

「何がだと…貴様の狙いも同じというわけだな！ 死ね！」

「え!？」

アインバーグが杖を振りかざし、雷の槍がユーノに襲いかかるが、ユーノが手をかざすと氷の盾がそれを防いで散った。

「詠唱なしたと!? やはりお前は敵だ。【世界樹の涙】を狙う」

「何だつて?」

ユグドラシル・下ロゼフ  
【世界樹の涙】?

「ジューエルシート【願いの種】こそが我が主が求める至高の品。ありとあらゆる願いを叶える【ユグドラシル・ドロップ世界樹の涙】の結晶！」

あの眼…精神操作を受けている！？

僕はインバグと対峙しながら近づく機会を伺う。

インバグの手にその輝く石の結晶が見えた。

あれがそうなのか？

だとしたら、きつと表に出してはいけないんだ。

「やれやれ…木偶のくせに喋りすぎよ」

「何！？ お前、なんでここにいる？」

僕の背後、そこに立っていたのは先ほど見張りに立っていた青年だったが、声質が微妙に変化していた。

「ライアーマスク【偽りの仮面】解除」

その言葉と共に現れた顔は蠱惑的な表情を浮かべる金髪の美女だった。

「【アーティファクト】！？」

ユーノの呟きにその女はオコジョに一瞥をくれるが、すぐにインバグに向き直る。

「さあ木偶、その【ユグドラシル・ドロップ世界樹の涙】を渡しなさい。お前の役目はもうお終いよ。散々泳がせたんだから感謝しなさい。元々お前にその知識ははなかつたのだからね。いい夢は見れたかしら？」

「くそ、貴様も死ねえええ！」

「つまらない男……」

女は笑みを浮かべる。

ほんの刹那の瞬間、その姿が掻き消える。

あれは瞬動！？

「ぐ、ぐあは……き、貴様は」

アインバーグの背から鉤爪が飛び出し貫いていた。

「ドゥーエ。知っても仕方のない名前ですけどね。さようならアインバーグ」

ドゥーエと名乗った女が妖艶に笑う。

アインバーグの手から【ユゲドラシル・ドロップ世界樹の涙】が落ちて、ユーノの足元に転がっていた。

僕は震える手で無意識にその石に触れていた。

人が目の前で死んだ。

意見が対立したこともあったけど、同じ考古学者でもあった。

精神を操ってアインバーグに暴拳を起こさせたのは目の前にいる女なのか。

「目撃者、いえオコジヨ妖精よね。尚更生かしておけないわ。死に

なさい！」

ドゥーエの姿が掻き消え、振り下ろされる鉤爪の軌道は眼に捉えることができない。

どう逃げる、いやどう防ぐのかなど、考える余地も魔法を使う間も与えない速さだった。

一瞬のためらいがユーノの判断力を奪っていた。

ただ僕はここから逃げることを願っていたのだ。

肉体を切り裂く鉤爪、迸る鮮血。

願うならばもう一度君に……

そして【ユグドラシル・ドロップ世界樹の涙】が輝きを帯びてユーノを包み込んでいた。

「く、何っ!？」

迸った閃光にドゥーエの視界が白に染まる。

光が収束し消えた時、オコジヨの姿は【ユグドラシル・ドロップ世界樹の涙】と共に掻き消えていた。

何の痕跡も残さずに。

「逃げられただと……しかも【ジユエルシート願いの種】を発動させたのか。任務… 失敗」

ドゥーエは悔しげに呟いてすぐにその場を立ち去った。

そしてユーノ・スクライアは謎の失踪を遂げる。  
アリアドネー発掘調査団長アインバーク氏殺害の容疑をかけられて。

## 【10】ユーノ失踪！？（後書き）

ま、なんだね。

色々突っ込みどころ満載だけど、この世界ではこうなってるだけです。

ジュエルシードとかドワーエさんが登場したりとか、時系列は気にしないように。

なのは世界ではないので・・・

世界樹の涙＝ジュエルシードですが、キーワードは世界樹ですね。

力を使ったこの石がエネルギー補給のために現れるのがどこであるとか、ゲフゲフ・・・

安価しようと思います。

【ユーノを拾うのは誰？】

- 1．すずかかアリサ
- 2．原作2 - Aメンバー
- 3．佐倉愛衣か高音・D・グッドマン

番号指定と、キャラ名指定の上【感想欄】に書き込んでください。

なお2ではエヴァと茶々丸は含まれません（注意：すずかとセット）。

安価で原作キャラがユーノを拾うと、メインサブフラグが立つかもしれない。

この安価はメインストーリーそのものに影響はないものの、重要な立ち位置に今後立つかもしれないフラグです。

影が薄くなりがちな原作キャラに光が当たるかは票次第。

名前の上がつた中から作者が選ぶ事になります。

## 【11】旅立ち

翌年・3月ロンドン

ロンドン・ヒースロー空港から飛び立ったエアバスを見送る、アーニヤのツインテールが強い風で揺れていた。

そのすぐ後ろではアーニヤの父と母が同じように空を見上げて見送っていた。

ナノハとネカネの日本行きの見送りに、ココロウア一家総出で出ているのだ。

「行ってしまったなあ、アンナ」

「そうですねえ。二人いなくなつて寂しくなるわね」

「可愛い子には旅させろというけど、二人ともまだ子どもだ。ネカネちゃんはいいとしてもね。ナノハちゃんはまだ七歳だし」

「なるようになりますよ。何事も経験よ！ ドーンと構えてなさい。ナノハはうちのアーニヤよりよほどしっかりしてるし、ネカネちゃんだっているんだから。それにタカハタさんがついてくれるからね。うちらは二人がいつ帰ってきてもいいようにしてればいいんだよ」

「そうだねえ…グハ」

と、アーニヤの母のアンナは亭主の背中を叩いて景気を入れる。

なおアーニヤの本名はアンナ・ユーリエウナ・ココロウアで母親と同じ名前だ。

区別するために娘はアーニヤで母親はアンナと呼ぶのがココロウ

ア家の暗黙の了解だった。

「ほら、アーニヤ行くよ。いつまでも愚図ってないの」

「なっ、ぐ、愚図ってなんかないもん。埃が目に入っただけよ!」

「はいはい、今夜はアーニヤの好きなハンバーグでもしようかねえ」

「ほんと?」

パツとフェンスから身を離して、アーニヤは振り返って母親に体当たりするように抱きつく。

夫婦は顔を見合わせて笑いあい、視線で語り合う。

何だ、まだまだ子どもなんだなあ。

いやねあなた、強がってるのよ。

母親に背を預けて、すでに消えた飛行機の残照を追うようにアーニヤは再び空を見上げる。

何よ一年くらいすぐじゃない……あんたがいない間に追いついてやるんだからね?

だから見てなさいよ、ナノハ。

お姉ちゃんだってできるってところ見せないと、姉の威厳でものが落ちるのよ。

「さあ、行こうか」

父は右手を、母は左手を差し出すとアーニヤはその手を握りしめた。

親子三人は歩き出し、喧騒溢れる空港から歩き去った。

香港 雪広アリサ

雪広アリサは今年小学一年生になる純情可憐な女の子。

…なのだが、彼女はすこぶる機嫌が悪かった。

何よ、お父様ったら結局すっぱかすんじゃない。

不機嫌の理由は父親の不在からだった。

普段忙しく飛び回っている父親と先日香港で遊ぼうと約束したのに、先ほど電話で済まない、いけないと告げられ、ホテルの枕に激しく八つ当たりしたばかりだった。

おかげで香港にいる理由がなくなってしまった。

せっかくの春休みも無駄になり、むしろくしゃする気持ちをホテルから抜け出して帰るといふ行為で晴らしていた。

警備のたれについていたSPを巻くのは並大抵ではない。

だが一緒についてきたすずかのおかげで抜け出せたのだ。

すずかというのはアリサの友人であり、クラスメイトでもあり、今では雪広コンツェルンの化学部門でのメインプレーンである天才少女だった。

元々から仲が良かったわけではないが、あることをきっかけに、二人はなあなあでいつも一緒にいるようになった。

「全部っ！ お父様が悪いんだからね！」

「そうだねえ、アリサちゃん」

アリサの怒りに対してすずかはマイペースに答える。

こんなやりとりをすでに三回ほど繰り返している。

すずかも一度ギャフンと言わせてみたいんだけど……

アリサはすぐ横に座るすずかに視線を投げる。

大人しさを絵に書いたような少女で、長い髪にヘアバンドと、地味目だが清楚さを醸し出していて、そこらのお嬢様に負けない雰囲気身をまとっている。

その隣にいるアリサは雪広コンツェルンという日本最大の経済基盤を持つ大企業の社長令嬢だった。

すずかは天才少女であり、まだ七歳であるにも関わらず、その頭脳は今の科学技術の粋を集めたより先の知識と技術を生み出すのだ。まさに金の卵である。

雪広家にとっても重要人物に指定される一人だった。

その二人がSPなしで飛行機に乗り込んでいるのは奇妙なこと、いや非常識なことでもあった。

幼い子ども二人だけで機内に入れてもらえるのかという問題は、雪広コンツェルンの名前の前には無いも同然だった。

香港発・日本行きの手ケットを用意したのもすずかだったが、その際に気になる一言を漏らしてもいた。

歴史的瞬間の一コマですから、と。

あれってどういう意味かしら？

とんでもなく手際が良いのよね、この子。

まるで私が抜け出すの知ってたみたいに待ち構えてて、脱出ルートまで流れるように手配していた。

本当に同い年なのかしら？

すずかはアリサの視線を他所にお土産リストを片手に捲っていた。同居人のエヴァと茶々丸にお土産を用意したらしく、大量にあるので後から発送する手続きをしてあるようだ。

その手続きをしたのは、すずかが出し抜いたSPの警備主任なの

だが、そこら辺はまるで悪びれるまでもなかった。

大物ね、とアリサは半ば呆れてもいた。

アリサはさすがの同居人であるその二人のことをよく知らないが、一度会ったことがあるのだ。

普通じゃない人間には普通じゃない身内が存在するものだ。

一人はアリサと同じ金髪のすごい美少女で、名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルという。

見た目の年齢は十歳程。

アリサがあと四年しても追いつかないと諦められるほどの美貌を持つ少女で、もう一人は雪広コンツェルンも資金を出している大学の研究室から産み出されたAI付き人型ロボット、絡繰茶々丸だった。

その三人との関連性はよくわからないが、危険な人物ではないことはわかっている。

こと麻帆良学園都市においてはロボットが闊歩しているくらいは常識の範囲内だ。

アリサもロボットが喋って自分で考えるくらいは普通だと思っている。

何せそれが常識の世界だからだ。

それに雪広家の人間ならば、その程度の常識外を異常と認識してなどいられない。

科学・化学で説明できる範囲のものならばそれは異常ではないというのが家訓である。

その点、姉のあやかはその認識が甘い。

将来の雪広を背負って立つにはまだまだ甘いところばかりだが、アリサは姉のあやかが大好きだった。

その友人の神楽坂明日菜もアリサにとって大事な友人の一人である。

アリサの立場や家のことを気にせず接してくれる人間は希少である。

その点、すずかが筆頭なのだけど、彼女は彼女で特異性が目立つ人物でもあった。

常識的な人間の範疇に納めるのであれば、アリサの近くにいる常識人は姉のあやかと明日菜だった。

もっとも、あやかもアリサが絡むと人が変わるのだが……それはあまり気にしないことにしよう。

物思いから覚めると、飛行機が滑走路を走り始める。

今さらのことだが、置いてきたSPにはお咎めがないようお父様に言っておこう。

すでにアリサに怒りはない。

突っ走って発散させた後は、後に引きずらないのがアリサの短所であり長所である。

アリサの本質はその切り替えの速さと素直な真っ直ぐさにあると言っている。

雪広コンツェルンの頂点に必要なのは立場に胡坐をかいた鈍重な人間ではない。

その点に置いて、アリサの気質は姉あやかを差し置いてでも両親の期待がかけられるのは必然だった。

姉のあやかはアリサにぞっこんベタぼれで、言うのもあれだが一種の病気である。

そのせいか嫉妬されたことはなかった。

むしろ、そんな重圧からアリサを解放しようと思えしてくれていた。

姉の優しさは毒でもあり、救いともなる。

だからこそ姉には変わってほしくなかった。

それがアリサの唯一の願いであり、望みでもあった。

機内・月村すずか

「全員動くなあ！俺達は銃を持ってるぞ」

あら、なんででしょうね。

この頭の悪い一言は……悪役ってこんなものなのかな？

全員がストキングを頭から被り、言われなくてもわかるのに銃を振りかざして乗客を威嚇している。

その光景にすずかは溜息をついた。

早く終わらないかしら？

月村すずかは知っている。

このハイジャック事件がものの見事に失敗することを。

そして誰一人、乗客は負傷することなく、定刻通りに空港に降り立つことを。

そう知っているのだ。

だが……

「んー！」

「ガキは大人しくしてな。暴れなきゃ手荒にしないからよ」

「んーんん、んー！（離しなさいよー！）」

えと…何で捕まってるのが私達なんでしょうか？

えつと歴史介入の修正力か何かですか？。

お願いですからアリサちゃん、その覆面お化けの言う通りにしてくださいね。

予定ではこんなはずではなかったのですが、まさか人質本人になってしまうとは不覚もいいところです。

すずかの背に冷や汗が流れる。

目線でアリサに合図するものの、気の強いアリサは覆面男を睨みつけていた。

さすがに小学生の女の子に乱暴なこととはできないだろうなどと悠長には考えてられませんね。

こ、これは不味いのかしら？

すずかは何とか自由になる手でポケットの上をなぞる。

いざというときの切り札がそこにあるが、それを使うのは本当に最終手段だった。

何せこの世界には存在しないものであり、この世界での唯一の存在であるオリジナル・デバイス・レイジングハートとは異なる未来の産物である。

魔法世界にその存在をばらす訳に行かない。

この機内にもすずかが知りえないだけで、魔法関係者が他に存在するかも知れないからだ。

月村すずかは未来人である。

目的はこの時代である人物に接触することだった。

すずかの精神の高ぶりに応じて、そのセーフティ・ロックが解除されて念話が流れこむ。

『サー・マスター・スズカ。緊急事態でしょうか？』

『あら起きたのね、エアリヒカイト。そうね、ちょっとだけピンチかも知れない』

『マスターの体温、心拍数が上昇中です。敵を排除しますか？』

『うっん、ダメ。私達がいるせいでちょっとばかり狂いが生じたみたい。でも大丈夫、「彼女」はこの飛行機に乗っているもの。そう

よね?』

『サー・イエス・マスター。「彼女」は機内奥に確認できます』

『だから慌てなくていい。もし不測のことが起きたら仕方ないわ。やっつけてしまいましょう』

『サー・イエス・マスター・スズカ』

それは微弱に明滅して再び沈黙を保つが、すずかの合図があればいつでも起動する態勢を取っていた。

しかしその心配は杞憂に終わることになる。

香港発・日本行き飛行機に乗ったハイジャック犯はその十分後に壊滅したのだから。

そして捕まっていた人質も無事に解放され、それを救出し、犯人を鎮圧した「謎の少女」の姿が乗客の脳に記憶されることはなかった。

【11】旅立ち（後書き）

アリサ、すずか登場。

今回ナノ八出てないし。

沢山の評価ポイントをもらっています。  
皆さんありがとう。

文章評価平均：4

ストーリー評価平均：4+

と、思ったより高い・・・

作者的に読者視点で読むと、文章3 ストーリー3もあればいい方  
かと思つてましたが、評価には個人差はありますよね。

自分で書いたものはあまり客観的に見れないので、頂いた評価が自  
分自身の制作能力であると自覚できます。

今後も読んでやってくださいね。

## 【12】再会

ハイジャック事件から二日が経っていた。

事件当時の熱はどこへやら、すでに日常を取り戻し、世間はゴシップを追い求めて、くだらない番組を繰り返していた。

エアバスを乗っ取ったハイジャック犯達は日本政府に捕まったテロリストの同志達の解放を要求し、空港で籠城して政府と交渉するつもりだったと、後に犯人グループの主犯は語る。

しかし籠城どころか、ハイジャック犯達は同士討ちを始めて壊滅してしまっただ。

幸いなことにエアバスや乗客に被害はなく、「一度の発砲」すらなく事件は片付いてしまった。

日本政府の公式発表では、ハイジャック犯同士達の思想的な対立からの反抗があり、それが機内での対決になったと発表。

その混乱に乗じて、ただ一滴の血を流すことなく、日本の優秀な警察は犯人達を取り押さえることに成功した。

それが日本政府が世間に公表した正式見解だった。

そんなわけないじゃない！

アリスは読んでいた新聞を座席に放り投げる。

まさか何一つ公表しないで済ますつもりなのかしら？

馬鹿馬鹿しい。

第一、ハイジャック犯達は空の上で牙を向いたのだ。  
日本の警察が介入する余地などどこにもないのだ。

アリサは知っている。

あの事件がハイジャック犯同士同士討ちではないことを。

アリサは知っている。

謎の光が人質を捕らえていた二人を襲って気絶させたことを。

アリサは知っている。

その時一人の少女がいたことを。

記憶にあるのは、白い服をまとった女の子の姿だ。  
手に持った白い杖の白金の先端部分に収まった赤い宝石が印象的  
で覚えていた。

奇妙なことに顔は覚えていない。  
でも声を聞いたのだ。

「アリサちゃん！」と呼びかけたその声を。

そう、確かにアリサの名を呼んだのだ。

知り合いかと思ったが初めて聞く声だった。

そのことを確認する間もなく、戻ってきた犯人達が少女に銃を向けたが、犯人達は同時に不可視の何かに吹き飛ばされて気絶したのだ。

その間、わずか十数秒の出来事だった。

犯人グループの半分がそのたった十数秒で片付けられてしまったのだ。

そして少女はその後、操縦室のある先頭へと駆け出し、数分後戻ってきて機内後部へと駆けさって行った。

そして……事件は解決した。

これがアリサが知る事件内容の全貌だった。

誰に言っても信じてもらえないような内容であるが、確かに見たのだ。

そしてアリサと同じように人質になったすすずかに聞いたが、そんな少女は存在しなかったと言う。

信じられない一言だ！

そして事件後の乗客達の証言もその少女には触れず、犯人達が突然同士討ちを始めたと言ったのだ。

誰かが、いや全員が嘘をついている。

しかし周囲の人間がみんな同じことを主張する中で、アリサが謎の少女のことを証言しても、それはありえないの一言で終わらせられてしまうだろう。

つまりは黙っているのが一番だったが、アリサ自身がそれで済む

などと思ってもいなかった。

何よりはすずかだ。

あれだけ思わせぶりなことを言い、なおかつ何でも知ってるんですよという顔をしていながら、あれを見ていないなどとよく喋れたものだ。

大嘘つきである。

世間は見逃してもアリサは見逃さない。  
見てなさい、とっちめてやるんだから！

## エヴァ宅

「アリサお嬢様、到着しましたが」

「え？ ああ、そうね。鮫島はここで待っていて」

「はい」

アリサはリムジンから降り立ち、忠実なる運転手の鮫島が見送る中、森のロッジに向かって歩き出す。

頭の上で結った青いリボンが揺れる。

ロτζジの階段を上がり、ドアの前で深呼吸する。

いつもは表で待つだけで、定刻になればさすがが現れるのを待つのが習慣になっていたが、今回ばかりはそうもいかない。

「ごめんください！」

呼びかけからしばらくすると、トタトタトタと歩いてくる音が聞こえ、一人の少女、もといガイノイドであるロボット少女が顔を覗かせる。

その本人である茶々丸はゴシッククロリータを思わせる装束に身を包んでいた。

茶々丸の主人であるエヴァンジェリンの趣味が裁縫であることは知っていたから、その服もエヴァンジェリンが作ったものであるとうとアリサは推測する。

「おはようございます。ミス・アリサ、いつもより五分早いご到着ですね」

「おはよう、茶々丸。すずかは？」

「すずかさんなら……」

と、茶々丸がリビングに視線を投げかけると、すでに支度を終えて靴を持つすずかがいて、その隣ですずかにじゃれつくように抱きついているエヴァンジェリンの姿が目に入る。

「おや、今日は朝から珍しく来訪者かと思ったが雪広の娘だったか」

いたずらっぽさを湛えたままエヴァンジェリンはすずかにしなだれかかる。

「アリサちゃんおはようございます。エヴァちゃん、エヴァちゃんもお出かけでしょ?」

すずかはエヴァンジェリンの鼻先に人差し指をつけて、めっ!と  
いうような仕草をする。

「面倒くさい……ああ、茶々丸。制服どこだ?」

「クリーニングしてあるので取ってきます」

「まあそういうわけで私も忙しい。せつかくの客人だが茶は出せないぞ?」

茶々丸が奥に消え、ようやくすずかを開放したエヴァンジェリンがアリサに向き直る。

「いえ、いりません。すずかを迎えに来ただけですから。さあ、行くわよすずか」

「ちよつと、アリサちゃん!」

「失礼しました!」

アリサは強引にすずかの腕に自分の腕を絡めて、ロッジから連行するように表に出る。

「さあ、きりきり歩くのよ」

「アリサちゃんが強引です……」

「今日とはことんまで問い詰めるから、そのつもりで」

ニッコリと姉のあやかがするように優雅に笑ってみせる。  
笑顔は女の武器であるとは誰が言ったのか。

二人を待っていた鮫島がタイミングよく戸を開けて、アリサはずかをリムジンに押し込んだ。

「未成年略取誘拐です」

「学校行くだけでしょうが！」

「アリサちゃん、く、苦しいです」

「鮫島出して」

「はい、アリサお嬢様」

リムジンが走りだす。

それを窓から見送るのはエヴァンジェリンだった。

エヴァンジェリンはパジャマ姿のまま背伸びをすると、浮かんできた欠伸に身を委ねる。

「慌ただしかったな。何か用事だったのか？」

「マスター、制服です」

「ああ、着せてくれ。いい加減、【登校地獄】も飽いた……」

「はい」

「はい、じゃない。はいじゃ。私はいい加減ここに縛り付けられるのはうんざりなんだよ」

「でも、最近のマスターは楽しそうです。すずかさんといて楽しい

「ではありませんか？」

「楽しい……？ 私は楽しんでるのか？」

「マスターは近頃良く笑います」

「笑う？ ハッ！ 私は真祖だぞ。人間との戯言で本気になどならん」

着替えを終わらせてタイを結ぶと、茶々丸は側を離れる。

「未来人と友達になる吸血鬼など、どこの世界にいるというのだ」

それは独白となって漏れる。

「マスター、時間です。登校しないと」

「わかっている」

太陽の眩しさに目を細める。

陽の光すら克服した吸血鬼の真祖が呪いの一つも打ち破れず、【登校地獄】の呪いに甘んじて十数年が過ぎていた。

未だこの身の呪いは解けぬ。

『三年経ったら解きに來てやるよ。だからよ、エヴァ、光に生きてみるよ。そこにお前の生きる道、見つかるかもな』

かつて私に呪いをかけた男はそう言った。

だが約束の三年を過ぎても奴は現れなかった。

十年が過ぎて……奴、サウザンド・マスターは死んだという噂を聞いた。

確かめる手段はなかった。  
この身を縛る【登校地獄】を破る手段は一つしかなかった。  
しかしそんな機会など訪れようもない望みに過ぎなかった。  
この不死の身は力の大半を封じられようと、この身を維持し続ける。

まさに永遠の牢獄の世界。

エヴァンジェリンは笑ってみせる。  
「いっそ狂えてしまったら楽なのだがな。」

走りだしたリムジンはあつという間にロツジから遠ざかり、市内へ。  
そして学園都市の中心部へと向かっていた。

「で？　すずか、きりきり吐きなさいよ」  
「アリサちゃん、何のことかわかりません」  
「あのねえ…自分の言ったことくらい覚えておきなさい！　何が歴史的「コマよ、すずかのおかげで死にそうな目にあっただんじやないの！？」」

アリサは隣に座るすずかににじり寄る

「え？　なんのことですか？」

とぼけるすずかは本当にわからないといった顔を作ってみせる。

「しらばっくれるのね……」

「ええ、本当に何のことやら」

「こつてもかー」

アリサが両手を突き出してすずかをくすぐり始める。

「やつ あん だ、ダメえ。そこ、きゃあう」

「ほらほら、ん、ここが感じるの?」

すずかを抱きしめる姿勢でアリサが囁いて、その手が執拗に制服の上からすずかのウィークポイントを責め立てるのだ。

「はあう…あん、もうだめえ」

「さあ、楽になっちゃいなさいよ。体の力抜いて……」

「ひえ……」

アリサの執拗なくすぐり攻撃の前に、すずかはぐったりとした体を座席に横たえていた。

口から漏れる吐息は熱く、頬は赤く火照っていて、小学生の割に色気を発散していて、思わずアリサはドキドキしてしまっていた。

その時、突然の急ブレーキに二人は姿勢を崩す。

「きゃアッ!」

姿勢を崩して、二人は絡みあう。

「申し訳ありません、お嬢様。人が……」

「鮫島、確かめなさい！」

「はい」

すぐさま鮫島が飛び出して、危うく轢きかけた少女に駆け寄っていた。

「お嬢さん、お怪我は!?!」

「はにゃ? だ、大丈夫です。ぼうつとしてたので、ゴメンナサイ」

深々と頭を下げた赤毛の少女の口からは流暢な日本語が飛び出して、鮫島と共に降りたアリサを啞然とさせた。

そしてアリサは少女の制服に目を留める。

うちの初等部の制服……学年は同じくらいだろうか。

頭を上げた少女と目が合う。

なんて綺麗な眼の子だろうと、アリサは少女の瞳に見入っていた。青と緑のコンストラスト。

そして頭の中で引っかかる。

私……この子とどこか出会ったことある?

赤毛の少女も何故か動揺とした様子でアリサを見つめ返していた。

「あなた、怪我はないのね？」

「え、うん…その」

「乗って」

「へ？」

「同じ初等部の子よね。校門まで送るわ。どうせ行き先は同じでしょ？」

「えと、そうなのかな？」

「そうよ。時間ないんだから」

「じゃあ、お願いします」

鮫島が戸を開けてアリサは少女の手を引いて乗り込んだ。

「あら、こんにちは」

と、すずかが出迎えて、座席に三人並んで座っていた。

「私は雪広アリサ、この子は月村すずかよ。あなたは？」

「雪広？ えっと…ナノハ、ナノハ・スプリングフィールドです」

ナノハは頭を下げて、頭の両脇で結んだ髪がピョコンと可愛らしく揺れた。

可愛い子だった。

不慣れな感じから、もしかしたら留学生かなんかかも知れない。

去年辺りからそんな話があったような気もするし、多分、イギリ

スの子ねと、アリサは会ったばかりのナノハを観察していた。

心の中で、もし同じクラスになれば嬉しいなとか思ったり。

もしかしたら友だちになれるかも知れない。

そんな望みをちょっとばかり描いてみたりして。

そんなアリサの囁かな願いは叶えられるのだった。

職員室に向かうというナノハを案内して、そこで別れた。

そして一年生の教室で、幼稚園時代から知ってる顔がいたりするホームルームで、その少女の姿を再び見つけた時、アリサの胸は高鳴りを抑えきれなくなっていた。

「今年から一年間、日本で留学することになったナノハ・スプリングフィールドです。みなさん、よろしくお願いしますの！」

それがアリサにとって忘れえぬ、かけがえのない友人を得た最初の日になるのだった。

## 【13】ナノハ、日本へ

二日前 日本時間午後6時42分

麻帆良学園都市にほど近いマンションはまだ新築で、イギリスからの留学生を迎えるために急遽購入されたものだった。

家具一式も予め揃えられており、イタリアの家具などはそれなりに値の張るものだったが、留学生として、その同行人として日本についたばかりの二人は知る由もなかった。

マンションの三階の窓からは麻帆良湖が見えて、ここから学園内まではバスで十分ほどだった。

バスは「麻帆良学園都市・初等学部前」駅前広場に到着し、そこから小学校校舎までは歩きで通学することになっていた。

学園内と言うと、学園都市に存在するすべての校舎を指すため、正しくは初等部（幼稚園、小学校含む）、中等部、高等部、大学部の四つに区切って呼ばれている。

麻帆良学園都市 幼稚園から大学を含め、学生数は三万を数えるという、まさに学園都市の名を冠するに相応しい都市である。

麻帆良学園を中心とした、欧州ヨーロッパのフィレンツェを思わせる街並みは美しく、麻帆良は日本の中のヨーロッパとも呼ばれ、観光の一大スポットともなっている。

その成り立ちは明治時代に遡り、その完全洋式の街並みはかの巴里のように、どこまでも計算された図式のように構築されていた。

その中でも圧巻なのは世界樹と呼ばれる神木の存在である。

学園校舎敷地内に存在するその大樹こそが、麻帆良が麻帆良という存在であると足らしめる象徴でもあった。

「ふうー」

「どうしたのナノハ。溜息なんかついて疲れちゃったの？」

窓から外の景色を眺めるナノハに、車椅子に座ったネカネが尋ねる。

ゆったりとした白い、可憐なワンピースに身を包んでいるが、その足元は無骨な義足が付けられていて、アンバランスを生み出していた。

「うっん…そうじゃないけど」

ナノハは窓ガラスに映る自分を見つめたまま、振り返らずに答える。

「ん？」

一瞬置いて、ネカネが首を傾げてナノハに笑みを見せる。いつもこうして、すぐに答えがない時は間を置くのだ。

そしてそのタイミングはいつも絶妙だった。

「あのね…怒らない？」

「あらあら、私が怒るようなこと、ナノハはしたのかしら？」

笑顔を保ったままのネカネにナノハは罰が悪そうに答える。

「魔法使ったこととか？」

「それについては色々あるけど、仕方ないって思うわよね？」

でしょ？ とネカネはナノハと視線を合わせ、見つめ合う。

「うん……」

「ユーノ君のことか考えてた？」

「ユーノ君……」

その名前に耐えていた気持ちが負けそうになる。

泣きそうになるのを必死で耐えていると、ネカネが両腕を広げていた。

わたしはその腕の中に身を預けていた。

お日様の匂いがした。

それがネカネお姉ちゃんの匂いだった。

「大丈夫だから……ユーノ君はきつと無事。何かの間違いよ。そんなことができる子じゃない、そうでしょ？」

「うん……」

優しく諭すネカネお姉ちゃんの声にわたしは頷いていた。

ユーノ君が向こうで行方不明になったと聞いた時、わたしは探しに行こうとしたのだ。

家のみんなが必死になだめすかしてわたしを落ち着けさせて、で

も何日も心配で眠れなかつたんだ。

そうしたらアーニャお姉ちゃんとネカネお姉ちゃんが一緒に寝てくれて、不安な夜は抱きしめてくれた。

だから多分、今は大丈夫なつもりだった。

でもやっぱりユーノ君がどこで何をして、もしかしたら苦しんでるのかも知れないと思うと胸が張り裂けそうになる。

だって、ユーノ君はわたしの大切な家族なんだから。

人を殺して逃亡中だなんて信じることはできなかつた。

「今日は大変だったわね。今夜は美味しいもの食べたいな。ねえナノハ、日本の美味しいものって知ってる？」

「んふふ、作ってあげるよ！」

「ええ！？ ナノハ、日本食作れるの？」

「うん！ ちゃんと一人で作れるよ。見ててね。ってその前に買い物かな？」

「あら、楽しみ」

微笑むネカネお姉ちゃん。

わたしはこの人の笑顔を守りたい。

だから今日起こった事件で魔法を使ったことは後悔しない。

同日の三時過ぎに香港経由のエアバスは日本に無事に到着した。

ちよつとした事件があったが、それは一人の少女の手によって解決され、今頃は事件に関わった対象者への処置は全て済んだ頃だろ

う。

処置というのは簡単な記憶の操作だ。

魔法が明るみにならないよう、認識障害と忘却の魔法を組み合わせた暗示で記憶を操作するのだ。

派手な魔法を使い、正体を声高に叫んでいたりしない限りは、この程度の暗示で十分とされていた。

仮に効かなかったとしても、個人の言葉程度ならば何ら影響はないと見なされるのが大半だ。

つまり魔法バレしても、集団意識に魔法を別のものと認識させることで記憶を操作するのだ。

人間の脳の記憶そのものを偽の記憶に上書きするのは極めて高度な魔法なので、今回のようなケースに用いられることはほとんどない。

見習いから一人前の魔法使いになる過程で、誰もが一度は簡単な《忘却》の魔法を習うのが常識だった。

ナノハとネカネが空港に降り立って最初に目撃したのは、魔法関係者ならばわかる、その筋の機関の人間達の出迎えだった。

ナノハ達は一番に連行され、尋問を受けることになった。

とはいっても取り調べに顔を出したのは麻帆良学園からの魔法先生が数人で、空港の魔法関係者を交え、終始和やかな雰囲気を取り調べは行われた。

魔法を使ったことへのお咎めはなしとされた。

その足で迎えるの車に乗せられ、二人は麻帆良に向かい、このマンションに連れてこられたのだ。

ナノハの表情が優れないのは、長旅で疲れたというせいだけでも

なかった。

あの時　人質に取られた少女二人を見て、わたしは冷静さを忘れたんだ。

犯人達が身近にいた乗客を連れ出して人質にしたのを見たのは、わたしがトイレに行った後のことだった。

怒鳴り声と喧騒、ただならぬ気配に、用を足してトイレから外を伺っていたら突然覆面の男が現れたんだ。

その男が私を捕まえようとするから反射的に居合い拳を使っていた。

放った衝撃で気絶した男は銃を持っていた。

ネカネお姉ちゃんが危ない。

そう思って後ろの席に戻ろうとした時だった。

「止めなさいよ！　痛いってば」

一人の少女の声が聞こえた。

遠い記憶にある懐かしい声。

再び会うことは叶うまいと思った人の顔。

そこに二人の少女達がいた。

アリサちゃん

すずかちゃん

大切な人達。

例えば今、彼女達にわたしの記憶がなくても、かつてわたしが心を預けた大切な人達。

その人達に銃口が向けられていた。

再びトイレに駆け込み、深呼吸してわたしは胸元の赤い宝石を握りしめた。

『レイジングハート』

『イエス・マスター？』

『行くよ』

『しかしここは機内ですよ？』

『お願い…レイジングハート』

『All Right』

「レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by ready .』

Setup  
『』

白いバリアジャケットにレイジングハートを携え、ナノハは目を見開く。

そこにあるのは決意。

「必ず助けるから」

ネカネお姉ちゃんも心配だけれど、座席は最後尾だから危険は少ないと言える。

「縛れ、バインド」

《Chain Bind》

ナノハの足元に気絶して横たわる男をバインドで拘束する。

「行くよ」

『はい』

その言葉を吐き出してナノハは飛び出す。  
短い瞬動を発動させ、一気に座席の中央に躍り出る。

「デイバインツ！」

《Divine shooter》

ナノハの周囲に桜色の光球がいくつも発生して、二人を拘束する  
男達に向かって放たれる。

「風よ！」

光球によって弾き飛ばされる男達。

その衝撃でアリサとすずかも投げ出されるが、どこからともなく  
吹いた風が二人を包み込んで守る。

少し遅れて、残った光球が男達に命中する。

【非殺傷】とはいえかなりのオーバーキルである。

しかし今は頭に血が登っていてそれどころではなかった。

「アリサちゃん！ すずかちゃん！」

駆け寄り、その顔を覗き込む。

よかった…怪我はしていない。

「ん……あ……」

アリサが目を開く。

「だ、れ……？」

「ごめんね……」

わたしは立ち上がる。

やると決めたからには最後までやり切る。

吹き飛ばした二人にバインドをかける。

前の方から覆面の男達が姿を現していた。

そして銃を構え何かを叫ぶ。

知らない国の言葉だ。

## 瞬動

突然目の前に現れた少女に驚愕する男達。

次の瞬間、三人の男達を居合い拳で吹き飛ばしていた。

正確に鳩尾をついた瞬速の打撃に声を発することもなく崩れ去る。

「六人」

倒した男達の数を数える。

残るは先頭、操縦室だ。

開け放たれた操縦室にはリーダーと思わしき男がパイロットに銃を突きつけていた。

現れた少女に戸惑いの素振りを一瞬見せるが、通路の向こうに倒

れる仲間を見て驚愕すると、銃口に手をかけ、それをナノ八に向けていた。

「遅いよ」

懐に飛び込み、腹に弱めの一撃を加え、屈んだところを顎を狙って掌打を放つ。

鈍い音を立てて天井に男の頭部がぶつかり、落ちて倒れた。少しばかり血が飛び散ったが、生きていることを確認する。

バインドで拘束し、パイロットに英語で犯人達は全員拘束したとだけ告げて、そこを去る。

再び戻ると、泣きじゃくるアリサを抱きしめたはずかと目が合った、様な気がした。

すぐにすずかはアリサに顔を向けて、一言二言話しかけている。本当なら話しかけて無事を確かめたい、その気持ちを飲み込んで二人を背にわたしは駆け抜け、さっきのトイレに駆け込んで変身を解くと、何食わぬ顔をして座席の最後尾に向かった。

周囲はざわめきに包まれている。

何が起こって事態がどうなったのかを確認する乗客がスチュワードスに話しかけていたり、抱きあう子ども達もいた。

もう大丈夫だからね。

わたしは笑いかける。

そして、わたしは未だ何があったかも知らず、座席で毛布に包まって眠るネカネお姉ちゃんの隣に座った。

喧騒は静まりつつある。

ネカネお姉ちゃんが軽く寝返りを打つけど、目覚める様子はなかった。

ああ、わたしも少し眠いかも…飛行機が向こうに着くまで間があった。

フワア、と欠伸が漏れて、スチュワーデスさんに毛布を頼んで、目を瞑る。

そして睡魔に身を任せて眠りについていた。

### 【13】ナノハ、日本へ（後書き）

【10】話で安価中。

まだ間にあう…間に合わなくなっても知らんぞー！！（ベジータ風）

ナノハ視点でのハイジャック事件のあらましでした。  
まだ続き書くかも…

安価内容ハリハリ

安価しようと思います。

【ユーノを拾うのは誰？】

- 1．すずかかアリサ
- 2．原作2 - Aメンバー
- 3．佐倉愛衣か高音・D・グッドマン

番号指定と、キャラ名指定の上【感想欄】に書き込んでください。  
なお2ではエヴァと茶々丸は含まれません（注意：すずかとセット）。

安価で原作キャラがユーノを拾うと、メインサブフラグが立つかもしれない。  
しれない。

この安価はメインストーリーそのものに影響はないものの、重要な立ち位置に今後立つかもしれないフラグです。  
影が薄くなりがちな原作キャラに光が当たるかは票次第。  
名前の上だった中から作者が選ぶ事になります。

【14】神楽坂明日菜

同日 日本時間午後7時01分

ピンポーンと、玄関でチャイムが鳴った。

「お客様かしら？」

顔を上げたネカネが玄関の方に視線を投げかける。

「あ、出るね」

立ち上がったナノハが玄関に向かうと、ドアの向こうに声をかける。

「どなたですか？」

「高畑です。今晚は、ナノハちゃんかい？」

すでに聞きなれた、もう身内と言ってもいい人物の声にナノハの警戒心は解ける。

「ネカネお姉ちゃん、タカミチさんだよ」

と、来訪者の名を告げる。

「入ってもらいましょうよ。久しぶりよね」  
「うん」

チエーンを外して、ナノハはタカミチを迎え入れると、体ごと思  
い切り抱きついていていた。

「にゃー」

「お、やあ、少し背丈が伸びたね。ネカネちゃんもお久しぶり」

「はい、お久しぶりです。いつも気を使っていたくださりありがとうございます」  
「ざいます」

タカミチがネカネに挨拶すると、ネカネも丁寧に頭を下げる。

タカミチの優しい穏やかな目がナノハに向けられ、自然に頭を撫  
でていた。

すでに二人の間では定番になった再会の挨拶だった。

その二人に関しては、まるで親子かお兄さんみたいね、というの  
がネカネの意見だった。

「えと、あのー……」

その三人の空気についていけない部外者の付添人が一人、玄関  
口で立ち尽くす。

すっかり忘れられた形の、オレンジ髪でツインテールの少女が買  
い物袋を提げたまま立っていた。

どこか啞然とした表情でプルプル震えている。

「ごめんごめん、明日菜君。入ってくれ」  
「は、はい」

誰だろうか？

わたしはそのオレンジ髪の少女を観察する。

歳はナノハより随分と上だけど、ネカネお姉ちゃんよりは下のようだった。

見ていたことに気がついたのか、明日菜という名の少女がわたしをちよつと睨んだ。

特徴的なその瞳の色は、左が紫色で右が緑色だった。

思わず、まじまじと見つめてしまうのを、明日菜が慥然とした顔で見つめ返していた。

はにや…失礼だったかしら……

「神楽坂明日菜君だ。初等部の六年生。彼女の後見人を僕が務めてるんだ」

「神楽坂…明日菜です。今晚は……」

「今晚は、明日菜さん。タカミチさんにはウェールズでお世話になったのよ。私はネカネよ。それでこつちが」

ネカネがよどみのない日本語で挨拶する。

発音にまだ癖があるが、かなり流暢な日本語だった。

日本語を教えたのはナノハで、わずか三ヶ月あまりでこのレベルに達していた。

メルディアナでは秀才と呼ばれていたネカネだからかもしれない。

「ナノハです！ 今晚は、明日菜さん」

「あー…その」

「はは、ちよつと人見知りしてるみたいだね。明日菜君、彼女達の後見人が僕なんだ。君と同じだね。日本には着いたばかりだから、今日は日本料理を作ってあげようかと思ってね」

「まあ、嬉しいです。ねえ、ナノハ？」

「うん、何を作るの、タカミチさん？」

「鍋料理だよ。まだまだ夜は冷えるしね。体が温まるよ。鍋は台所に入ってると思う」

いつの間に鍋が！？

というより何故あるのか疑問に思ったんだけどね。

台所に入り込んだタカミチさんが鍋を取り出してみせる。

「ほら、これ。この間、市場でいいのがあったから仕入れてきたんだよ」

「高畑先生、もうはじめちゃっていいですか？ 邪魔ですう」

「え？ ああ、ごめん」

明日菜が台所に入ってタカミチを押し分けると、材料が入ったビニール袋を置く。

「あと、男子厨房に入るべからずです！ さ、行った行った」

「わかった、わかった。仕方ない」

「うーん、冷蔵庫は空ね。問題なしっ」と

余念なく厨房のチェックをする明日菜の横にナノハが立つ。

「何？ おこちゃまはあっち行ってなさいよ」

「わたしも手伝います！」

「はい？ いいってば」

「何でもお手伝いします」

「いや、いいって言ってんだけど……わかったわよ。でも包丁はダメ。食器の用意とか必要になったら呼ぶから、あんたはあっち行ってなさいよ」

「はい」

と、明日菜の言葉に返事をしてナノハはテーブルの椅子を引いて座ると待機する。

素直すぎる…毒気を抜かれて神楽坂明日菜は脱力する。

「まったく、何でこんなことになってるのかしら……」

思わず言葉に出して今日の不運を呪う。

今日はスーパーのバーゲンセールを覗こうと買い物カゴを片手にすると、同じようにカゴを持った高畑先生とばったり顔を合わせたのだ。

高畑・T・タカミチは明日菜の後見人だ。

学部は異なるが、タカミチは教師であるので、明日菜は高畑先生

と呼んでいる。

「丁度いいところにいたね。明日菜君、今日は一緒に鍋でもどろどろい」

「え！？ いいんですか？」

「ああ、人数は多いほどいいからね。どうだい？」

「行きます！ 鍋、食べます！ むしろ喜んで！」

神楽坂明日菜は高畑・T・タカミチのことが好きだ。

その心に疚しいものはないが、明日菜は小学生でタカミチは中等部の教師なのだ。

年齢の差もある。

だからどうした。

でもどうしようもない関係もあることはわかっていた。

こうして食事に誘われるのは僅かな接点で、なおかつ数少ないチヤンスの一つだった。

明日菜は二つ返事で承諾して買い物済ませます。

二人分にしては多いなと思いつながら。

そして連れてこられたのはとあるマンション。

わかっていた、わかっていたつもりだった。

斜め上の希望は今や斜め下にまで落ちこちている。

野菜を切りながら、泣いたら泣いてしまいたい気分だった。

紹介されたのは足の不自由な金髪のはっとするような美少女と、その妹らしい赤毛の少女だった。

ナノハと名乗る少女は椅子に座ってこちらを見ている。

包丁を動かす手は止まらない。

何よ？

後ろ目にナノハが明日菜の動きを目で追っているのがわかる。

左右の瞳が違うという共通点を持つ少女。

ナノハの瞳は右目は青く、左目は緑色。

ヘテロクロミア  
虹彩異色症とも呼ばれ、バイアイやオッドアイとも呼称されるその瞳は本来ならば珍しいものだが、現実ここに二人もいた。

どういう知り合いで、どうして日本に来てるのかしら。

何で高畑先生とあんなに親しそうなのよ。

明日菜の脳裏にタカミチに抱きつくナノハの姿がリプレイされる。頭なんか撫でられちゃって嬉しそうにして……

「あ、イタアッ」

ザクリ、と指先が赤く染まるのをあたしは見下ろしていた。

赤、血。

ああ、指を切ってしまったのだ。

血は止まらずに、まな板を染めるのを慌てて野菜を無事な手でより分ける。

「大変！」

少女の声。

その声をどこか遠くで聞く。

少し気持ち悪い。

血を見たから？

「明日菜君、こっちへ。治療するから」

「先生、血が指切れて……」

ドクドクと血が溢れる。

動機が激しくなる。

おかしいな？

あたし、血にこんなに弱かったっけ？

「さあ、手を出して。止血するよ。包帯も巻くから料理は禁止だ」

優しく言う高畑先生。

消毒液が傷口を刺激して痛みを訴える。

包帯が巻かれていく。

少しばかり不恰好なそれは指先の痛みを鈍らせていた。

涙がせきを切ったように溢れてくる。

惨めさと悔しさに、あたしは自分でも抑えきれなくなって泣いていた。

なんであたし、こんなところにいるんだろう？

高畑先生の手が優しく頭を撫でていた。

なによあたし、おこちゃまじゃないんだから。

文句の声も嗚咽のせいで言葉にもならない。

失敗した。

失敗した。

失敗した。

こんなはずじゃなかったのに、なんであたし、こんなに不器用な  
んだろう？

大好きな人の前での大失敗。

嘲笑われても仕方ない。

むしろそうしてくれた方がいい。

「落ち着いたかい？」

泣き止んだあたしに話しかけて、お腹はどうだいと尋ねる。

止めて下さい、優しくしないで、お腹なんか…減ってるわけ。

そう言おうとすると、お腹が鳴っていた。

どうして？

このタイミングで？

さつきまで気持ち悪かったのに、このお腹は空腹を訴えているのだ。

笑みを浮かべる先生。

「一緒に食べような」

その言葉にあたしは頷いて答えていた。

湯気が沸き立つ鍋。

それを囲んだ四人が箸を手に持つ。

ナノハがネカネに箸の持ち方を教える傍ら、タカミチが鍋から具を皿に盛って明日菜の前に置く。

不器用になった指で明日菜はそれを口に運ぶ。

大人の特権とビールの口を開けるタカミチだが、中身はノンアルコールだ。

美味しいねと熱々の具を食べて微笑む姉妹。

平和で有り触れた極普通の家庭の食卓。

団欒の光景。

少女は知らなかった。

自分が孤独であったことを。

孤独であることを寂しいと思ったことはなかった。

それを感じたのは初めてのことだった。

友達がいる。

幼馴染。

その妹。

大好きな人。

それなのにそれは今まで交わって一つになることはなかった。

人は一人。

他人は他人だ。

違う…あたしは…一人は嫌なんだ。

噛み締めたそれは涙の味がする。

呆けたような三人の視線が向けられていて、あたしの頬が恥ずか  
しさに熱くなる。

「明日菜お姉ちゃん、泣いてるの？」

「ば、な、泣いてなんかいないわよ。埃が目に入ったの！」

「ふうん？」

「ホントよー」

慌てて服の袖で目を拭う。

あたし、こんなに涙腺の弱い女だったかしら？

恥はもうかいたからかきすててしまおう。

鍋をつついてジャガイモを救い出し、程良く汁を染みこませたそ  
れを口に放り込む。

美味しい。

みんなで囲む御飯ってこんなに美味しいものだったけ？  
神楽坂明日菜は思う。  
家族ってこんな感じなのかな？

同日 日本時間午後9時51分

誘蛾灯。

夜の照明。

闇を切り取った光の中に明日菜は躍り出る。  
見あげるとライトアップされたマンションが見える。  
その後ろからタカミチが姿を表す。  
スプリングフィールド家宅を辞した二人はそこで立ち止まる。

「ねえ、高畑先生」

「なんだい？」

「なんで、あたしを誘ったの？」

「んー、何でってねえ？」

タカミチは無精髭を撫でる。

「はぐらかさないてくださいよ」

「一緒に食べたかったのはダメかい？」

「まあ、いいですけどお」

両手を後ろ手に結んで振り返る。  
指先の白い包帯が闇に映える。

シユボ！　つと音がして煙草を啜えるタカミチの横顔を明日菜は眺める。

「ここ公衆道路ですよ」

「携帯灰皿あるから許してほしいな」

懐から取り出したそれを見せる。

「うん、許してあげます。煙草吸ってる高畑センセ、ス、ス」「す？」

「あわわ…すっぱい顔です！」

「え！？」

「あ…忘れてください……」

「はは…すっぱい顔……」

「だから、忘れてよー」

「わかった、わかった。忘れたよ。今日はどうだった？」

チリチリと煙草が空気を消費して赤く燃える。

その一瞬の沈黙の後に明日菜は答えていた。

「家族って…ああなのかなあって思った。あたし、お父さん、お母さんいないからあんな感じなのかなって」

「うん。明日菜ちゃん」

「何ですか？」

「また誘ってもいいかい？　彼女達と一緒に御飯を食べるの」

「別にいいですけど。あたしは構わないし、それに」

「それに？」

「美味しかったから」

あたしは満面に笑ってみせた。

大好きな人に見せたい渾身の笑みだった。

何となく、あの家で感じた余韻を引きずっていた。

その後、高畑先生に車で送られて、あたしは寮まで送ってもらった。

【14】神楽坂明日菜（後書き）

明日菜登場。

って、ちよっとキャラ違うかな？

10話での安価回答ありがとうございました。

結果は記事投稿にてその内容でお確かめください。

次回辺りに書けたらいいかな。

勘違い。

この時点で明日菜は小六。

一年小学生したナノ八が>七年生>卒業なので原作二年前。

【15】明石裕奈

「明日菜ーっ！」

何気なく足を運んだ初等部の校庭を歩く明日菜に、遠くから声をかけたのは、バスケット部のユニフォーム姿の明石裕奈だった。

「あんー？」

めんどくさそうな声を発して、明日菜は声をかけられた方に振り向いた。

茶色味がかった黒髪の片側をサイドポニーでまとめていて、黒い瞳を持つ少女は初等部の六年生で、明日菜のクラスメイトでもある。そして見ての通りバスケット部の部員だ。

「明日菜ってばー！」

「なーにーよー！」

「おーい」

と、返事をした明日菜に両手を振ってフェンスにしがみついている。

馬鹿なの？

少し呆れて明日菜は踵を返す。

「あつ！ つて、ちよい待ちー」

「あー、聞こえない、聞こえない」

その声を無視する明日菜。

「待て、コラー！」

裕奈がフェンスを乗り越えて、土手になった部分を駆け降りて、ジャンプする。

土手から一メートルは段差のある通路はコンクリート舗装である。  
一歩間違えば大怪我しかねないその段差を裕奈は軽々と飛び降りてみせた。

「ちよっ！」

「逃さないよー、つて逃げるなー」

脱兎の如く明日菜はその場を全力失踪で走りだすが、裕奈も明日菜を追って走りだす。

「待ちなさいー」

「待てと言われても、待たないっ！」

「こなくそー」

校庭で二人の追いかけっこが始まる。

「あの二人、何をしているのかしら？ 全く暑苦しいこと」

雪広あやかは腕を組んで、校庭で追いかけてっこをする二人を見て、呆れたように溜息をつく。

その後ろに居るのは雪広アリサと月村すずかだった。

二人ともまだ初々しい初等部の白いゆったりとした制服に身を包んでいる。

「といつつ、あやかさんは声をかけそびれたのでした」

「うんうん、タイミングが今一なのよね。姉様は」

「べ、別に、わたくしは明日菜さんに用事なんてありませんことよ」

「姉様、要件でしたらメールを出せばいいわ」

「そ、そうね。愚図愚図してられないわ」

あやかはさあ、行きましようと二人を促す。

あやかとアリサにすずかを加えた三人組はようやく歩き出す。

姉のあやかは今年から六年生で、アリサとすずかは一年生である。

歳の差のある姉妹だが、姉妹仲は良好で、どちらかという姉のあやかは妹のアリサを溺愛していた。

登下校くらいは何の問題もないはずだが、先日起きたハイジャック未遂事件にアリサが巻き込まれたと知った時、卒倒して泡を吹いたのだ。

そして父親を激しく糾弾したのだ。

もつお父様とは絶交ですわ！

激しく責められた挙句、絶交宣言された父親は人知れず泣いたという。

そして過保護なまでに妹を守ろうとする姿は涙ぐましいほどだった。

過剰な愛情に包まれたアリサは少しやりすぎね、と親友のすずかに漏らしてたりするのだが、それは本人の預かり知らぬところだ。

「鮫島、出してちょうだい」

「はい、あやかお嬢様」

勤続四十年を越える雪広家のドライバーである鮫島は超がつくベテランであり、祖父の代から仕え続けている忠勤一筋の人物だ。

三人が乗り込むとリムジンは市内に向けて走りだす。

「今日はお買い物ですね？」

「ええ、そうよ」

「パーティの飾り付けをかうのよね。今年は豪勢にするのよ」

鮫島の問いにアリサが答える。

「それでね、姉様ったら、さっき明日菜姉様に声をかけようとしたら、横からかつさらわれちゃったの」

「ア、アリサちゃん!？」

「はは、左様でしたか。残念でしたな」

「そうそう、姉様はもっと素直になったらいいのに」

「アーリサーちゃん?」

「!？」

あやかがアリサに抱きついて、くすぐるのだった。

声にならない悲鳴が車内にこだまする。  
鮫島は見ないふりをして運転に集中するのだった。

「ぜえぜえ……」

「はあはあ……」

校庭の隅の芝生の上で二人は荒い息をついて力尽きていた。  
軽く校庭を十周し、もはや何故走っているのかを失念し、ただの  
競走になっていた。

勝敗はどちらともつかずで、二人が力尽きたのはほぼ同時だった。

「ゆ、ゆーなあ」

「あすにゃー」

「なんだっけ？」

「はえ？」

「何であたしら走ってんの？」

「さあ？」

「な、殴るわよお、あんた……」

「えーっと、明日のバスケット部の試合、助っ人、プリーズ！ んがぁ」

パソコンと、裕奈は脳天にチョップを食らって仰け反って、死んだ

ふりをする。

「何してんの……」

「死んだふり」

「さいなら」

「あー、待つて。マジお願い。明日は勝ちたいんだよあ」

裕奈が明日菜の制服を掴んで離さない。

「何よー、どうせ弱小チームじゃない」

「そこを何とか明日菜様っ！」

「ええー？」

「そんな嫌な顔しなくたって」

「あたし、あんたとさんざん追いかけてこして疲れてるんですけどー？」

「あはは」

「さいなら」

「あすにやあああ」

今度は明日菜の腰にしがみつくと裕奈。

「あー、うざい、しつこいー」

「夕飯奢るよあ、【超包子】の肉まん三個でござあ」

裕奈の台詞にぴたりと明日菜の動きが止まる。

「四個」

「え！？ ちょ、私もお小遣いの限界が……」

「やっぱりサヨナラ」

「あー！ あー！ 乗った。買った。四個で手を打ってえ〜」  
「毎度あり」

明日菜が片目をつぶってみせる。  
その足元で涙する裕奈だった。

【超包子】は今話題になりつつある中華屋台である。

どこからともなく現れ、巷の食通の味覚を虜にした【超包子】は連日の大盛況。

すでに麻帆良では知らぬ者はないと言われるほどの有名店となっている。

と言っても良心的な値段で、学生にも手が届く価格設定であったから、学生達の行列が日々群れをなしている。

さらに街頭販売もしていて、【超包子】の旗印は並ぶ学生達の希望の星でもあった。

店内は人型ロボットがいたり、まだ小学生と思われる従業員がいたりするが、営業法違反で捕まったという話は未だ聞かないし、ほとんどがそんな事を気にもとめてないのが実情だ。

【超包子】の店内で神楽坂明日菜と明石裕奈が向い合っている。

片や明日菜は熱々の肉まんを齧るのに夢中、片や裕奈は今にも死にそうな顔でそれを眺めているという構図だ。

「く…明日菜、一口プリーズ！」

「嫌」

「激しく、た、食べたいよお……」

「取引なんだから、観念しなさいよ。ハム…ハム……」

みるみるうちに肉まんは明日菜の胃袋に収められていく。

裕奈はテーブルに突っ伏して力尽きていた。

「…ほら、半分上げるから元気出しなさいよ」

「マジで！？ あすにゃー、マジ天使」

「はいはい」

明日菜が半分に割った肉まんから湯気が漏れて、もっちりぶつちり詰まった肉の匂いが鼻孔をくすぐる。

空腹な人間にとって、この光景を見せられ続けるのはまさに拷問というものだった。

「ここの肉まんは至高だよ」

普通の肉まんの倍はあろうかというそれを幸せそうに頬張る裕奈。

「何で助っ人がいるのよ？」

「コートを取り合だよ。うちらが使つてるとこ、隣と共同じゃん。そこに中等部のがしゃしゃり出てきてさ」

「はあ？ 中等部、なんでよ？」

「こないだ試合で焼きいれた奴の姉貴があつちのバスケット部っぽくてさ。あつちと勝負して負けたら出てけとかおかしいんだよ」

「アホらし……」

「明日菜は私が買ったんだからね。降りることは許されない！」

ポカ、明日菜の拳が振り下ろされる。

「いたいー」

「変なコト言うなー」

「明日菜だけが頼りなんよお」

「肉まん四個分くらい働いてやるから、安心しなさい」

「やっぱり明日菜はマジ天使！ 生き神様」

「やめれ！」

拝み始める裕奈に明日菜はげんなりとして答える。

「じゃあ、あたし帰る」

「私もー」

支払いを裕奈が済ませ、二人は【超包子】を後にする。

「じゃあね、ゆーな」

「明日は期待してるよ、あすにゃ」

手を振り合って明日菜は寮へ。

裕奈は教職員寮へ向かって歩き出す。

明日菜は前から食べてみたかった【超包子】の肉まんが食べれてご満悦だった。

あれと引換に助っ人程度ならお安い御用だった。

普段から儉約してる身としては、あれほどの肉まんには逆立ちしても手を出すことができない。

ゆーなさま感謝かな〜と、明日菜は夕暮れの空を見つめる。  
世界樹を背景に空は茜色に染まっていた。  
不意に風が吹いた。

「風、つよ……」

耳元を風が吹き抜けて、何か響くような音を聞いた、様な気がした。

「え？」

明日菜は足を止めてしばらく立ち尽くしていたが、気のせいだとわかると、寮に続く下り坂を降りていった。

明石裕奈は麻帆良学園教師の明石教授の娘だ。

小学六年生で、活発な性格で、バスケット部に所属している。

今は教職員寮に父子二人で暮らしている。

お母さんは私が五歳の時に死んじゃった。

優しくて綺麗な人だった。

お父さんが大、大好きで、私の憧れのお母さんだった。

二人で暮らすことにはもう慣れた。

というか、お父さんがだらしなさ過ぎて、私が家事を頑張らなければ家の中はいつでもメチャクチャになるのだ。

あの人に家の中のことは任せられない。

小さかった私にそう自覚させちゃう親ってどうなのよ？  
でも私はお父さんが大好きだ。  
昔からずっとそうだったから、むしろお父さんは私が面倒みなければって思う。

再婚させればいい？

ダメダメダメ！

結婚絶対反対！

天が許しても私が許さない。

お父さんと結婚するのは私だー！！

なんて、人前じゃ流石に言えない。

自分でもお父さん大好きっ子であることは認める。

それにうちのお父さん甲斐性なしだし、恋人の一人も連れてこないから、内心どこかで安心とか思ってた。

これまでの明石裕奈の日常はごく平凡であると言えた。

その音を聞くまで。

帰り道、足取り軽く歩く裕奈は、何かが響きあつような音を聞いた。

最初それは空耳か気のせいだと思って空を見上げる。

「何だ。何もないじゃん？」

次の瞬間、空から飛来した光が裕奈の体を貫いて、裕奈の肉体から精神が乖離する。

何これ？

目の前のそれは光り輝く石。

闇の中にそれは鮮明に浮かび上がる。

キラキラ輝き反射する光は万華鏡のように反射し続ける。

肉体の感覚を失って、気がつけば裕奈はその石と向き合っていたのだ。

どうなってるの!?

夢にしては鮮やかすぎた。

現実にしては現実離れしすぎていた。

金属の響きあう澄んだ音がその石から聞こえて、何重奏にも重なりあうが、不思議と不快な音ではなかった。

裕奈は手を伸ばす。

危険な徴候は感じなかった。

それはむしろ暖かく、裕奈を迎え入れるかのようにだった。

そして裕奈は石の中に引き込まれていた。

光の粒子が裕奈の体を突き抜けていく。

同時に裕奈は理解していた。

シユエルシート  
【願いの種】の存在を。

流れこむ光の粒子は石の記憶だった。

幾千もの光が裕奈の中を通り過ぎて、記憶の残滓を残していく。

何千年もの間に世界樹に蓄えられた記憶達。

え？ 何、これ…魔法？

裕奈に流れ込んだ記憶は、光りに包まれた、原初の世界樹の姿だった。

そして新世界の勃興と長い長い魔法の歴史。

繰り返される魔法使い達の戦い。

地球とは異なる世界の物語。

お母さん。

浮かび上がるイメージに裕奈は戸惑いを隠せない。

超常の力を発揮して戦う魔法使いの中に、裕奈は在りし日の母と父の姿を見ていた。

何でお母さんが？

魔法使い？

じゃあ、お父さんは？

記憶が錯乱する。

それまで普通の常識の世界に生きていたと思っていたのに、これは何の冗談なの？

お母さんは事故で死んだ、そう聞かされていた。

でも本当にそうなの？

光の奔流が消えていくと同時に、流れ込んだ世界樹の記憶も霧散していく。

そして目の前には光りに包まれた動物が体を丸めて眠っていた。

裕奈の存在に気がついたのか、「彼」は目を覚ました。

## 【15】明石裕奈（後書き）

やだ、何この超展開。

裕奈、なし崩しのに世界の秘密を知る＋ユーノと出会う。

【願いの種】は裕奈にどう影響をおよぼすのか？

\*注意

リリカル世界のジュエルシードとは存在が根本的に異なる。

安価は明石裕奈を採用させてもらいました。

裕奈っぱさが出てればいいかな？

原作組もちらほら登場です。

次回予告「僕と契約して魔法少女になってよ！」

嘘death

【16】ゆーなとユーノ

私の名前は明石裕奈。

元氣いっぱい的小学六年生。

みんなからは「ゆーな」って呼ばれてる。

今日は友達の明日菜にバスケット部の助っ人を頼んだんだけど、あすにやめー、私のお小遣いを空にしやがったー（泣）。

特大肉まん四個も食べるなんてどんな胃袋してるのよー。

まあ、一つ半分個で分けて貰ったんだけどね。

美味しかったなあー 今度は丸ごと一個食べたいな。

そんで帰り道に不思議な音を聞いたんだ。

そして…変な石が私の中に!?

知るはずもない記憶を見せられて。

何これ？

魔法って何よ？

マジ魔法なの!?

この地球とは別に、もう一つの魔法世界があることを知った。

えー 衝撃の事実？

そしてこの石が【ジュエルシート願いの種】と呼ばれていることも知ったんだ。

なんのことやらサッパリわからないけど、この石が見せた記憶にお母さんが写ってたんだ。

しかも若い頃のですっごくカッコイイの！

交通事故で死んだはずのお母さんは魔法使いだった！？

マジありえない…じゃあ、お父さんは？

ずっと隠してたの？

そんな困惑する私の前に「彼」が現れたんだ。

『君は……そうか【ジュエルシート願いの種】は君を選んだんだね』

突然、頭の中にその声が響く。

え？ 何、今の！？

私は周りを見回すけど、石の中の世界はただ光が満ちていて、果

てすら見えない。

唯一、光の中心がもそもそとうごめいて、白い毛並みを持ったその動物が立ち上がった。

『僕だよ…念話、聞こえてるよね？ 石と同調してる僕らの間では念話ができるんだよ』

そして「彼」はそこから立ち上がる。

正真正銘、どこから見ても一匹のオコジヨが賢そうな瞳で裕奈をまっすぐ見つめていた。

ククリとした可愛い瞳に私は思わずキュンとしてしまった。  
何この可愛い生き物は！

234

「嘘、動物が話してる？」

『オコジヨです……ほら、頭の中で僕に話しかけてみて』

「え、ええ〜？ って。こうかな……」

『あなた、誰なの？』

一瞬沈黙が訪れる。

もしかして通じてない？

私はがっくり肩を落とす。

オコジヨにからかわれた……

『えっと、ゴメン。僕のことはユーノって呼んで欲しい』  
「何よ、今の一瞬の間は！」  
『ごめんなさい。本来なら一族で使う仮名を使うのが決まりなんだけど、君に隠し事したくなかったんだ。これからしばらくは一緒に過ごすわけだし』

一緒？

ユーノの言葉に私は首を捻る。

「はいー？ どゆー意味なの」  
『ええと、まず君は【ジュエルシード願いの種】を呼び寄せたんだ。願いを持つ者としてね。そしてこの地での宿主として選ばれたんだ』  
「選ばれた宿主？ ヤドカリじゃなくて？」

ヤドカリが石をえつちらおつちら運んでる姿を私はイメージする。  
中々シユールだ。

『…うんそう、【ジュエルシード願いの種】は今力を失ってて、時空を飛び越えたせいで、ほとんどの魔力が消えてしまっ一步手前なんだ。この地に飛んだのは危険から逃げるためと、後、力を回復するためだとも思うんだ』

「思っただってどういうこと？」  
『ジュエルシード【願いの種】には意思がある。そして人の想いに引き寄せられるんだ。世界樹は人の願いを叶えるって聞いたことない？』

「あるある、恋の願いとかさ」

『うん、よかった。こっちも同じ認識なんだね』

「で、引き寄せられるって?」

『純粋な人の心かな?』ジュエルシート【願いの種】はそういうものに反応して人

の願いを叶えると言われてるんだ』

「ドラゴンボールきたー!!」

私は思わず拳をギューツと握って真上に突き上げる。

『何それ?』

「願いを叶えるアイテム」

『旧世界にもそんな魔法の遺物があるんだね。初めて知ったよ』

「まあね」

漫画なんだけど…真面目に答えるユーノに裕奈は適当に誤魔化す。

「その魔力が消えるとどうなるの?」

『えと、ジュエルシート【願いの種】そのものが消えてしまうんだ。ここに來るために僕の魔力と直結させて何とか存在を保てたけど、放っておけば消滅しちゃうんだ……』

その言葉の意味になんとなく嫌な予感を覚える。

「ユーノはどうなるの?」

「多分じゃなく…消えてしまうと思う。今の僕は【ジュエルシード願いの種】でもあるんだ。魔力を注ぎこむだけじゃ足りなくて、魂から同化させちゃったから」

「それってかなり…無茶したんだね」

「仕方なかったんだ。【ユクドラシル・ドロップ世界樹の涙】である【ジュエルシード願いの種】を守る必要があったし、この石を狙う連中がいて、追手がかからないほど遠くに逃げなくちゃいけなかった。それを願ったのは僕自身でもあるんだ」

「狙うって悪い奴ってこと?」

「わからない。とにかく狙われてることは確かだね。【ジュエルシード願いの種】が公になったら狙う人はもっと増えるかもしれない。何せ願いを叶えるんだから」

「ユーノも【ジュエルシード願いの種】が欲しかったの?」

私はそれだけを聞いていた。

この子は何者なんだろう?

それを知りたかったんだ。

「僕? 僕はね遺跡の調査チームにいたんだ。こう見えても考古学者なんだ。【ジュエルシード願いの種】も遺跡で見つけたんだけど……」

そこから先は結構陰険な社会の話と、操られた爺さんと、石を狙う謎の女が襲ってきて、ユーノが何とか石の力で逃げ出せた経緯を

聞いていた。

「何だかヘビーモード過ぎない？」

その上、このままだと消えてしまうなんてありえないよ。

裕奈はユーノに降りかかった災難に一人憤慨していた。

「おかしいよそれって。」

「ユーノはなにも悪くないよね。そんな危ない連中が狙ってるなんて。それと…つまりは、宿主っぽい私ってどうなるわけ？ 狙われちゃったりするの？」

『そうならないよう、できれば隠れていたいけど。君を守れるくらい力を取り戻せば何とか成るかもしれない』

「ふうん、あまりアテにならないなあ。だってユーノは今何かできるの？」

『防御の魔法くらいかな…今こうしてる間も君から魔力が流れ込んでるんだ。簡単な魔法くらいならできるよ』

「流れこむって何？」

私の頭の中はクエスチョンマークだ。

『うんと…君には魔力がある。それも普通の人よりかなり多めにね。【ジュエルシート願いの種】は宿主の魔力を養分に、少しずつ力を回復させていくんだ』

「よ、養分って。吸われてるわけ……」

ジュルジュルと蟻地獄に落ちた蟻のように体液吸われてポイされた姿が思い浮かぶ。

我ながらエグイ、エグすぎる！

顔に青筋浮かべてさすがにドン引きしてしまう。

それはないよ、ユーノさんよおお。

『あ、いや、言い方悪かったね。君が持っている魔力をほんの少しずつ分けてもらうんだよ。例えるなら、君は栄養分たっぷりの水なんだけど、普通の植物に過度に水を上げると枯れてしまうだろ？

今回のケースだと、いっぱい魔力を貰っても一度に吸収できる魔力は限られてるんだ。だから毎日少しずつ君の魔力を分けてもらうんだ』

「ほうほう、私に魔力なんてあるんだ？」

『君って多分、魔法使いの家系なんじゃないかな？ 感じ取れる魔力は魔法世界の格付けで言うとBランクくらいあるもの』

ああ、やっぱりそうなんだ。

魔法使いの家系か…魔法使えるってことなんだよね。

「何そのBって？ 私、A型なんだけど？」

『血液型じゃなくて、魔力の総量かな？ 魔法世界ではDランクもあれば普通に魔法が使えるんだ。まあ魔法の才能そのものは人によりけりなんだけど。君はまだ成長期だから最終的にどうなるかはわからないけど』

「へー、鍛えたりできる？」

『それはちよつと無理かも…魔力は天賦の才能だからね』

「なーんだ」

『それでも君の才能は十分だと思うよ？』

「そつかあ、じゃあさー！」  
『何？』

すでに湧き上がった好奇心は抑えきれそうにない。  
ユーノの前で指を組んで、目はお星様キラキラである。

「私に魔法教えてくれる？ それとゆうーなって呼んでよね！」  
『わ、分かったよ。君…ゆうーはもう魔法関係者だしね』  
「やったぜー！」

ガッツポーズを決める私。  
魔法いただきだー。

『それじゃ、結界を解くよ。安全な位置に出るように転移するから、ちよつと違う場所でも驚かないでね』

そのユーノの言葉の後、気がつけば私は森の中にいた。  
さっきまで道路を歩いてたはずなのに、正反対の場所だった。  
暮れなずむ夕日はとつくに沈み込んで、時刻は夕餉の時間だった。

「いっけない！ やっぱー、夕飯の支度しなきゃ」

裕奈は慌てて駆け出すと、森から去り、その姿を見守っていた人物が木陰から姿を現した。

「エアリヒカイト、転移干渉による時系列差は？」  
『転移干渉による時系列差は0・034ミリオン』

その少女が手に持つ、青いブローチが答える。

「ほぼ歴史通りね。明石裕奈……麻帆良における【ジュエルシード願いの種】の最初の接触者」

その名を呟き、姿を見せたのは月村すずかだった。  
胸元から取り出したブローチはインテリジェント・デバイスだった。

すずかをマスターとする未来のデバイス、フェニックスタイプ・エアリヒカイトである。

「明石裕奈のデータを収集します。ジュエルシード【願いの種】の影響度を手元のデータを比較して、今後の成長率を割り出して」  
『サー・イエス・マスター』

夜の帳が森を暗黒の世界に染め上げていく。

うつすらと月が紅と蒼の境界線に浮かび上がる。

森の中に佇む少女の白い制服だけが、唯一の存在を主張するようにそこにあった。

すずかの瞳は闇をも見通して、青白い魔力を身体から発していた。まるで凍りついたかのように周囲の時間は動きを止めているかの

ようだった。

「夜は私達の時間」

眩きは静寂の中に消えていく。

「こんなところで何をしている？」

静寂を破る一人の少女の声がすずかに問いかける。

「散歩です」

すずかは振り返らずに答えた。

「では、付き合え。今夜は満月、我らが支配する夜だ」

すずかにその少女は囁いた。

ハイデライドウォーカー

【吸血鬼の真祖】、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

その姿は少女なれど、齡六百年を数えし真祖の吸血鬼である。

「来い、夜空の散歩も楽しかろう？ 我が眷属よ？」

エヴァンジェリンが笑う。

この少女が無邪気に笑みを見せる存在は他にありはしない。  
差し伸べられた手をすずかが手に取る。

「喜んで」

と、すずかは残った手でスカートをつまみ上げてお辞儀をする。

「行くぞ」

風が吹き、森から二人の姿は掻き消えていた。  
夜空に輝く満月だけが二人の行方を知っていた。

【16】ゆーなとユーノ（後書き）

次回からナノ八に戻ります。

今回は文章のギャップ有り。

## 【17】約束の指きり

二日後・朝の風景

雑踏の中で、わたしは深呼吸をする。

そして、ふうつと肺に貯めた空気を吐き出していた。

朝早くの麻帆良の街並みを行き交う人々は通勤、通学でとりどりの風景を生み出している。

中でも取り分け目立つのは学生服姿の少年少女達だ。

新学期を迎えたばかりで、まだ卸したての制服に身を包み、初々しい姿を見せている。

わたしもその中の一人なんだけどね。

と、ナノハはランドセルを背負い直す。

まさかまた小学生をやり直すことになるなんて思いもしなかったなあ。

本当ならメルディアナで六年生をしているはずなんだけど、成績良好による学業免除と日本への留学を言い渡されたんだ。

留学の内容は日本で小学生として通いなさいというものだった。

麻帆良学園初等部の制服は驚いたことに、わたしが普通だった聖祥のものによく似ていた。

ネットで調べたら、デザインしてる人が同じで、麻帆良学園初等部の制服に採用されたのが始まりで、その後、海鳴の聖祥が麻帆良学園初等学部と姉妹校になり、聖祥に麻帆良初等部の制服が採用されたらしい。

そんな偶然あるのかな？

もつとも細部が異なるのだけど、わたしにとっては愛着のある制服をまた着れて嬉しかった。

バスの通り道を確認し、初めての通学は歩きで登校することに決めた。

歩くとき少し遠いけど、魔力を体にまとわせて魔法障壁を展開してるから、それほど負担にもならない。

魔法障壁を展開するってことは、常に肉体に魔力を通わせるってことなのね。

だから基礎的な身体能力はかなり上がってるの。

あ、普通は魔法障壁なんて使わないのが常識なんだけど、どうにもたまにちよっかいを掛けてくる魔法関係の人がいて、自衛の手段として魔法障壁を使うようになったんだ。

今では無意識に展開できるようになったから、あまり負担にもならないんだ。

前方を少し年上の初等部の女の子達が歩いている。

あれについて行けば問題ないねと、その後についていく。

制服かあ…ネカネお姉ちゃんには可愛いってギューギューされたのね。

ユーノ君にも見せてあげたいな。

今はどこでどうしてるんだろ？

お腹空かせてないだろうか？

危険な目に合っていないだろうか？

元気でいてくれるのだろうか？

考えれば考えるほど、今のユーノ君が置かれた状況がわからず、一方的に犯罪者として指名手配されたイメージが浮かび上がる。寒い牢獄で打ち震えるユーノ君を想像して、ナノハは泣きたくなかった。

違うもん、ユーノ君は人を殺したりなんてしない！

そういくら主張しても、ナノハの意見など取り上げられようもない。

ただ自分の無力さを思い知るだけだった。信じることしかできなかった。

それに、これでお別れなんて嫌だ。

せつかく会えたのに、ずっと一緒にいるって約束したんだ。だから諦めちゃいけないんだ。

信号が青から赤に切り替わる。

物思いに沈むナノハはそれに気がつかず、曲がり角から十字路へ足を踏み出していた。

その死角から走りよるリムジンが前方の歩行者に警告音を鳴らし、急ブレーキをかけるが勢いは止まらない。

つんざくようなブレーキの音が鳴り響き、間に合わない、と、その場で目撃した行人の誰もが惨劇を予測した瞬間だった。

瞬時に肉体が反応し、流れるような動きで半身をずらしてナノハはアスファルトを蹴る。

わずかゼロコンマ秒に満たない世界での動きは誰の目にも止まらず、わずかに残像となって残った。

タイヤがスリップし、リムジンが数メートル先で止まった。

わたしは、はふうっと息を吐き出した。

むしろ、車に引かれそうになったことよりも、自分の魔法障壁に激突して、車に乗っていた人に損害を与えなかったことに安堵の溜息をついた。

ナノハが常時展開する魔法障壁は、時速50キロほどの速度の車がぶつかった程度ではびくともしない。

同様に拳銃の弾丸程度なら軽く弾くし、ライフル弾程度ならネカネお姉ちゃんのゲンコツ程度の痛さでしかない。

実際それを試したわけではないけれど、実際の強度を試すために分身の魔法を使って魔法の矢を打ち込んで耐性を試したこともあったから、実際の弾丸の威力を資料で調べてそれくらいだろうと判断したのだ。

まあそれはさておいて、リムジンから飛び出してきた人物にわたしは驚いた。

「お嬢さん、お怪我は!？」

鮫島さん!？」

なのはとしての記憶にある、バニングス家の運転手のいぶし銀、鮫島だった。

姿形や年齢好まで覚えていた姿のままだ。

「はにや? だ、大丈夫です。ぼうつとしてたので、ゴメンナサイ」

と、頭を下げて、少し遅れてナノハの前に立った少女をわたしは見つめていた。

アリサちゃんがいる。

でも、ここは麻帆良のはずなのに、二人は海鳴にいるんじゃないの?

ナノハはリムジンの中にいるヘアバンドの少女の姿を認めていた。

あ…すずかちゃん?

間違えようのない現実にはわたしの頭の中は混乱していた。

そして怪我はないかと聞かれて、それから車に乗るように言われ、わたしはリムジンに乗り込んで、改めて自己紹介をしたんだ。

アリサちゃんはバニングスではなく雪広コンツェルンのお嬢様で、鮫島さんも雪広家に仕えてるみたいだった。

すずかちゃんの姓は月村で同じだけど、何となく記憶にあるより大人っぽく感じる。

鮫島さんが運転する車で初等部の門前に降り立った。

「職員室に行きます」

「じゃあ、案内してあげるわ。すずかも来る？」

「ええ、私達もこないだ見学に来たばかりよね」

「じゃ、お願いします」

ナノハがペコリと頭を下げて案内をお願いすると、右側をアリサが、左側をすずかがナノハを挟んで歩き出す。

まるで昔の風景そのままだった。

胸の奥から何かが込み上げてきそうになる。

懐かしさと、帰ってきたような既視感。

何もかもが失われたものはずだった。

春の少し冷たい風が、桜の花びらと共に廊下の窓から吹き込んで前髪を揺らす。

「ちょっと、どうしたのよ？」

「え？」

「ナノハちゃん、泣いているの？」

わたしの顔を覗き込むアリサちゃん、優しく声をかけるすずかちゃん。  
わたしは目の端に浮かんだ涙を指で掬いとる。

「へ、平気なの！ ちょっと、埃が目に入っただけなの」

「ほらハンカチ、指でぬぐっちゃダメ。じつとしてなさい」  
「は、はい」

わたしが手を下げてじつとしていると、ハンカチが軽く押し当てられて、涙を拭き取っていた。

「大丈夫？ 目がゴロゴロとかしない？」

「あ、アリサちゃん、私、目薬あるよ」

「すずか、そういうの早く出しなさいよお」

「ええ？ ちょっと想定外だったし、あまり使わないもの」

「大丈夫、時間ないし、目も平気だから」

「そう？ まあいいけどね。職員室はそこよ」

「うん、ありがとう、アリサちゃん」

二人が見送ってわたしは職員室前に立つ。

「ねえ、ナノハ」

「はい？」

アリサちゃんの声にわたしは振り返る。

二人は階段前の同じ位置に立っていた。

「同じクラスになれたらいいね」

「そうだね」

わたしは笑って答えた。  
本当にそうなればいいなって思ったんだ。  
そしてわたしは職員室で先生に挨拶して、新入生として初めての  
教室に案内され、どういうわけか、神様の計らいなのか　また、  
あの二人と再会するのだった。

### 始業式後・教室

「つまり、これは運命というやつなのよ」

窓際に席に座ったアリサが二人の前で運命説を披露していた。  
三人とも窓際に椅子を置いて身を寄せ合っていた。  
すでに二人の空気にナノハは溶け込んでいた。

「まあそうなの？」

さすがが感心したように続ける。

ナノハも何となく感じいった顔で神妙に聞いている。

「そういうわけで！」

「にゃ？　で？」

「わけで？」

ナノハとすずかの声が追従する。

「ナノハをうちのパーティに招待するわ。そこのすずかも来るから来なさいよ」

「ええ？」

「すずか？ この流れでなにそれは、ええ？ ってのは。一緒に飾り付け道具買いに行ったじゃない」

「私、人が多いの苦手なんですよお」

「ナノハ、嘘付きはね舌を抜いていいことに日本の法律ではなってるのよ。例えばこの子とか」

と、アリサはすずかを指さす。

「えーと…」

いつから日本にそんな法律が！

でもここはわたしの知ってる日本じゃないし、微妙に違うどころか、明らかに違つところもあるし、ありえるかも知れない。

はわわ…嘘ついたら舌抜かれちゃうんだ！！

こ、怖いの……嘘はつかないように、しないとイケないのかな？

「アリサちゃん？ ナノハちゃんが本気にしちゃうでしょ？」

「え？ 本気にした？」

すずかの指摘にアリサはナノハの顔をじつと見る。

「ち、違つもの！？」

「アッハハ、何その顔っ！ 本気にしたの？」

「ちょ、ちょっとだけ……」

「お、おつかしいのお、ププ。ナノハの落とし所がわかったわ」

「落とし所!？」

「弄りやすいつてこと」

わ、わたし、アリサちゃんの弄られ役!?

前にも同じことあったような……?」

「まあ、今年は盛大にやるから、お料理だつて奮発してるし、何人こよつが問題ないわ。あやか姉さまが張り切ってるしね」

「アリサちゃんのお姉さん?」

わたしの記憶ではバニングスの家のアリサちゃんにはお姉さんはいなかった。

今六年生で、同じ初等部に在学しているのだという。

「会ってみたいな、どんなお姉さんなの? やっぱりアリサちゃんに似てるのかな」

「えーと……会えばわかるわよ……」

アリサちゃんの表情が沈みこんで口ごもる。

わたし、何か悪いこと言ったの?

隣ではすずかちゃんが笑いをこらえていた。

はにゃ？

その時、教室の戸が開け放たれ、金髪の少女が優雅に髪をかき上げながら入ってくるのが見えた。

ざわめいていた教室も、その上級生と思わしき女生徒に注目が集まり静かになる。

「失礼いたしますわ！ みなさん、御機嫌よう。新入生のみなさん、入学おめでとうございます。わたくし、雪広あやかが皆さんを祝福に参りましたの」

あ、あれがアリサちゃんのお姉さん？

そのお姉さんと一瞬目が合う。

す、凄い美人さんなの！？

一瞬固まるナノハの背にアリサが頭を押し付けて背を屈めた。

「どしたの？ アリサちゃん」

「ナノハ、あんた黙んなさいよ」

何も言わず、すずかは椅子を引いて道を作り、ナノハの背中ではアリサがすずかの裏切り者ごとと小声で怨嗟の声を上げる。

あやかがこちらに向かって歩いてくる。

「アリサちゃん、お姉様よ。何を恥ずかしがってるの？ あら、あなた、アリサちゃんの新しいお友達かしら？」

「は、はいなの！ ナノハって言います」

場の雰囲気につられて、ナノハはいつか本で見た完璧な礼儀作法でもって礼をしてみせると、あやかの目が細まる。

「可愛い名前ね。ナノハちゃんは挨拶してくれたのに、アリサちゃんは挨拶してくれないのかしら？」

あやかはニコニコ笑ってアリサに声をかけた。  
口元に手をやる仕草一つでさえ優雅であった。

「は…はい。姉さま、御機嫌よう」

観念したようにアリサが顔を上げて、あやかに一礼してみせる。

「まだまだねアリサちゃん、淑女の礼儀作法をもう一度勉強しなおしましょうね」

「はあ、はあい…」

「返事は一度で、気の抜けた返事はダメよ。完璧な礼儀作法は心のあり方からです。そのナノハちゃんの作法はパーフェクト。淑女の鏡です。あなたも見習いなさいね」

「はい」

「良い返事よアリサちゃん！ ご褒美にキスしてあげるわ、いらっしやい」

「く、逃げるわよ、ナノハ！」

「はえ？」

小声でアリサが呟き、アリサはすずかの体をあやかに押し付けて走りだす。

「きゃっ」

「アリサちゃん!？」

え、え? 何。

釣られてわたしはアリサちゃんの後を追う。

廊下は走ってはいけません。

でもアリサちゃんは全力で駆けていく。

転んで怪我したら大変だ。

わたしはアリサちゃんを追いかけることにした。

背後であやかがなにか叫んだが気にしないことにした。

「ふう、はあ…はあ……」

「アリサちゃん、いっぱい、走ったねえ」

「巻いた…かな?」

校庭裏の体育館前でようやく立ち止まったアリサにナノハは追いついて、そのまま二人は息を整える。

ナノハはそれほどでもなかったが、アリサは全力だったのか、さつきまでは顔面蒼白なほど息も絶え絶えだった。

「アリサちゃん、お姉さんと何かあったの?」

「あのね…あの場の空気で晒し者の私がいたでしょうがー」

「はこゃ…ふひゃ」

アリサちゃんがわたしの口元を両指で抑えて広げて変な声が出る。ようやく指を離して、アリサちゃんは体育館の壁に背を預けた。

「ふう……姉さまの過保護っていうか、私に異様に構う癖があるのよ。今日のアレなんか予想はできたんだけどね」

「え、そうなんだ」

「姉さまのこと、別に嫌いじゃないけど。過剰なスキンシップは嫌なの。ぶっちゃんけ少しうざいし、ああやってクラスメイトに絡むのも嫌、おかげ様で幼稚園からの友達なんてゼロよ。雪広の怖い姉さんが来るぞってね。寄り付かなくなるの」

「ん……お姉さんはアリサちゃんを守りたいんだとは思っよ……」

「そんなのわかってる。だけど私は、一人の人間として、自立した人間として認められたいの。過保護な愛情なんていらぬ。私は私を認めて欲しいだけ」

「アリサちゃん……」

「何か、ちょっと、今の私おかしいから、あっち行って」

強い言葉でナノ八を拒絶して、うつむいたアリサちゃんに、わたしはどう言葉を掛けるか迷った。

うつん、言葉は…いや、言葉ではなく、心はもう決まってるんだ。

「わたしはアリサちゃんを見てるよ」

「え？」

「何があっても、ありのままのアリサちゃんを見てるよ。わたしは

アリサちゃんを認めるよ。だからアリサちゃんもお姉さんから逃げないで、はつきり向かい合おうよ」

「そんなこと…姉さまに言っても」

「伝わる」

「……」

「きっと…伝わるから」

「ナノハに何がわかるのよ……」

「アリサちゃんは真っ直ぐな子だよ。だけど今は心の行きどころを見失ってるだけ、わたしが友達じゃ、嫌、かな？」

顔を上げたアリサがぼんやりとナノハを見つめていた。

「嫌なわけ…ないじゃない」

「友達になつてほしい、アリサちゃん」

「私も…ナノハと、本当の友達になりたい」

「指きりしよう、日本にあるよね。指きりげんまんって」

「あんたねえ…全然イギリス人ぽくないし、日本の風習詳しいし、わけわかんないわよ」

その言葉に苦笑してみせる。

「ごめん、元日本人なんだけどね。」

「ゆーびきーりげんまん」

体育館の片隅で二人は約束の指きりをした。

それが雪広アリサとナノハ・スプリングフィールドの、本当の友達としての関係の始まりだった。

【17】約束の指きり（後書き）

アリサとナノ八のお話。

## 【18】胎動するもの

あやかの夢

待って、待ってアリサちゃん。

前の通路を歩く妹のアリサを私は追いかけていた。

いくつも交差する迷路の向こうをアリサは歩いて行く。

それに追いつこうといくつもの扉を抜けて、ようやくその背中に追いついていた。

「アリサちゃん！」

あやかは懇願するように叫び、少女は振り返る。

そのあやかを見返す眼は冷たい光を帯びていた。

そして一言告げた。

「姉さまなんて大嫌い」

「え…な、何を言ってるのアリサちゃん」

「大嫌い。姉さまなんて大嫌いよ」

「嘘よ…ね？ 昨日のこと怒ってるの？」

「違う…」

「その、お姉さん、ちょっとアリサちゃんに会いたかっただけなのだからね…」

あやかはアリサの様子に口元を強ばらせる。

アリサは口元を釣り上げ、笑みを浮かべていた。

これまで見たこともない邪悪さが込められた笑みだった。

「ずっと前から思ってたわ。姉さまってうざい上にしつこいし、ベタベタしてくるし、友達には絡むし、最低最悪よ。知ってる？ 姉さまに絡まれて友達やめた人達、何人いるのか？」

「え…そ、それは…いいこと、アリサちゃん、私達は…」

「雪広の後継者である、莫大な財産を継承する雪広家の娘。いくらでもたかる虫はいる。姉さまは虫の駆除がお好きなのね。お陰さまで虫一つ、友達もできなかつたわ。はっきり言って、姉さまには消えて欲しいくらい」

その瞳がらんらんとあやかを見据えていた。

そこに宿るのは憎悪だった。

あやかは立ち尽くしたまま動けないでいた。

「ア、リサ…ちゃん？」

「聞こえなかつたの？ 消えてほしいって言ったの」

「や…アリサちゃん、私が悪かつたわ！ だから、だから…」

フフ…あやかの言葉にアリサが嘲笑う。

そしてその言葉の先を引き取って言った。

酷く優しい声で。

「嫌わないでほしい？ 姉さまつたらお馬鹿さんよねえ。妹に嫌われてるって、ずっと気がつかないで姉ぶって！！ 何がお姉さんよ、あなた如きが姉ですって？ 優秀な妹は両親の期待を一心に背負い、あなたにない彼らが求めるを持っている、雪広の跡継ぎにもっとも相応しい娘！ 誰もがこう思ってる…後継者は雪広あやかではない。雪広アリサってね。アハツハ、キヤーハツハ」

アリサの顔が歪んでいた。

嫌だ、嫌だ、こんなの知らない！

これはアリサではない。

あやかは叫んでいた、こんなの絶対嘘なんだ。

「おはようございます、あやかお嬢様」

雪広家のよく訓練されたメイド達が一斉にあやかに向かってお辞儀をする。

寝不足の泣きはらした目を押さえて、あやかはいつも通りのテールブルに付いていた。

麻帆良学園初等部の生徒は小学生でも寮住まいの生徒が半分、親元から通うのが半分の割合だった。

あやかは休日になると寮ではなく実家で過ごすために家に戻ってくる。

妹のアリサはまだ小さいので、実家から通っていて、姉妹で休日過ごすのが今の日課になっていた。

「ふう……紅茶をお願い」

「かしこまりましたお嬢様」

心底から湧き出るような溜息を付き、あやかは朝日が差し込む窓辺を見つめた。

嫌な夢をみた気がする。

執事が下がり、入れ替わるようにアリサが姿を現した。

「おはようございます、姉さま。顔色悪い……」

「え？ あら、そうかしら。ちょっと眠れなかったの」

アリサの頭に手を伸ばそうとしたあやかの動きが止まる。  
それを怪訝そうにアリサが見上げていた。

姉さまなんか大嫌い

「アリサ……」

違う…アレは夢だ。

目の前にいるアリサが本物なのだ。

「はい、姉さま？」

アリサが首を傾げて問い返す。

「…何でもないの」

あやかは視線を下げて、テーブルの下の自分の手を見つめていた。

アリサは向かい側の席に座った。  
執事が盆を下げてテーブルに付き、あやかには紅茶を、アリサにはココアを差し出す。

「ありがとう」

「熱…フーフー」

アリサが熱いココアを息を吹きかけて冷ましながら飲む。

背筋を伸ばし、淑女らしい洗練された仕草であやかは紅茶の香りを楽しむ。

朝の二人の短い一時は、何かを話すわけでもなく、ただ時間だけが過ぎていく。

あんなこと、アリサが言うわけないわ。

どうかしてる、疲れてるのかしら？

私は頭の中から夢のアリサを締め出す。

「そうだ、姉さま。明日のパーティが終わったら大事な話があるの」

「何かしら、アリサちゃん。ここで言えない話なの？」

「えっと…すごく大事な話よ」

真剣な顔を作ったアリサがあやかの顔を真つ直ぐ見ていた。

「いいわよ。でも…もしかして、こ、恋人がで、できたとかじゃないわよね！」

「は、はいー？んなわけないでしょ！友達ならできたけど」

「そ、そうよね。まだ早いわよね…」

「まったく、どうしてそっちに思考が行くのよ。小学校一年生なんだから」

盛大にアリサが溜息をついてみせる。

「昨日会った、ナノハって子かしら？ イギリス訛りだったわね」

頬に指を突いて、あやかは思い出したように言う。

「うん、ナノハ・スプリングフィールド。ウエールズからの留学生よ。一年生なのに勉強免除の留学で一年間こっちにいるんですって。あの子、すっごい日本語ペラペラなの。思考もいろいろと小学生離れしてるといふか。でね、ナノハをパーティーに連れてきていいかな？」

「そんなことなの？ もちろん構わないわ。アリサの大切な友達ですもの」

あやかは微笑んで、紅茶の茶色い液体の最後の一口を飲み干した。今年の雪広家で行われるパーティーは文字通り豪勢である。

アリサの入学祝いも兼ねた、あやかの社交界デビューの日でもあった。

まだ小学生、されど小学生。

数年すれば社交界の華の一人になるだろうと噂されている雪広あやかだった。

とはいっても、あやかもまだ社交界の場でパートナーを得るとかは考えてもいなかったから、級友も招待していた。

せいぜいが楽しく過ごせればいい。

その程度に姉妹二人は考えていた。

明石家

「ふあっ…あーあ」

明石裕奈の朝は早い。

今日一日の予定はすでに組み上がり、起きると同時に顔を洗い、着替え、朝食の準備をする。

本日はベーコンエッグである。

味噌汁に御飯とほかほかの朝食がテーブルに並ぶ。

「おー美味そうだな」

隣室から無精ひげで現れるのは我が家の父である。

しばらく床屋にも行ってないのか髪も伸びてきている。

一番気になるのはそのだらしない服装だった。

仕事しながら朝までなんてざらな人だが、娘の前で改めもしないのだ。

これでは恋人などできるはずもなかった。

「お父さん、土曜日だからってたるみ過ぎー」

「え、あはは、髭剃るわ〜」

「毎日剃んなさいよー!」

片手を上げて父は洗面所に消える。

まったく無精者なんだから。

私はフライパンから救い出したベーコンエッグを皿に盛りつける。  
今日はバスケット部の試合なんだ。

まあ、ポッコポコにしてやるけどね！

こっちには助っ人もいるし、何とか成るっしょ。

「フッフフン」

「おー、ゆるな、上機嫌だな。いいことあったか？」

ヒゲを剃った父が席に座る。

「えー？ いいことあるのはこれからかな。今日はデートだし」

「な、ななな。デ、デートだと。誰だ、どこの誰なんだ？ ちよつと連れてこい」

「明日菜とだけど？」

「なんだ、明日菜ちゃんか、驚かせるな」

「お父さんのマジな反応にドン引きしたわ」

裕奈はまずはベーコンエッグをより分けて自分の皿に盛る。

うん、塩加減OK。

味噌汁もまあまあ。

テレビからは何のこともない朝のテレビドラマのやり取りが聞こえてくる。

「うん美味しい、ご馳走さまでした。いや、料理の腕上げたなあ。やっぱり女の子なんだなあ」

「あのねえ、この程度で料理の腕もないってば、慣れよ慣れ」

「そんなお父さんは味噌汁一つも作ったことがないが？」

「自慢そうに言うなー！」

「はは、じゃあ、ちっと仕事があるから戻るぞ、片付けよろしく頼む」

「ちょ、お父さん」

パタン、と音を立てて隣室の戸が閉まる。

『面白いお父さんだね』

『だらしがないの！』

『ゆーなはいい子だね』

「ちょっ」

思わず声に出て、慌てて自分の部屋に飛び込んだ。

『ユーノ、ずっと黙ってたから寝てるのかと思ったよ』

胸のポケットには【ジュエルシード願いの種】が入っていた。

今それは生暖かく感じて、まるで生きているような感覚を思わせ  
た。

『ああごめん、ちょっと重要な話があるんだ。昨日はあまり話が  
きなかったしね』

『寝ちゃったもんね』

『力がまだ戻ってなかったんだ。でもゆーなのおかげで随分違うよ  
』  
『オツケー。今日はバスケの試合あるから移動しながら話そう』

裕奈は玄関を出て自転車置き場に向かう。

『重要な話って?』  
『実はね、ジュエルシード【願いの種】ジュエルシード なんだけど、麻帆良に落ちる時、効率良く魔力を集めるために分身を放って分かれたみたいなんだ』

ナニソレ?

分身?

ネガイヲカナエルイシガ?

『ちょっと、もっと早くそういうこと言わないかな!』

『僕もさっき確認できたことなんだよ』

『えーと、んでどうなるわけよ?』

『大変なことになるかも』

『さいですか……』

願いを叶える石が分身作って飛び散ってるとか、マジでドラゴンボールでした。

裕奈は自転車に跨って、まだ朝の空気が強い街中を走りだす。

『願いを叶えるって言っても、まだジュエルシード【願いの種】に宿る力はごくわずかだ。だから成長し切らないうちに回収できればいいんだけど…』

…』

『その先どうぞ!』

『人の願いに反応してジュエルシード【願いの種】は蓄えられた力を解放するけど、純粋な人の思いであれば正しく魔法の力を発揮するんだけど、歪ん

だ思いは【ジュエルシート願いの種】を魔物に変えてしまつんだ』

『はあ！？ 何ですとー。ま、マモー？』

どこぞのアニメの敵役かよ、とどうでもいい思考をする。

ちなみにマモーはお父さんの持ってたアニメのビデオを見て覚えてた。

『魔物だよ。人の心を歪めてしまったものだよ。【ジュエルシート願いの種】は願

いを叶えるだけじゃないんだ』

『そんなの聞いてないよお』

『放置しておくとか誰かが傷ついてしまつかも知れない……せめて回収できるだけ集めたいんだ』

『それってもしかして…石探し手伝ってことですかい』

『ごめん…』

別にユーノが悪いわけじゃない。

そんな事になる原因を作った連中が悪いんだ。  
なのにユーノがその尻拭いをしようとする。

『君は僕が守るから』

全部自分で背負おうとしている。

『わかった。協力してあげる。だいたい、ユーノは一人で何もでき

ないでしょ。探す当てはあるの?」

「…ありがとう、本当ならこんな危険なことは……」

「あー、ごちゃごちゃ言わないの! 当てがあるのか教えてよ」

「うん、【シユエルシート願いの種】に同調してるから近くにあればわかると思うんだ。今はまだ取り込んだ魔力が少ないだろうから、反応すらしないかも知れない」

「ふうん? じゃあ、少しだけ余裕があるってことね。今日の試合が終わったら探してみようよ」

「ゆーな、ありがとう」

一瞬間をおいてユーノが答えた。

『どづいたしましてよ!』

勢い良く坂道を降りきった自転車はいったん跳ねるとバスケットコートまで走りこんで、すでに仁王立ちで待ち構えていた明日菜に向かって突っ込んだ。

「あすにゃー、どーいーてー」

「ちよっ! ば、ばかーこっちくんなー」

焦った明日菜が逃げ出して、コートの端までの逃走劇。

バランスを崩したゆーなの自転車が派手にフェンスに衝突して、立ち上がった裕奈の頭にはお星様がキラリと光る。

もつとも衝突の際、柔らかな風が裕奈の体を包んだのでほとんど外傷はなかった。

『ゆーな、大丈夫？』

ユーノの心配する声がフラフラする頭に響く。

「ら、らいじょうぶ……今日はあ勝つぞぉー」

右手を掲げて裕奈はガッツポーズ。

割と生きてた裕奈を明日菜が呆れ顔で迎え、試合を見物に来たクラスメイトの佐々木まき絵と和泉亜子が、ベンチからやんやとゆーなガンバレーと声援を張り上げるのだった。

まだ試合は始まってもないのだが。

結論から言おう！

試合には勝った（笑）。

初等部バスケットの平和は守られた。

ありがとうみんな、声援ありがとう。

助っ人明日菜とユウナキッドの活躍で、悪は潰えたのだ。

完

【18】胎動するもの（後書き）

いや、終わってねーから。

【19】ジュエルシード事件 雪広騒動(前) (前書き)

タイトルが猫鍋騒動みたいだなとか思ったり。

【19】ジュエルシード事件 雪広騒動（前）

「でっかい」

「お、おっきいの」

ナノハとネカネが雪広邸に到着したのはまだ朝も早い時間だった。洋風の御邸に広大な庭はまるでお城そのものだった。

バニングス家もかなり大きなお屋敷だったが、雪広家も全く負けていなかった。

どちらが上とか、そんなことを比べるのは無意味に思える。

来訪を門前で告げてしばらく待つと、屋敷の方からカート・モービルが向かってくるのが見えた。

運転しているのはメイドさんで、ドレス姿のアリサがこちらに向かって手を振った。

「やつほー、ナノハ」

「あれがナノハの友達のアリサちゃんね」

「うん、そうだよ」

ナノハが車椅子を押しして、やってくるアリサを正面から迎える。

モービルから身軽に降りてアリサは二人の前に立ち、運転していたメイドに戻るように告げると、モービルはUターンして屋敷の方に走っていった。

「ようこそいらっしゃいました」

と、アリサは振り返って、丁寧にお辞儀を試みせる。

ふんわりフワフワとスカートのピンクのフリルが揺れて、アリサ

の可憐さを引き立てていた。

「お招きにあずかりまして、ありがとうございます」

頭を下げてネカネも挨拶を返す。

対するナノハとネカネの衣装はドレスではなく、白く淡い柄のワンピースだった。

袖口を飾る細かい刺繍のレースがアクセントで、こういうこともあるうかと、ロンドンで同じ衣装を揃えたのだ。

フォーマルにも対応できるからと、ネカネお姉ちゃん自らのプロデュースだった。

「アリサちゃん、ネカネお姉ちゃんです」

「初めまして、雪広アリサです。ナノハと同じクラスです」

「ネカネ・スプリングフィールドです。こんな素敵なお家に招待されるなんて光栄です」

ネカネお姉ちゃんがほがらかに笑うと、途端にアリサは真っ赤になっ  
て縮こまった。

どうしたんだろう、とナノハは首を傾げる。

「まだパーティーには時間があるわ。よかったら庭を案内するわ」

「どうしようか、お姉ちゃん？」

「まあ、ぜひお願いします。ね、ナノハ」

「うん、アリサちゃんお願い」

「じゃあ、ついてきて」

庭園風の前庭は噴水や生垣に草花がバランスよく配置されていて、

まるで王城の中の世界にでもいるかのようだった。

特にネカネは慣れないせいもあるけど、少し興奮気味だ。

あちらには何があるの？ としきりにアリサに尋ねている。

ちよつとだけナノハは置いてけぼりである。

「まあ、いいか」

と、ナノハは噴水の近くのベンチに腰掛けて、水のせせらぎの音を聞いていた。

その時だ 背筋にゾクリと悪寒が走るのを感じたのは。

今…のは？

周囲を見回すが何の兆しも読み取ることができない。

アリサとネカネがいる方角を見た。

二人は花壇の前で花の種類の話をしているようだ

気のせいなのかな？

視線を屋敷の方角に向ける。

あちらからだろうか？

ひどく刹那的な感覚でしかなかった邪まな意思の胎動にも似たそれは、ナノハがかつて感じたことがあるものに酷似していた。

ジュエルシード。

この世界は確かに魔法があつて、魔法使いがいるけれど、ジュエルシードが存在するのか、ということは考えたこともなかった。

だがこつとも思つのだ。

あつても不思議ではないのだと。

そして偶然にも、再びナノハの前に姿を現すと？

ユーノ君は、この世界のユーノ君は確かに存在した。

で、あるならば……何かの因果であちらに存在したものがこちら

に存在しても不思議ではない。  
予感も動悸へと、堪らない不安に心を駆り立てていく。

『レイジングハート』  
『イエス・マスター』

すぐさまレイジングハートが応える。

『変な魔力のゆらぎを感じたの。ここ、何かあるのかも』  
『いかがしますか？』

『魔力を探ってみる。《エリアサーチ》を使うよ』

《All Right》

ナノハを中心に桜色の魔力のコアが膨れ上がり、周囲に溶け込んで拡散して消えていく。

魔力を感知する波はわずか数秒で半径百メートルに達し、十秒で最大範囲に到達すると、ほぼ雪広家の敷地内を覆い尽くしていた。

魔力を持った存在が…一、二…とそれが人間であることを確認すると、人に近い反応のものは除外していく。

もっと無機質に近い、そう、マジックアイテムやデバイスに似たものに限定してサーチをかけていく。

何これ？ 反応が一つ、それも人と重なるように存在している。その反応はまるで…と、ナノハの脳裏に、かつてジュエルシード探索の際に助けた、樹木に飲み込まれた少年と少女の姿が思い浮かび驚愕する。

すでに何かが取り付いている？

でも、何故何も起きていないのか、という事実には、あれはジュエルシードではないとナノハは思考を巡らせる。

あるいは、まだ発動していないだけなのかはわからないが、放置しておくのは危険だとナノハの勘が告げていた。

「ナノハ、おーい？ 起きた」

眼を開けると目の前にアリサがいて、ナノハに訝しむような視線を向けていた。

説明する時間が惜しい。

「あの、アリサちゃん。お手洗い借ります！ お姉ちゃん達はここにいてね、絶対に動いちゃ駄目だよ！」

「え、なあに？」

と、花壇からネカネが振り向いたときは、すでにナノハは屋敷の方に駆け出していた。

「ちよっ！ トイレならこっちにもあ……」

後に残されたアリサは自分が指さした方角を見て溜息をつく。

「はあ… なんなのよ、もう！ 迷子になっても知らないんだから」

「じゃあ、私達はここで待ちましよう、嫌かしら？」

「いえ、そんなことないです。ネカネさんと話してて楽しいし」

と、振り返ったアリサの顔は笑顔を形作る。

雪広家の人間として培った笑顔掌握術である。

内心、ナノハめく、人の話を聞かないやつっ！

絶対、後で穴埋めさせてやるんだからね、と微笑みながら正反対の思考をしていた。

それに、何かネカネさんて明日菜姉さまに似てるんだ、と今更ながらに気がついた。

大人っぽさでは年上の分、あやか姉さまより遥かに大人の物腰だし、少しだけナノハが羨ましかった。

こんなお姉さんが私の理想なのかも知れない。

そのアリサの姉であるあやかは少しばかりアリサ偏愛の傾向はあるものの、概ねは良い姉なのではないかとも思うが、過剰で一方的な愛情は少しばかり重いのだ。

そのことで先日は切れかかり、あやかの前から逃げ出したばかりだ。

「アリサさん、何か悩み事があるの？」

深い吸い込まれそうな青い瞳でネカネがアリサの側で見つめていた。

ああ、そうか、この瞳はナノハによく似ているんだ。

アリサはナノハの従姉妹であるネカネになぜ惹かれるのか理解した。

「はい、でも大丈夫。今日、それは解決するはずですから」

アリサは笑ってそう答えていた。

今度の笑顔は作ったものではない、心からの笑顔だった。

「あ、くうう、もう何ですの、役に立たないカメラね！ 集音マイクをもっとこうして…」

一人自室のマイルームと称されるハイテク機器が集うその部屋で、雪広あやかは複数のディスプレイと向き合っていた。

モニタは、アリサ、アリサ、アリサアリサで埋め尽くされている。リアルタイムなのか、様々な角度から拡大縮小されて映しだされているのだが、雪広家の警備システムを大いに利用したそれは、アリサを追うための完璧なシステムとして機能しているのだ。

あやかは焦りを隠せないでいる。

なんてことですよ、雪広家の娘が無条件に笑顔を向けていいのは、身内でも私だけのはずなのに、なんてうらやまけしからん……取り乱したわ。

荒く息をついて、あやかはモニタに映るアリサに頬ずりをする。

そしてアリサに笑顔を向けさせた少女に覚えた羨望を嫉妬と理解しながら対策を練る。

熱く熱しながらも頭はクールに働いている。

もっとアリサちゃんにお姉様としての素晴らしさを刷り込まなければならぬわ！

その時、胸の中で何かが蠢いた気がした。  
ドクン、ドクンと波打って、それは大きくなっていく。  
何ですか、これ？  
あやかは胸元を押さえる。

マイルームの扉がガンガン叩かれ、野蛮な少女の声が向こうから響いた。

「こらあ、あやか！ いい加減出てきなさいよ。パーティ始めるんでしようが、このヒッキー女！」

突然扉が音を立てて開き、勢い余った明日菜が前のめりに倒れそうになるのを、見事な身体バランス感覚で持ち直した。

「とつと、危ないじゃないの！」

「あ、明日菜さん？ まったく、乱暴に叩くのは止めてくださる？ 猿山の猿みたいですよ？」

「ムキー、誰が赤尻のアホ猿よ！」

「あら、自覚があるのねお猿さん」

ピクピクとこめかみを痙攣させて明日菜が震えるのをあやかが涼しい顔で腕を組んでみせる。

余裕のポーズといった風情だ。

「根暗な妹マニアのくせに」

「明日菜さん？」

「あら、なあに根暗妹オタク」

明日菜はマニアにオタクを加え、お互い引きつった笑顔を浮かべた二人の見えないボルテージが上昇中。

「ぶっ殺しますわっ！」

「受けて立つわよお」

二人の間で終わることのないバトルが始まるのを、メイド達が必死に止めようとして巻き込まれていくのだった。

## 明石家

「んーふが、むにゅ…」

『ゆうな、ゆうなってば！』

「…はむ」

『起きなよ、ゆうな』

何回目になるかわからないその問答は、ベッドで爆睡する祐奈にユーノが呼びかけるシーンだった。

今日は雪広家でパーティが行われるのだが、誘われていて楽しみにしていた祐奈が寝ているのでは意味が無い。

ユーノが諦めずに何回目かの呼び掛けを再開すると、ようやく薄目を開けるが、うるさいなあ、とまた瞼を閉じかける。

『特大ケーキ食べれなくなるよ、ゆーなっば!』  
「はっ! ケーキ」

ようやく起きた祐奈は、寝ぼけた頭で周囲を見回した。

『起きた?』

「あん?」

『今日はパーティーなんじゃないの』

「あー!?!」

その言葉にようやく祐奈は頭をはっきりさせて時計を見る。

「ちよっ、もう始まるんじゃないの!」

『いや、だからずっと起こしてただろう?』

「こうしてらんないにゃ〜、遅刻遅刻〜」

昨日から用意していた晴れ着服をハンガーから外し、祐奈はパジャマを脱ぎ捨てる。

宝石の中のユーノは慌てて後ろを向いた。

「よし、オツケー」

『ゆーな、クセツ毛になってる』

「うおお〜」

わからない気合を入れて、祐奈はブラッシングが終わると、猛ダッシュで表に飛び出していた。

静かになった明石家の一室の襖が開き、顔を覗かせたのは明石家父である。

寝不足なのか、焦点は定まらない。

「ん、祐奈？ パーティだっけか、あいつも女の子なんだなあ」

と、空腹の音を響かせる腹をさする。

テーブルの上には大急ぎで作ったと思われる目玉焼きがラップを掛けて載せられていた。

うん、と大きく背伸びをして、遅めの朝食を父は摂るのだった。

何せ本国から送られてきた最新データとのにらめっこで一晩また徹夜してしまったのだ。

それにしても最近は何騒な事件が多い。

遠いあちら側の世界だが、今回の件は中々無視できない内容だった。

何せ殺人が絡んでいるし、強力な魔法の品が流出したという。

その最新のデータには【ユゲドラシル・ドロップ世界樹の涙】とそれを奪取して逃亡中の殺人犯であるオコジヨ妖精、ユーノ・スクライアの写真が添付されていた。

もしかしたら麻帆良も無関係ではいられないかも知れない事件だった。

やれやれ、報告するとまた仕事が増えそうだ、と父はのんびりと朝の朝食を平らげた。

【19】ジュエルシード事件 雪広騒動(前) (後書き)

三日ぶりである。

月に原稿用紙200も書けば満足なんです、書けるなら書いてしまおうと更新。

ちょっと表記における書き直しもしたところで、話によってそういうがあるので微妙修正をする予定。

視点変更時における違和感がありましたらご一報ください。

明石教授って名前あったかな、名無しもなんだから募集しよう、というアンケートを取る。

まあ、なくても・・・問題ない、のか？

【20】ジュエルシード事件 雪広騒動(中) (前書き)

長いので中編を入れます。

【20】ジュエルシード事件 雪広騒動(中)

飾り付けを持つ手が止まって、少女は疲れた手を休める。  
空中でオレンジのツイントールが揺れる。  
そして溜息を吐く。

「ふう…」

「駄目よ、明日菜さん、その飾り付けはもう少し上げてちょうだい」

「にやにく、さっきは下げろって言ったじゃないのよ！」

明日菜は振り返って下にいるあやかに文句を言う。

「だって見直したらバランスが悪いんですもの」

「はいはい、さいですか」

脚立の上で明日菜はパーティの飾りの位置を直していく。  
会場となる広間と中庭には雪広家のメイドが大勢集って、テーブルのセットやら何やらをテキパキとこなしていく。

相変わらず凄い豪邸よねえ、と明日菜はグーグー鳴る空腹のお腹を抑える。

何せ貴重な食料調達のチャンスである。

日頃けちけちと食費を制限しているので、このパーティはお腹を満たしながら、次の日の食料もゲットしてしまおうという明日菜の作戦である。

「あーあ、早く始まんないかしら。あやか？」

と、下を見ると先ほどまでそこにいたあやかの姿がない。

「どこ行ったのよ？」

もう少ししたらパーティが始まるのだ。

その最終チェックをしているのに、責任者がいないのでは話にならない。

「もー、あやかどこ行ったのよー。お腹：減った」

明日菜はへなへなと座り込むが、鋭敏になった鼻がその匂いを捉えていた。

メイドがテーブルに運んできた最初の料理に目を留めると、もう我慢できないと脚立を放り出していった。

何だろう、この感覚……さっき感じたおかしな気配のせいなのかしら？

あやかは一人、トイレの別室で鏡と向かい合っていた。

今日最高の持て成しの準備は万端、ドレスも最新の新調だし、雪広家のホスト役として恥ずかしくない門出をするのだ。

だが先程から、胸の内がまた苦しくなって、あやかはトイレに駆け込んでいた。

こんな時に：鏡に映る自分の顔を見つめる。

次代の雪広を継ぐ一人の少女がそこにいる。

このパーティを成功させて、あやかが雪広に相応しい跡取りであることをアピールする機会なのだ。

日頃口さがない連中の囁きはあやかにも届いていた。

雪広の後継者は雪広アリサこそが相応しい。

その声は陰ながら、家中の人間の間でもこっそりと囁かれていることだった。

アリサには人を惹きつける天賦の才能がある。

誰からも好かれ、もちろんあやかもアリサを愛していた。

妹に全てを背負わせることをしたくなかった。

だからこそ、あやかは姉として、雪広の後継者として相応しい働きを示さねばならない。

姉として、雪広の人間として、私はアリサに並び立つ人間にならなければならぬ。

だから、今日は失敗するわけにいかないのだ。

じんわりと冷や汗を感じてあやかは目を閉じていた。

その冷たさは全身に浸透して身を侵していく。

体調の不良にあやかは歯を食いしばる。

「今日に限ってなんですの？」

背中に気配を感じる。

ああ、誰か来たのかしら？

「明日菜さん？」

放ってきてしまったから追いかけてきたのかしら。  
こんな姿見られたくないわ。  
返事がないのを訝しんであやかは目を開く。

鏡に写るのは一人の少女、アリサだった。  
だがすぐにあやかはその異常さに気づく。  
アリサならば友人を迎えに行くとして出たはずだ。  
そしてそこにいるアリサは学校の制服を着ている。  
あやかが送り出したアリサはドレス姿だったはずだ。  
そして身にまとう雰囲気はあやかの知るアリサではなかった。  
青白い冷気を身にまとい、その瞳は濁り暗かった。

「ア…アリサ？」

その瞳にあやかは囚われる。  
ああ、違う…アリサちゃんじゃない。  
アリサはそんな眼を姉に向けたことはなかった。  
そう悟った次の瞬間、あやかの意識は闇の世界に捕らわれていた。

《姉さまなんて大嫌い》

ああ、憎悪の瞳があやかを捕らえて離さない。  
一歩前に足を踏み出すアリサにあやかは微動だにできない。  
体が動かない。  
ああ止めて、止めてアリサちゃん。  
その先を聞きたくない。

《その昏き意思を解き放ちなさい》

嘲笑うアリサの形をした何かの手が差し伸ばされる。

その指が指し示す先、あやか胸元に宝石が浮かび上がり、石は澄んだ蒼から濁った黒へと変色していく。

《目覚めなさい》

少女が囁く。

空間から黒くうごめく帯が現れ、あやかの全身にまといつき、黒い帯が産み出した繭の中にその肉体が包み込まれていく。

悪しき魔力の波動が漏れ出して、周囲を無色に染め上げていく。

《さあ、すべてを解放しなさい》

黒い帯が伸びて偽のアリサに取り付くが、少女は笑みを張り付かせたまま黒い繭の中に取り込まれていく。

そして時は静止して、暗い闇の波動が放たれた。

走るナノハの背筋に悪寒が走る。

これほどのはっきりとした気配は間違えようがなかった。

「やっぱり、ジュエルシールドだ！」

予感は確信へと変わる。  
何故とか思考している余裕はない。  
あそこには大勢の人間が集まっているのだ。

『レイジングハート、行くよ』

《All Right》

我、使命を受けし者なり

契約の下、その力を解き放て

風は空に、星は天に

そして、不屈の心は

この胸に

この手に魔法を

「レイジングハート・セットアップ！」

《Stand by ready .

Setup》

光に包まれ、バリアジャケット姿になると同時にナノハは地を蹴って加速する。

この感覚…重い！

瞬時に空間そのものが大きな魔力の影響下にあることを悟る。

この感覚は知っている。

間違いなく人間の想いに反応し、成長したジュエルシードの力だった。

周囲の空間すべてが停止している。

静止した時の中で、その影響をナノハに及ぼそうとする力の存在を知覚する。

闇の波動だ。

瞬時に飛行モードで飛び上がったナノハの立っていた位置にその黒い帯が突き刺さっていた。

油断なく警戒するその背に気配を感じ取るが、その動きは速かった。

《Protection》

質量を伴った黒い帯が咄嗟に張ったバリアに直撃し、火花を散ら

せる。

大した攻撃ではないと判断するが、軌道が見えない。

「迎え撃つ！」

《Divine Shooter》

桜色の光弾が複数の黒い帯を打ち砕くが、不意の重力の変動に、ナノハは大地にその身を打ち付けられていた。

モクモクと土煙が立ち上がり視界を奪うがダメージはほとんどなかった。

「重力波攻撃？」

「イエス・マスター。重力震の弾道です。打ち出された数は五つ。複数来ます！」

「範囲防御！」

《Wide Area Protection》

間髪を置かず、黒い槍が大量に振りかかるのをナノハはバリアで防ぎきるが敵の位置が掴めない。

「どこから攻撃してきてるの？」

「マスター、建物の中からでしょう」

「さつき探知した位置かな？」

「わかりません」

『一か八か、中に突入するよ。レイジングハート』

《All Right》

瞬動を発動させて大地を蹴り、静止した人達の間を駆け抜けると、開いた窓から屋敷の内部に飛び込んでいた。

屋敷の中からは何の気配も伺うことができない。

唯一、冷たい闇の気配が色濃く漂っている。

ひしひしと感じるその気配にナノハの精神は研ぎ澄まされていく。それは戦場にいる感覚だった。

世界に生を受けて七年あまり、かつてほどの力はまだないが、レイジングハートと共にこの数年で磨き上げたものは強固だ。

その力には自信と信頼を抱いている。

わたしはもう昔の高町なのではない。

ユーノ君はいないけれど、やり遂げてみせる。

『見つけたっ！ 三階にいる』

ジュエルシードの位置を把握して立ち上がる。

『重力震来ます。正面』

『チャージ！』

《Short Buster》

重力攻撃を破壊するために近距離砲撃に切り替えて撃ち出すと、そのまま階段の踊り場から上へ駆け出していた。

「ち、遅刻…ギリギリセーフ？」

雪広家の門前で、肩で息を切らせた祐奈が息を吐き出した。右側で結んだサイドテールが力なく垂れる。

『何かおかしいよ、ゆーな』

警戒するようなユーノの声に祐奈は顔を上げて、門の柵の向こうを覗き込む。

おかしいと言えばおかしい。  
チャイムを鳴らしたのに何の返事も帰ってこない。  
こんなことはありえないはずだ。

「うーん、おかしい」

腕を組んで頭にはてなマーク。

「で、何が？」

『魔力を感じる。これは…【ジュエルシード願いの種】だ！』

「ええ！？ ちょっと、まだ何日か余裕があるんじゃないかなかったの？」

私はユーノから【ジュエルシード願いの種】が力を取り戻すのに一週間近くはかかるはずだという話を聞いていた。

それなのに早すぎるのだ。

「わからない。でも魔力を補給する手段があれば別なんだ。もしくは人間の宿主を得たのかも知れない」

「えっと、それってやばいの？」

「宿主次第なんだ。人間の心は変動しやすいから、固定化されてない【ジュエルシード願いの種】は容易く力の性質を変えてしまうんだ」

「えーと…んで、この中からその力を感じるってことは、誰かが力を発動させちゃった…ってことだよな？」

「間違いないと思う……」

「私のパーティは？」

「ゆうーな、まず石を探して、可能なら回収しないといけないかもしれないんだ」

「そう言っと思ったよー！」

「不法侵入つすよね、これ……」

門の柵を乗り越えた祐奈が呟く。

そして異様な気配は祐奈にも感じ取れた。空気が重くのしかかって来るかのようだ。

「ねえ、これ何なの？」

「ゆうーなっ！ あれ」

前庭の木々が生い茂る方から一人の少女が駆けてくるのが見えた。その背後が突然盛り上がり、黒い帯状の何かが撃ち出されて少女の足に絡みついた。

「いやあ、来なさいで、バケモノ！」

「ユーノ、なんか不味いよ！」  
『間に合え！』

少女が光に包まれて黒い帯が弾き飛ぶ。

『彼女を確保して！ 何度も来られると防げない』  
「ラジャー」

祐奈は走ってその少女を抱き上げるが、少女は腕の中で暴れた。

「キヤアキヤアツ！」  
「暴れるなー！ 私は味方だーっ！」  
「あ、れ…？」  
「アリサちゃんだよ。私は祐奈、あやかの友達だよ」  
「お姉ちゃんのこと？」

『のんびりしないでっ！』

私はハツとして上を見上げると、黒い帯が集まって人型のバケモノに姿を変えていた。

まるで闇そのものが形になっているかのような、意思を吸い取るような禍々しい気を発散させていた。

何、何なのこれ？  
これが本当に【ジュエルシート願いの種】の姿なの？

それが二人を捕まえようと腕を伸ばすが、今度も光の円に包まれて黒い巨人の腕を弾き飛ばす。

『結界防御を張ったんだ。後何分かは持つけど、長期化すると不味いよ』

ユーノの言葉に周りを見回すと、黒い何かが地面から染み出して黒い帯が重なってもう一体の巨人が生み出される。

嘘、これじゃジリ貧じゃない。  
腕の中のアリサが震えている。

駄目だ、この子を守らないといけない。

「あつちにネカネさんがいるの！ 助けなきゃ」

「誰？」

『何、だつて!?!』

「ちよ、ユーノ、何？」

「？ 誰と話をしているの、ユーノつて？」

「あはは、何でもない」

『何よ、ユーノ』

『…なんでもないんだ。それよりこの状況をどうにかしないとけない。ユーノ、君なら【ジュエルシート願いの種】の力を使いこなせるかも知れない』

『つて、どゆこと!?!』

『【ジュエルシート願いの種】に對抗できるのは魔法の力だけだ。そして同じ【ジュエルシート願いの種】の力なら封印もできる。君に全てを委ねるしか突破口は見いだせないんだ』

『もう何よ、ユーノは私を守るんじゃないの？』

『お願いだ。今はそうするしか、君とこの子を守ることができないんだ』

そうだ、アリサちゃんを、それにまだ人がいるなら助けなくちゃいけないんだ。

『ユーノ、どうすればいいの？』

『僕と心を合わせて、君が望む魔法の杖を、武器をイメージして、それが君自身の魔法となる』

『えーっと…心を合わせるって？ どうすりゃいいのよー』

『…じゃあ、僕の言葉に続けて復唱して、そうしながら、君が描く武器のイメージを固めるんだ。武器って言っても魔法の杖と同じなんだ。それが【ジュエルシート願いの種】が現す君の力そのものとなる』

『わかったよお、なんて言えばいいの？』

『僕の…大事な友達がその言葉で戦う力を得ていたんだ。その言葉を君に贈る』

次の瞬間、結界に大きな衝撃が走る。

見上げると光の結界にヒビが入っていた。

すぐに塞がるものの、超重量の破壊音が木霊して、泣きじゃくるアリサを祐奈は抱きしめることしかできなかった。

『急いで、もう持たないよお』

『ゆるいな、イメージを固めるんだ。君がもっとも力を預けていいと

思うものを思い描くんだ』

『やってみる…武器…武器……』

剣とか槍とか、そんなもんじゃあれは倒せない。

戦車とか戦闘ヘリとか、は操縦免許持ってないし……私が一番心を預けられる武器。

それはたった一つしかなかった。

『何となく掴めたよ、私の武器』

グツと拳を固めて見せる。

怖い、凄く怖い。

でもなにもしないままこのままやられるのなんてもっと嫌だ。

どんな力だつていい、この腕の中にいる少女を守れない後悔なんてしたくないから。

だから決意の言葉を告げる。

『いつだっていけるから』

『ありがとう、それじゃ行くよ。』

我、使命を受けし者なり。

「我、使命を受けし者なり」

契約の下、その力を解き放て。

「契約の下、その力を解き放て」

風は空に、星は天に。

「風は空に、星は天に」

そして、不屈の心は。

「そして、不屈の心は」

この胸に。

「この胸に」

この手に魔法を。

「この手に魔法を！」

「お姉さん？」

アリサが驚いた顔で祐奈を見上げていた。

見てて、アリサちゃん。

私がこいつらをぶっ飛ばしてやるんだから。  
だから私は彼女に笑ってみせた。

「来たれ！」

イリス・トルメントゥム  
《七色の銃》

橙色の魔力光に包まれて私はその言葉を叫んでいた。

何故か分からないけど、それはずっと私の一部だったような気がした。

胸の奥から沸き上がるようなその力は全身を満たし、握り締めていたのは二丁の拳銃だった。

わかる、使い方が、まるでそれは体の一部であるかのようなようだった。

『ユーノ、次の攻撃が止んだら、結界に私が抜けられる穴を作って』

『危険だ、一緒に戦わないと』

『駄目だよ。ユーノはアリサちゃんを守って』

『わかった。でも無茶はしないで』

『オーライにや〜』

そしてアリサちゃんを離して、じっとしてるように言っと素直に従ってくれた。

その手にユーノが宿る【ジュエルシート願いの種】を渡す。

「これは？」

「お守り。アリサちゃんを守ってくれるから、じっとしててね」

「うん……」

『行くよ！』

撃ち下ろすような攻撃が中断した瞬間、祐奈が飛び出すと同時に

三体にまで増えた黒い巨人が追いかけてくる。

「こっちよ来なさい」

祐奈の健脚を生かしたフットワークで、祐奈は木々の生えたエリアに巨人を誘い込んでいた。

茂みに紛れ、相棒の《イリス・トルメントウム七色の銃》を見る。

「さあ、行くよ相棒」

一二丁拳銃を交差させて、祐奈は不敵に笑ってみせた。

【20】ジュエルシード事件 雪広騒動(中) (後書き)

パクティオーなしでアーティファクト召喚。

始動キーがRHと同じなのはご愛嬌。

【21】ジュエルシード事件 雪広騒動（後） （前書き）

結構話が長くなりました。

祐奈視点の展開は次話の「雪広騒動（後始末編）」になります。  
雪広騒動だけで五話使ってしまうのであるな。

## 【21】ジュエルシード事件 雪広騒動（後）

周囲に感じる魔力の気配はあまりにも濃密だった。

まるで、海の中を進むような外圧をバリアジャケット越しに感じとり、ナノハは荒い息をついた。

魔法障壁の強度を上げるが、質量感を伴う、べつとりと浸透してくるような魔力の圧力の感覚までは防げず、背中に冷や汗をかく。動くことに支障はない、が、それでもまとわりつく不快さと疲労感に嫌悪を感じずにいられない。

魔力を持たぬ普通の人間なら立つことすらままならぬほどの圧力だ。

こんなに濃い魔力だなんて、とジュエルシード一つの影響にしては巨大すぎると思考する。

ロストログイアクラスの力であることは間違いない。

この世界にその概念はないし、時空管理局も無いんだけどね、と苦笑する。

それにナノハの知るジュエルシードの変形にしては力が特殊であるように思えた。

時を限りなくゼロにまで静止させる圧倒的な力は、ナノハが知るジュエルシード複数個分に匹敵するものだ。

ジュエルシードという観念をナノハは捨てることにした。

「はああっ…」

《Divine Shooter》

空間から飛び出した、予測不可能な黒い帯状の槍の攻撃を咄嗟に身を捻ってかわすと、杖の先から生み出した光弾が黒い槍を撃ち砕き、ナノハは長い廊下を疾走する。

飛び抜けた空間把握能力、というナノハ特有のレアスキルと、瞬動を駆使して何とかよけている状態だ。

そんな攻防を繰り返しつつ、ナノハの動きを封じようとする重力の塊を破壊していく。  
きりがなかった。

『レイジングハート、魔力の流れが重すぎて本体の位置が特定できない』

『サーチは不確定です。撤退すべきかと思います。立地的に不利です』

『厄介、だね。本体を叩かないといけないんだけど…』

重力震の最後の一つを破壊し、ナノハは視界すらも歪ませる魔力の渦の中で悔しそうに呟く。

『空間操作系の時空魔法に重力魔法、離脱すべきです。相性が悪いかと』

『でも……』

レイジングハートの言うこともわかる。

できるなら距離を取って対処するのが一番だが、すぐにその考えを捨てる。

駄目だ、ここで逃げても引きずり出せないのであれば被害が出るだろう。

確かな悪意のようなものをその存在から感じていた。

それに立ち止まることも許されない。

「っ！」

《Protection》

正面からの千本串のような黒い槍の雨に防御魔法では耐え切れずにバリアジャケットに損傷を負う。

《Divine Shooter》

そして追撃が来るがナノハは冷静に光弾で身を守る。

攻撃のパターンは単調すぎる。

タイミングが凶りにくいだけだ。

わたしは冷静だ、大丈夫、とナノハは自分に言い聞かせていた。

もう何度防いだかわからない攻撃を凌ぎつつも、濃い魔力を垂れ流している元凶の部屋に近づいていた。

なんとか魔力の流れる大気の状態からその位置を割り出していた。黒い槍や重力震程度の威力では大したダメージも受けないが、周囲に満ちた重い魔力はナノハの体力を確実に奪っていく。ぐずぐずなどしてはいられなかった。

この扉の先にいる！

漏れ出る魔力は確かにその部屋からのものだった。

質量感を伴う、流れ出た魔力で開いた扉の向こうにナノハはその正体を見ていた。

大きな黒い繭が部屋の中央に浮かんでいた。

黒い帯が無数に取り巻き、天井から繭を吊り下げていて、その中心に少女の顔が浮かび上がっている。

「あやかさん!？」

先日会った、アリサの姉のあやかの姿にナノハは驚きの声を上げる。

それが一瞬の油断となった。

『マスター!』

黒い繭から放出された力が波のように周囲を満たし、ナノハに襲いかかっていた。

回避も防御も間に合わないその奔流はナノハを二階の階段まで押し流し、階段踊り場の壁に激しく体を打ち付けていた。

一瞬だけ意識が飛びそうになるが、ナノハはすぐに立ち上がった。

ダメージはないが、あの魔力の渦の塊の直撃を受けて、バリアジヤケットに浸透した端から肉体の脱力感を覚えていく。

あの波動のような魔力の塊の影響だろうか、不味いな…とわたしは荒い息を吐き捨てていた。

自分が抱える欠点、それはまだこの肉体が幼く、肉体的な疲労に弱いことだった。

魔力と習った技でどんなに強化しても、屈強な大人でさえパンチの一撃で沈めようと、ベースとなる肉体はまだ七歳になったばかりの少女の体では、いったん疲れを見せればあっという間にその脆

弱さを露にしてしまうのだ。

もう少し成長すればそんなこともなくなるが、このままでは本当にギリ貧だ。

早く決着をつけないと、あやかさんを助けるんだ。

「ちょっと！ あんた、何やってんのよ？」

「へ？」

場違いな少女の声が階段下から響く。

オレンジのツインテールの少女、神楽坂明日菜がナノハの直ぐ側に立っていた。

「あ、明日菜お姉ちゃん！？」

「こら、おこちゃま、な、何が起きてるのよ」

明日菜がナノハの頭を掴んでグリグリとして正面から睨みつけた。

「はにゃ、な、何で明日菜お姉ちゃんがここに！？」

「こ、怖いの……」

次には明日菜がナノハの頬を掴んでいた。

「いひゃい、いらいの」

「なんかみんな固まっちゃってるし！ さっきはドカンとでかい音するし！ 不法侵入するおこちゃまはいるし！ 何、何なの？ これもパーティーの趣向ってやつなの！？ 答えなさいよ、コスプレ少女！」

「にゃ…コスプレ」

「おらおらー！」

「やゝめて〜」

容赦無い明日菜がナノハを弄繰り回していた。  
ようやく離してもらい、ひりひりする頬をナノハは押さえていた。

「おねーさん、平気なの？」

「何が？」

「えと、普通に動ける？」

「はあ？ 当たり前でしょうが」

ピンと立ち上がり、明日菜はスカートの裾の皺を伸ばした。

嘘、どうして動けるの…？

わたしが周囲で知覚できる、そして圧迫する魔力の重圧は先ほどより緩んでいるようだった。

考えられるとすれば、明日菜お姉ちゃんが魔法使いであることな  
んだけど、この反応だと違うような気がする。

それに認識障害の魔法が働いていないのだ。

レイジングハートに組み込んだ魔法には認識障害の魔法術式が組  
み込まれている。

それが明日菜には不可思議なことに効いていないのだ。

バリアジャケットも魔法障壁も展開すらしていない、普通の人間  
にしか見えなかった。

考えられるとすれば……その思考にレイジングハートが割り込む。

『マスター、ターゲットが移動しています』

『う、どっちに？ どうしよう……』

『このままでは逃げられません。屋外、屋上付近』

「こら、おこちゃまあ、聞いているの？」

腰に手を当てた明日菜が見下ろすように、もう片方の手でナノハの頭に圧力をかける。

「お姉ちゃん、ごめん!」

「あ、ちよつと待ちなさいよ」

「ごめんなのー」

見られてしまった以上、言い訳のしようもなく、説明する時間もなかった。

むしろこの状況で異常なのは明日菜の存在の方なのだが、悠長に思考する暇などナノハにはなかった。

明日菜を見捨てる形で、ナノハは目標を求めて階段を駆け上がり、魔力を探っていた。

やはり上だ。

黒い繭、あれは封印すべき存在だ。

三階のバルコニーの戸を開け放って、ナノハは空に舞い上がる。目標はすぐ側の屋敷の屋根の上にいる。

いた!

黒い繭は屋根の上に静止し、黒い帯の触手を空間に張り巡らせている。

「何をするつもりなの!」?

『マスター、攻撃来ます』

宙に無数の黒い槍が弾け飛び、その中心を舞うのはナノハとレイジングハートだ。

空中での高速機動の旋回に黒い槍も重力震も発動までのわずかな間に距離を取られ、ナノハの生み出した光弾によって撃ち落とされるのだが、黒い繭の攻撃は先ほどまでの攻撃よりも苛烈さを増していた。

「レイジングハート、距離は十分。シューティングモード」

《All Right,  
Shooting mode》

なおも旋回を続けながら、黒い槍の攻撃を回避する。

「ため開始っ！」

《Count...》

十分に距離を離し、ナノハは空中に静止すると、変形したレイジングハートの先端を黒い繭に突きつける。  
目標からの追撃はない。

「いつけえー！」

《Divine Buster》

光弾ならぬ光の砲弾、と形容するに相応しい一撃が発射される。高速で発射されたそれは狙い違わず黒い繭を捕らえていた。

「追撃！！」

ナノハはさらなる砲撃を放ち着弾を見届けるが、それほど効いていないように見えない。

硬い！

駄目だ抜けない。

ナノハは最初の手応えから、黒い繭の魔法障壁の強固さを感じ取っていた。

一、二発では決め手にならない、さらにためるか、奥の手を使うしか無いと判断する。

黒い繭の攻撃範囲はおよそ中距離タイプと掴めた。

この距離ならば攻撃の範囲には入らないが、でも問題は一つあった。

黒い繭に取り込まれたあやかを解放する材料がない。

あの魔法障壁を破壊できなければそれは叶わない。

使える手…よし、一か八かだ。

「レイジングハート、お父さんの杖を！」

《All Right》

レイジングハートが圧縮収容していた杖を出現させ、ナノハは左手にレイジングハート、右手に杖を握り締める。

「リリ・カル・マジカルテクニカル

エウォーカー・テイオ・ヴァルキュリアールム  
《風精召喚》！！》」

ナノハそっくりの風の中位精霊が八体、呼びかけに応じて現れる。

「お願い！」

ナノハの意思伝達を受けて精霊達が屋敷を囲むように分散していき、

杖を再び収容し、ナノハはレイジングハートを再び構える。

「レイジングハート、スターライトブレイカー<sup>プラス</sup>全開を使うよ！」

「マスター、あれは負担が」

「あれの魔法障壁を破るにはそれしか無い。あやかさんを助けないと」

「目標、魔力エネルギー反応。収束、来ます」

「遠距離攻撃！？ 正面防御を」

《Round Shield》

それは黒い雷のごとく射出されてナノハに襲いかかった。

黒い槍が束になったそれは、展開された円形の防御の盾にぶち当たると、同時に変形した黒い帯となって全方位からナノハの自由を奪っていた。

完全に不意をつかれた一撃だった。

締め上げるような黒い帯にナノハは包まれていく。

全身を締め上げる圧力に肺から空気を搾り出される。

絞め殺すつもりだ。

『しまった…!』

『マスター、目標、同等のエネルギーを再装填中』

完全にしてやられた。

バインド系の技を、攻撃一辺倒だと思わせた黒い槍でしてのけたのだ。

自由を奪う攻撃は重力震だけだと思っていたのだ。

敵の能力を完全に把握できなかったナノハの失敗だった。

このままだとやられる!

その時だ。

屋敷の真上にオレンジ髪の少女が立ち上がるのを見たのは。

『明日菜お姉さん!?!』

何であんな所に、それに黒い繭に向かって大胆にも走りだしたのだ。

そして黒い繭がターゲットを変えて明日菜に振り向くのが見えた。

『レイジングハート、破壊する』

完全に黒い帯がナノハの視界を覆い隠す寸前、桜色の光が黒い帯の中から破壊していた。

「間に合っ!」

高速機動でナノハが飛び出した。

「ぬああああ！」

わからない叫びを上げて明日菜は走っていた。

落ちたら死ぬ！

そんな高さなのに、何で私、こんなコトしてんのよあ！

「あやかを離せえええ！」

拳をグーにして、明日菜はその化物に殴りかかる。

敵うわけがない。

でも引くわけにも行かない。

無謀なのもわかってる。

でも、その子は……

黒い繭みたいな化物が明日菜に振り向いた。

その中心に、囚われたあやかがいた。

黒いでかい槍みたいなのが正面に浮いていて、その狙いが明日菜に向いてるのがわかった。

ああ、私、ここで死んじゃうのかな。

馬鹿なこととして、高畑先生にももう会えないのかな。

禍々しいそれが放たれる、と同時に腕を突き出していた。

直撃の瞬間、それは明日菜の目の前で掻き消えていた。

え？

何、どうなってるの？

黒い繭の周囲にまた黒い槍が現れて襲いかかるが、またそれは存在をかき消されていく。

いける！

何だか知らないけど、私にその変な力は効かないみたいだ。だったら、取り戻す。

「ミラクル・アスナ・パンチ！」

拳を握りしめ、明日菜は黒い繭を殴りつけていた。

何か硬いものを殴るつけたような感触がしたが、それは抵抗とならず、あっさりと突き抜けていた。

腕の先で崩壊するような音を聞いたような気がした。

次の瞬間、衝撃で吹き飛ばされる。

眼下には庭が見える。

はは、この高さから落ちたら死ぬよね。

明日菜は死を覚悟して目を閉じた。

「明日菜お姉さん！」

その声をすぐ後ろで聞いたような気がした。

そして意識を失っていた。

間一髪だった。

抱えた明日菜をナノハはバルコニーに下ろす。  
風の精霊が二体、明日菜を支えてくれたので間に合った。

『レイジングハート、目標の損害率を』

『目標、五重の魔法障壁の損壊率95%。外縁部を残して今なお崩壊中』

五重の魔法障壁とは硬いはずだ。  
しかしそれは打ち破られた。

ナノハは気絶した明日菜の横顔を見る。

やはり、【魔法無効化能力】の能力者だ。

レアスキルであり、その中でも完全に魔法を無効化するような存在はかなり稀有な存在のはずだ。

だがナノハは思考を切り替える。

今はあれを止めるのが先決だ。

『行くよ、レイジングハート。あれを止めるよ!』

《All Right》

空に飛び上がると、黒い繭は目標を見失ったかのように地へと降り立っていた。

そのままさまようように庭を移動する姿を視認する。

不味い、あっちの方角は……ネカネお姉ちゃんとアリサちゃんがいるんだ!

「行かせない!」

空を駆け、瞬時に黒い繭の頭上に移動する。  
歯を噛み締めて、ナノハは杖を構える。  
周囲の魔力を感じ取り、それを収束していく。

ナノハ最大の砲撃魔法、スターライトブレイカー。

これで止めることができなければ手はもうない。  
ナノハが放つことのできる最後の切り札だった。  
光の収束が収まり、杖の先端に桜色の光の粒子が踊る。

「スターライト……」

《Sterlight Blaker》

「ブレイカー!!!」

星の光が輝くが如く、放たれた光が周囲を淡い桜色に染めていく。  
大気が唸りを上げて暴風を引き起こし、黒い繭を包み込む。  
黒い繭が崩壊していく。  
消滅しながらその魔力の残滓だけを残して完全消滅する。  
落下するあやかの体を風の精霊達が受け止めた。  
宙にはキラキラと輝く宝石が浮いていた。

「封印を」

《Sealing Mode》

「ジュエルシード、封印!!」

ナノハが杖を向けると、石がレイジングハートの赤い宝石の中に収容される。

「ご苦労様、精霊さん達は帰ってね」

と告げると、あやかの側にいた精霊達は元の世界に帰っていく。バリアジャケットを解き、ようやくナノハは大きな溜息を吐いた。ジュエルシードだった。

やっぱりこの世界には同じものがある。だとしたら、この麻帆良にはジュエルシードが他にも存在する可能性が高い。

ちゃんと調べる必要があるみたいだ。

わたしはお姉ちゃんとアリサちゃんの無事を確かめべく走りだした。

【21】ジュエルシード事件 雪広騒動（後） （後書き）

ようやくと、ジュエルシード編の最初の戦闘を書き終えることができました。

なんか手間どり過ぎ？

ちょっとジュエルシード強くすぎたかと思っただけど、どんな感じでしたでしょうか？

次話は祐奈視点と黒幕視点を書く予定。

今回の話で書こうと思ったら一万文字いくから断念。

少し書式変えたいなと思ってるこのごろ。

## 【22】 祐奈の戦い 雪広騒動終結

私の名前は明石裕奈、麻帆良学園初等部の小学六年生。

ふとしたことから【ジュエルシート願いの種】と、寶石の中のおコジヨ、ユーノと出会ったんだけど、明らかになった事実は私の常識世界を粉々にする。

魔法使いの世界ですって？

そして始まった【ジュエルシート願いの種】の探索。

それが何でこんなことになっちゃってるのよ。

友達のパーティーに呼ばれたら、【ジュエルシート願いの種】が発動してた！？  
どうしてって思う間もなく、やつらは襲いかかってきた。

マジ、どういうことよ！

願いを叶える石なんじゃないの？

絶体絶命のピンチの中で、私は力を願ったんだ。

【ジュエルシート願いの種】に魔法の力を願った。

そして手にしたのは色違いの二丁拳銃《イリス・トルメントウム七色の銃》。

これがあれば何だか勝てるような気がしてきたっ！  
見てなさい、ぶっ飛ばしてやるんだから！

魔砲少女ユーナの戦いが始まるよ！

木々の間を縫ってオレンジの光弾が闇の魔物に突き刺さる。

弾丸のように一直線に飛来した光弾は巨人の胸元を貫くがすぐに再生し、効果的な一撃を与えられないでいる。

走る、祐奈は走り続ける。

そして追いつがる巨人に弾丸を次々と打ち込んでいく。

命中し、再生を繰り返す度に巨人の動きは止まる。

そのわずかな間が祐奈を生き残らせる刹那に繋がる。

ただの弾丸ではなく、魔力によって生み出された魔法の弾丸だ。

弾丸の供給源は祐奈の魔力と、実弾不要なリーズナブルな武器だが、その弾丸は無限ではなかった。

これで十二発目！

撃っても、撃ってもキリがない。

祐奈は荒い息をついて握る拳銃を見る。

すごい威力の魔法の銃だ。

でも効果的なダメージを与えられないでいる。

それにアレも魔力で生まれたものなら、エネルギーを供給する本体がいるはずだ。

祐奈はここ数日で得た魔法の知識から、あの巨人の原動力を推論していた。

私の魔力ってことは、手持ちの弾丸だって無限じゃないし、いつかは尽きてしまうはずだ。

ヤバ、囲まれる！？

咄嗟に祐奈は屈み込んで植え込みに飛び込む。

頭の真上を巨人の腕が伸びて過ぎ去り、樹の幹に突き刺さる。拳銃で黒い槍となった腕を破壊し、祐奈は林の中に身を隠す。ジリ貧だ。

こつちも体力の限界がある。

頭を屈めて庭を覗き見ると、三体の巨人が獲物の姿を求め探しているのが見えた。

「誰？」

「!？」

不意に女の人の声がして、祐奈が振り向くと、そこに車椅子の少女がいた。

場違いな場所にいたのは金髪に青い瞳の可憐な少女だった。

年齢は祐奈より年上に見えた。

と言つても外人だから大人っぽくも見える。

その少女の澄んだ瞳が祐奈を捉えていた。

そうか、この人がそうなんだ。

「アリサちゃんが言つてたネカネさん？」

「私を知ってるの？ アリサちゃんは……」

ネカネさんは眉をしかめて、心配そうな顔をする。

「大丈夫、私が奴らを引きつけたから、今は安全な場所にいるよ。私はゆるいな」

「本当ね、よかった……あの、赤毛の女の子と会わなかった？ アリサちゃんと同じ年なんだけど……」

その気遣わしげな様子から、きつとネカネさんの身内なのだろうと思つた。

祐奈は首を振って否定してみせる。

「そう、ありがとう…アリサちゃんがアレを引きつけるって走りだして、私、この通りだから、そうしたら、アリサちゃんを追っていくんですもの」

「それって、狙いはアリサちゃんだったってことか」  
「多分そうね」

そう答えたネカネさんの顔は苦渋に満ちていた。

小さな少女に気遣われ、本人は安全な位置で身動き取れない。

そのことが今のネカネさんを苦しめているに違いない。

守りたいのに無力でいること。

さっきまでの私と同じだ。

身を屈めたままでいると、巨人が方向を変える。

不味い、標的がないことで戻るつもりだ。

いけるか？

私は握った相棒を見つめた。

その肩にネカネさんの手が置かれる。

見上げると、ネカネさんの瞳が優しく私を見つめていた。

「出るつもりね？ 私にも手助けさせて」

「でも」

「聞いて……」

と、ネカネさんは祐奈にそつと耳打ちする。

その案に驚いた私に彼女はにっこり笑う。

「わかった。やってみるよ」

「レディー、ゴーよ」

ネカネの言葉と共に祐奈は飛び出す。

「来なさい！ 化物」

できるだけ派手に弾丸を撒き散らし、黒い巨人の注意を引きつける。

「さあ、こつち！ 鬼さんこちらっ！！」

先頭に行く巨人を足止めしながら、敵の動きを封じながら一箇所に固めるのが私の役割。

敵の位置から視覚となる場所から一人の少女の呪文詠唱が木霊する。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！ 逆巻け春の嵐 我らに

フランス・パリエース フランス・パリエース ウエンティ・ウエルテンティス ウエンティ・ウエルテンティス

風の加護を 《風花旋風 風障壁》！」

暴風が吹き荒れて巨人達を包み込み、風の乱気流がその動きを封じこんでいく。

その時巨人が吠えた。

効いてる！

祐奈は意識を鋭い向けて集中する。

敵に打ち勝つためのもう一つの決め手、一発で倒せないのならまとめて打ち出せばいい。

単純な解だけどそれに気がつかなかった。

それを教えてくれたのはネカネさん。

銃に魔力が再装填される感覚と共に手に持った銃が熱を帯びて光る。

リロードの度に魔力が溜まっていく。

すごい力が二つの拳銃に集まっているのがわかる。

これならいける！

巨人を縛る風の障壁が一つずつ解き放たれて力を失っていく。

手持ちの時間は二分、これを逃したら二人はお終いだ。

巨人の動きを封じる魔法は、ネカネさんができる渾身の魔法だと言ったから、次はない。

ここで仕留める。

「イリス・トルメントゥム《七色の銃》、お願い！ あーたーれー」

限界にまで装填した魔力の弾丸を引き金を引き絞って私は叫んでいた。

橙色の二対の閃光が回転しながら、一直線に並んだ巨人三体に向かって発射されていた。

「つらぬけー！！」

光が視界を満たし、黒い巨人の胴体を貫いていた。

勝った！ と思った瞬間、その開いた穴がみるみると塞がっていく。

啞然とする祐奈とネカネ。

そして何事もなかったかのようにこちらに向かって歩き出す。

「クソー全然効いてないの!？」

祐奈の悲痛な叫び。

もう魔力はカラッケツだ。

さっきの一撃に全部の力を注ぎ込んでしまった。

逃げなきゃと思いつながら、祐奈の足は動かない。

手に握る相棒も熱を放出して、動かない。

万事休す。

遠目にネカネが魔法の詠唱を開始するのが見えたが、間に合わない。

動けない祐奈に巨人が腕を振り上げた。

咄嗟に目を瞑っていた。

終わりだ。

私ここで死んじゃうんだ。

だがいつまで経ってもその腕は振り下ろされることはなかった。

「ゆーなさん!？」

ネカネさんの声。

眼を開けると黒い巨人の姿が消滅し、黒い風となって消えていく。

林の向こう、屋敷のある方角の空が桜色の光の染まっていた。

すぐに消えてしまったけれど、なんなのだろう？

「何が、どーなってるの?」

「お怪我ありませんか?」

「え、いやーあはは、何とも無いでーす」

「そう、よかった」

と、ネカネさんはほつと息を吐いた。

「ネカネさんって魔法使いなんですね……」

さっきの魔法は驚いた。

作戦で魔法を使うって言った時は半信半疑だった。

「うん、一応ね。正式な魔法使いじゃないんだけど。ゆうなさんも魔法使いだし。このことは内緒にしてね」

「え、あはは、うん」

私って魔法使いなの？

って、他人が見たら魔法以外の何者でもないか。

祐奈は笑って適当に誤魔化す。

いけない、いけない、ネカネさんだから良かったけど、これが一般市民だったら大事だよ。

明石裕奈！ 実は魔法少女！？ なんて見出しが新聞に乗ったっから…有名人？

ユーノは何て言うかな…おとーさんも、多分関係者だろうし、できるだけ秘密にしとかないといけないのか。

「あつ、いつけない。ごめんなさい、行かなくちゃ。アリサちゃんにネカネさんが無事だったって教えないと。ここにいてももらえますか？」

「はい。あの、ゆうなさん」

「はいい？」

「ありがとう」

と、ネカネさんはニコニコ笑って告げた。

ちよつと恥ずかしい。

照れ笑いを浮かべて、私はユーノとアリサがいる方に駆け出す。走りながら、この銃ってどうしまえばいいの？ と思つたら、両手の二丁拳銃は初めからなかったみたいに消え失せていた。

四次元ポケットかい!?

また出せるかとかは置いていて、こちらに走りよるアリサちゃんを抱き止めていた。

「ユーなお姉さんっ!」

「アリサちゃん、よかった。ネカネお姉さんも無事よ。あっちにいるから。悪い奴は私がぶつ飛ばしてあげたからさ」

「うん、ありがとう……」

身を離れたアリサが両手を差し出す。

その掌には【ジューエルシート願いの種】が乗っていた。

「お守り、役に立った?」

「はいっ!」

アリサが元気よく答え、祐奈はそれを受け取る。

『ユーノ、お疲れさん』

『ユーノもお疲れ様……』

その声になんとなく元気が無い。  
どうしたんだろう?

「それじゃアリサちゃんはネカネさんのところに行ってあげて、私は家に一旦戻るから」

「はい」

アリサが庭園の向こうに消えて行くのを見送って、ボロボロに成った姿を見下ろす。

「あちゃー、これじゃパーティー出らんないよ」

『え！？ ああ、うん、そうだね』

「ユーノ、あんたねえ。この日をどれだけ待ち望んだことか！ 艱難辛苦のダイエットの日々だったのよ！」

『あはは、ごめんごめん。多分気のせいだからさ……』

そのユーノの呟きのような一言に祐奈は首を傾げる。

何かあったのだろうか？

こうしてらない。

さっさと戻ってしまおう。

祐奈はその場を立ち去った。

## エヴァ宅

少し時間を遡る。

閉じていた目を開いて、すずかは机の上の【カシオペア】  
タイムマシン空間跳躍装置を眺めた。

時

ぼんやりする頭で姿見に映る自分を眺める。

初等部の制服姿だ。

ベッドの上には、青いドレス。

この日のためにエヴァンジェリンが用意したものだ。  
それを眺めて溜息をつく。

間違いなく、すずかがいるべき時間に戻ってきたのだ。

その言い方は語弊があるかも知れない。

この時代、この時間こそが、すずかが存在していた世界ではない  
のだから。

エヴァンジェリンは楽しみにしているが、どのみちパーティーは中  
止になるはずである。

成長したアレを未来から現在に転移させ、ジュエルシード【願いの種】本来の宿  
主に憑かせたのだ。

今頃、雪広家では力を発現させたジュエルシード【願いの種】が暴走しているは  
ずだ。

そしてそれを止めるのが、ナノハ・スプリングフィールドと明石  
裕奈であるはずだ。

そうであるはずだ。

すずかは確証できない自分に苛立つ。

何故なら、本来のその事件が起きるのは今から五日後であるはず  
だからだ。

事件は学校で起こり、現場に居合わせたナノハと祐奈が協力して、  
あやかを救出するのがすずかの知る、最初のジュエルシード【願いの種】事件のあ  
らまじだった。

その事件では校舎の一部が損壊し、一部の学年がしばらく共同授  
業をすることになっていた。

だがその事件は雪広家のパーティーで起きるのだ。

五日間の前倒し。

十分な時間だった。

あれが起きることで各地に散らばっていた石の活動が活発になり、ナノハと祐奈は事件に深入りしていくことになる。

沈黙の五日常を【ジュエルシート願いの種】を覚醒させることで、埋めることができた。

すずかの知る正史で重要な事が起こるまでの日数をだいぶ稼げただけである。

すずかにとつての誤算は今のところ見られない。

しかし歴史上での綻びは生じ始めていた。

それでも稼いだ時間は十分とは言えなかった。

「超、まだ始まったばかりだよ。歴史は変えられるのかな？」

そう呟き、すずかは机の上の精密時計【カシオペア】を指でなぞった

「おい茶々丸、すずかはまだなのか？」

「はい、お部屋にいるようですが」

「早く呼んでこい。私の準備はできている」

エヴァンジェリンは少し苛立った様子でソファに座り込む。

青いドレスの裾が広がって、見目麗しい少女が行儀悪く足を組んだ。

この日のために作った最新のドレスだった。

もちろんすずかにも同じ物を用意していた。

ダイオラ魔法球にこもってまで仕上げたのだから気合は十分。

二人してお揃いのドレスであるから、並べば注目を集めること間違いないだった。

実のところ、パーティに呼ばれて一番気合を入れていたのはエヴァンジェリンの方だった。

すずかはあまり乗り気でもなく、茶々丸はパーティがどんなものであるかよく知らない。

だから連れていくつもりでいたのだ。

なのに、すずかは部屋から出てこない。

いい加減、エヴァンジェリンの我慢は限界を迎えていた。

「遅いつー！」

その時、ようやくすずかの部屋の扉が開いて、すずか本人が姿を現して、その後ろから茶々丸がかしゆくように出てくるのが見えた。すずかはエヴァンジェリンと同じドレスに身を包んでいる。

さりげない着こなしは堂に入っていて、まるでお姫様であるかのような気品に溢れている。

このまま成長すれば恐ろしい美少女になることは確かである。

分析するようなエヴァンジェリンの視線を受けてすずかが微笑んでみせる。

「フン、中々似合うではないか。馬子にも衣装だな」

「うん、エヴァちゃんもすごく素敵です。さらってしまおうかしら？」

「姫君をさらっていくのは白馬の王子であろうっ？」

「じゃあ、私が王子様になってエヴァちゃんをさらっね」

と、クスクスとすずかが笑う。

その一瞬の微笑がエヴァンジェリンのハートを串刺しにする。  
「こ、こやつ、狙ってやっているのか？」  
頬を赤く染めてエヴァンジェリンはそっぽを向いた。

「さあ、姫君参りましょう」

男のように口調を凛々しく変えたさすがに今度は手を差し出して、  
エヴァンジェリンの手を取る。

「フフ、喜んでだ。王子様。楽しませてくれるであろうな？」  
「はい」

胸に手を当ててすすりかかには軽く一礼する。

ドレスの胸元の青いブローチが鈍く光って二人の顔を映し出していた。

【22】祐奈の戦い 雪広騒動終結（後書き）

祐奈、すずかサイド完了。

雪広騒動はこれで終了です。

ネカネの魔法始動キーはネギと同じにしてみました。

ゆうなとナノハ、微妙なすれ違い。

ユーノは気がついてるかもしれない。

ごまかしてるけど。

ジュエルシード暴走させたのはすずか。

悪役ですね。

超との絡みも書いてみたいのですが、機会があるかな。

すずかが手を出さなければ五日後にナノハと祐奈、ユーノは顔を合  
わせていたという展開です。

微妙な歴史のズレは三人の関係にどう影響するのかわか？

未来すずか主人公ってのも思考してしまいます。

執筆作業六時間ほど（改稿一時間）。

さくさく書いた方もしれない。

でも読むと一瞬である。

【23】それぞれの思惑（前書き）

書式を少し変更。

気に入れば修正してくかも。

### 【23】それぞれの思惑

先日催された雪広家のパーティーは少しばかりの混乱を関係者にもたらしたが、開演時間の遅れはあれ何の問題もなく開催された。

雪広あやかの記憶の失陥と、全てを目撃したアリサの偽の証言そして迅速に展開された揉み潰しによって、雪広家の庭を襲ったのは竜巻であったことが公表された。

挟られた中庭の地面や穴、屋敷の屋根の被害、なぎ倒された木々など、どれを見ても竜巻であると結論づけられた。

何故か会場にいあわせた人々には何の記憶もなかったのだが、雪広あやかの希望も強く、雪広家の面子を立てる形での開演となったが、突然の竜巻は珍しいことなので、人々の関心は破壊された庭の話題が中心となった。

その後あやかは疲労により倒れてしまい、急遽ホスト役になったアリサがその役をつつがなくこなした。

ここまでが昨日の雪広邸で起こったことのあらましだ。事件でも何でもなかったのだ。天災と呼ぶこともできるが、本人からすれば偽証の上での顛末だ。

アリサにとっては不本意だが、命を守ってくれた恩人を売るようなマネをするのはもつと不本意だった。

別に真実を明らかにしたかったわけではない。

ただ単純に自らの信条とする行動原理を否定する、自らの行動に若干歯がゆい思いをしたのだ。

そして確信したこと。

魔法使いは確かに存在するのだ、ということだ。

ハイジャック事件の時現れた白い子も魔法使いなのだ。

世間はその存在を知らない。

そしてそれを知られたくないのだ。

こんなことでこのアリサ様が動揺するなんて、雪広家の人間として失格だわ。

そう思考しながら、お父様はきつとこのことを知っているはずだとアリサは同時に確信していた。

雪広コンツェルンのトップと、その幹部は当然知っていることなのだろう、とも推測する。

こう見えても独自の情報網を持っているのだ。

お父様、今度のお休みはじっくりお話する必要があるわね！

アリサは今回の件で動いた人間の顔を思い浮かべて、少しばかり黒い笑みを浮かべると、朝の通学のリムジンに乗り込んだ。

「ふわぁ…あふ……」

朝食を終えて、お弁当箱を鞆に入れたナノハが玄関口で靴を履く。手間を省ける給食という選択肢もあるが、事前にお弁当持参を申し込んでおけば給食でなくても良いシステムになっていた。

大半の生徒は給食だが、ナノハと友達になった二人はお弁当派だというから、お弁当を選択していた。

また何となく眠気が込み上げて、小さく欠伸をする。

バスで通うか迷ったが、結局徒歩で通学することに決めた。

ナノハの足であれば多少の距離はあつてないも同然だった。

「さて、行きますか」

と、立ち上がると同時にチャイムが鳴り響く。

誰だろう、こんな朝から？

確認するために覗いてみると、白い初等部の制服と腕を組んだ金髪の少女と、その隣に大人しめの少女が二人立っていた。

はにゃ、何で二人がいるの？

疑問に思うのもつかの間、玄関の扉が叩かれる。

「ナノハ、いるのはわかってるのよ！ 観念して出てきなさい」  
何事かとリビングからネカネが顔を出す。

友達だよ、と口で伝えると頷いて首を引っ込める。

「はいはい、今出ます」

扉が開き、開口一番、笑顔のすずかが声をかける。

「おはよう、ナノハちゃん」

「おはよう！ すずかちゃん、アリサちゃん」

「おはよう、ナノハ！ さあ、行くわよ」

「行くわよって、アリサちゃん、何でうちに？」

「迎えに来たのに決まってるじゃない」

「そ、そうなんだ」

ナノハは頭に雪広家とこの家の距離をシミュレートするが、明らかに遠回りである。

わざわざ迎えに来る意味が無いのだが、そこがアリサらしかった。三人して階下まで降りて、待たせていたリムジンの前に立つ鮫島に挨拶する。

「おはようございます、鮫島さん」

「おはようございます、スプリングフィールド様」

「さ、様って…名前をお願いします」

「ではナノハ様」

アハハ、この人はやっぱり変わらないんだなあ、と苦笑い。

車内での話題はもちろん昨日のことだ。

ナノハは半ばビクビクしていたが、魔法関連の話など「ま」も見当たらない。

すずかのドレスのことやアリサのドレスの話題。

「ナノハちゃんも素敵だったよ。可憐で可愛かった」

と、話を振ったのは昨日の注目株であるすずかだ。

少し遅れてやってきたすずかとエヴァンジェリンの組み合わせに

ナノハも思わず溜息をついたほどだ。

「そ、そうかな？」

すずかの保護者というエヴァンジェリンと引き合わされた時の彼女の驚きぶりは鮮明に記憶に残っている。

その後すずかちゃんを引つ張っていつちゃったから、あまり話せなかったんだけどね。

「磨けば光るのよね、ナノハはさ」

隣のアリサがナノハの腕に手を絡ませてくる。

「わたしって地味目かかって思うけど……」

「謙遜も過ぎると嫌味よ。あんた可愛いんだから少しは自覚しなさい」

「にゃ、にゃ」

ちよつと頬が熱くなつて言葉を濁した。

「いえいえ、本当に花のような姉妹だと思いましたよ、私は」

鮫島が一瞬だけ振り向いて片目を瞑ってみせた。

「つ、追撃なの」

「ナノハちゃん、顔が真っ赤だよ」

クスクスとすずかが笑い、車は校門前で停車して三人は降り立つ。

「ではお嬢様、午後に」

「ええ、頼むわよ鮫島」

「おはようございます。月村さん、雪広さん、スプリングフィールドさん」

校門前で担任の女性教師が声をかけてくるのを三人がバラバラに挨拶する。

「もうスプリングフィールドさんと仲良くなったのね。これからもわからないこととかあったらサポートしてあげてね。月村さん、雪広さん」

「はい先生」

アリサが答えて、すずかが黙礼して、三人は教室に向かう。

授業そのものは退屈だ。

何せ一年生が受ける授業だし、小学生やるのも二回目なのだから当然だ。

そんなわたしはレイジングハートと脳内トレーニング中です。

授業を聴きながら、魔法の矢の連弾を潰して反撃、制圧してクリアー。

うん、絶好調。

今理論を組立ててるのは遅発呪文の連動だ。

遅発呪文は上手く使えばカートリッジなしでも無理のない術式運用ができる技術だ。

そして技後硬直の欠点もカバーできるはずだ。

ための必要な魔法は高速戦闘においてネックとなる。

ディバインシューターはかなり万能な魔法だが、威力に難がある。戦術の幅が広がるし、欠点を一つでも埋める努力はしておかないとね。

あと咸卦法、居合い拳も鍛錬を続けている。

操れる気の容量が多くないこともあり、わたしの咸卦法はかなり中途半端だ。

それでも魔力と気の融合である咸卦法は、契約魔法による肉体強化を上回るのだ。

究極技法と呼ばれるのも納得なんだけど、気と魔力のバランスが崩れるため、強い魔法を使用すると解けてしまうのだ。

無詠唱魔法なら何とかバランスを取って《魔法の射手》サキタ・マキカ一矢ほどを連撃コンビネーションに乗せることができるようになった。

今考えてるのは、居合拳に束ねた無詠唱魔法を乗せることだ。

まだバランスが難しく成功したことないんだけど、頑張れば使いこなせるようになるのかな？

接近戦とか、前は考えもしなかったけど、この世界も魔法使いはシビアだ。

一つでも生き残るための手段を得るのは、今のわたしには必要なことなんだ。

配られたプリントの項目を全部埋めて、ナノハは手持ち無沙汰に周囲を見る。

やはりアリサやすずかに比べればクラスメイトの子達は年相応だ。それに対して自分は実年齢十八歳である。

大人として社会に出ていておかしくない年齢だ。

実労働という意味では時空管理局に勤務していたのだから、働く意味も重さもわかってはいる。

時空管理局に入って、がむしゃらに強くなるうとして、教導官になろうと努力した。

あの頃はエース・オブ・エースと呼ばれてどこかで油断してた。

そしてわたしは無理がたたって死んでしまった。

それは命をかけてまで必要なことだったのか、今はもうわからない。

生きていれば何らかの結果を残したのかも知れない。

わたしが時空管理局に入ったのは誰かの、友達の役に立ちたかったからだ。

でもそれだけじゃなかった。

わたしがわたしである、高町なのはである存在をどこかに残したかったんだと思う。

二度目の人生と、二度目のわたし。

全く異なる世界。

今あるのが今の本当のわたしなんだ。

失いたくないものがこの世界にある。

ネカネお姉ちゃんにアーニャお姉ちゃん、すずかちゃんやアリサちゃんもいる。

先生となつてくれたタカミチさん、それにユーノ君。おじさんおばさん。

誰か一人でも欠ければわたしの世界は壊れてしまう。だからこそ守りたいんだ。

ナノハの視線が向けられてアリサは慌てていた。

やだ、何でこっち見てるのよ。

は、恥ずかしいじゃない。

落書きしていたノートを裏つ返す。

も、もしかして見られた？

ナノハへの思いの丈を綴った内容である。

途端に恥ずかしさに見舞われてアリサは赤面していた。

そしてニツコリとナノハが微笑んだ。

包みこむような笑顔だ。

な、なに笑ってるのよ！

アリサはあつかんべーをしてみせるとナノハは苦笑してみせた。

その二人のやり取りをすずかが観察していた。

『エアリヒカイト、明石裕奈はナノハと接触していなかった』

『サー・イエス・マスター。明石裕奈の行動と彼女の行動にはすれ違いが生じています』

『やっぱり時期が早すぎた？』

『それが関係するかは不明です。史実通りの日付で二人が接触する可能性はないとも言えません』

『その可能性はないわ。二人が出会うきっかけとなるのがあの事件のはずだった。でも可能性の一つが完全に潰れたわけではないわ。まだ誘導可能なはずよ。それに……』

『それに？』

「何だか私達、悪役みたいね？」  
「サー・イエス・マスター。悪役、ラスボスですか？ さながら私は悪の大幹部ですか？」  
「いいえ、エアリヒカイトは私のパートナーよ。もう一つ…ジュエルシードが必要よ」  
「また【カシオペア】を使うのですか？」  
「ええ」  
「危険です。マスターでも……」  
「無理は承知よ。危険も覚悟してる」  
「わかりました。私も可能な限りサポートします」  
「ありがとうございます、エアリヒカイト」

私の名前はドゥーエ。

スカリエツティ・ナンバーズの一人だ。

今、私は密命を受けて麻帆良学園に教師の一人として潜伏している。

最初は何の冗談かと思っていたが、やはりあの方は天才だ。

ユグドラシル・ドロップ

【世界樹の涙】が麻帆良に現れるという観測は外れなかったのである。

ジュエルシード

先日の魔力反応、【願いの種】の発動はこちらも知覚するところで、立場が許せば確保に向かったところだ。

しかし、与えられた任務は監視だった。

ユグドラシル・ドロップ

あの方によると【世界樹の涙】が力を集め易くするために分身するだろうという予測結果を伝えてきたのだ。

ならば回収すべきではないか、と思うのだが、ドゥーエは任務を忠実にこなすことを選んだ。

使命は【ジュエルシート願いの種】の宿主の動向とその在り処の把握だ。

私はただあるがままを報告するのみだ。

ジュエルシートを封印した少女の存在は脅威となりうる。

ナノハ・スプリングフィールド。

アラブブラ

【赤き翼】の英雄の娘。

だがまだ小学一年生にすぎない。

どこにでもいる、どこかぼうつとしたのろまな子にしか見えない。

ドゥーエは監視対象に定めた少女を眺める。

今なら私でも殺せそうだ。

「はい、皆さん。プリントを回収します。後ろの人から持つてきてくださいねー」

脳天気な先生を演じながらその機会を伺う。

その機会もあるかも知れない。

ドゥーエは胸に生じた殺意を笑顔に変えて、ただの教師の顔を取り繕うのだった。

## 六年生教室

寝不足気味の頭で授業の内容を右から左へ垂れ流し、神楽坂明日菜は呆けたように窓の外を眺めていた。

周囲は授業後の軽いざわめきに包まれているが、明日菜には誰の声も聞こえていない。

先日の雪広家の事件。

あれは本当に現実起きたことなのだろうか、と考える。

固まった人々、黒い繭、あやか、そしておこちゃま……何もかもが非現実だ。

気がつけば私はバルコニーに寝てて、起きたら何事もなかったかのようにパーティが始まって、そして誰もアレを目撃しておらず、あやかは倒れてしまい、会わせてもらうこともできなかった。

明らかに現実離れした何かの事件が起こり、人が傷つくことはなかったが、建物や敷地への被害が確かにあつたにも関わらず、それはなかったことのようにもみ消されていた。

雪広家は非常識な金持ちで、非常識な影響力があることも理解してるつもりだったけど、明日菜は竜巻なんて見てもいないのだ。

明日菜が見たのは黒い繭と、それに取り込まれたあやかとおこちやまである。

その時のことを思い起こすと、何故か頭が痛く、ズキズキと何かが脳の中で疼いていた。

何これ？

思考しても答えはでない。

何か重要なことがよぎってはかき消されていくような不快な感覚だけが残った。

はつきりとわかっていることは、神楽坂明日菜は昨日のことを全く納得していない、ということだった。

「あすにゃ〜」

「だー、うざい！ ひつつくなー！」

明石祐奈が明日菜に後ろから抱きついて、座っていた明日菜は机に突っ伏していた。

背中に祐奈の体重が押し掛かって胸が苦しい。

「うらあ」

と明日菜は気合を入れて起き上がり、背中の中の重みを押し返すと、反転した祐奈が明日菜の後ろから軽く首を羽交い絞めにする。

「ありゃ？ 元気ないにゃ〜 あやかが風邪で休んでるから？」

「か、関係ないわよ！ なんてあいつがないと元気ないのよ。ピンピンこの通り元気よー！」

「ふっ、本当は恋しくてたまらないにや。強がって耐えるあすにや！ ういやつよの〜」

「はい〜？ ネジ緩んでるの、ゆーな」

「フヒヒ、でもあやかは昨日の主催役で疲れちゃったのかな。かなり張り切ってたみたいだしさ。私はあの特大ケーキが食べられてチヨー幸せだったよお」

「そうそう、すごい大きかったよねー。ゆーなは特にすごかった」と、横から会話に加わったのはクラスメイトの佐々木まき絵だ。

緩く明日菜に手を掛けたまま祐奈はまき絵に得意満面に答える。

「そりゃもう食べ尽くす気まんまんで行ったからにや〜」

「胸が焼けるくらいの食べっぷりだったもんね、ゆーなは」

ほろりと息を一つ吐き出して、明日菜はその時のことを思い出して、本当に胸焼けがした。

ケーキは嫌いではない。

むしろ大好物の部類に入るが、あんなことが起こった後では食欲すらわかなかつたのだ。

パーティの残り物を持ち帰るのも忘れて帰ってしまったのだから、相当である。

駄目だ、やっぱり煮え切らないし気持ち悪い。

明日菜は立ち上がると、祐奈とまき絵が視線でその動きを追った。

「あれ、どこいくのあすにや？」

「トイレ」

と吐き捨てて、明日菜は教室を出ると、トイレではなく階下に通じる階段を早足で降りていく。

目標は一年生の教室である。

おこちゃまよ、おこちゃま。

あの子が今回の件のキーのような気がして、半ば直感的にそれは正解なのではないかと明日菜は思っていた。

キリキリ白状させて、この胸のつつかえを晴らさせてもらうからね。

【23】それぞれの思惑（後書き）

忘れられがちなドゥー工さん再登場。

最近凹み気味なので感想があると嬉しいかも知れないこの頃。  
もっと凹凹に凹ませてもいいけどね！

「乙」の一言でもあればもっと頑張るかも知れない。

1500字ほど文章を追加。

【24】幸せの神様（前）（前書き）

今回は祐奈パート。

【24】幸せの神様（前）

校庭の端の芝生の上で四人の少女達がお弁当を広げていた。空は青く、風も気持ちがいい、まるでピクニック気分だ。

「明日菜お姉さん、ウィンナーさんをどうぞ」

「じゃあ、私はこれ上げる」

ナノハとアリサが張りあう様に、明日菜の前にお弁当のおかずを一品差し出す。

「私からもお一つどうぞ」

すずかも笑って弁当箱を差し出していた。

「えーと…も、貰うわよ」

無難にコロッケを一つつまんでコッペパンに挟んでみる。

明日菜の手持ちはコッペパン。

差し出すようなものはなく、ただ一方的に受け取るまでだ。

まずい、主導権はどこに行ったのだ。

あ、この卵も美味しい。

もぐもぐ、と明日菜はアリサのだし巻き卵を頬張る。

「お茶をどうぞ！」

ナノハが水筒からお茶を注いで明日菜に渡す。

冷たい喉越し、美味しい。

アリサとすずかが弁当箱を見せ合ってデザインの意見を述べ合っている。

ナノハのお弁当もなかなか可愛らしい。

「そのお弁当、あんたが作ったの？」

「はい、早起きして作りました」

ほんわか笑ってナノハが応える。

「ふーん。お姉さんは作ってくれないの？」

「ネカネお姉ちゃん朝が弱い。だから朝ご飯も私が作ってます」

「へー、偉いじゃない。感心感心」

コッペパンにコロッケは合う。

コロッケ挟むこと考えた奴は天才よね、とどうでもいいことを思  
考しながら、私はおこちゃまナノ八を盗み見てパンを頼張る。

まあ他の二人もおこちゃまではあるが、一年生に六年生が混ざっ  
てる図はあまり見かけることがないから目立っていた。

あやかがいたらすっ飛んでくるわね、と妹ラブが激しい友人を思  
い浮かべる。

アリサの姉のあやかは、今日は体調不良という理由で休んでいた。  
「アリサちゃん」

「はい？ なんです、明日菜姉さま」

「あやかだけど…大丈夫？」

昨日のあの後、結局会えずじまいで今日は休みである。

何よ、気になってしょうがないじゃない。

変な心配させないでよね。

「大丈夫よ。きっと明日菜姉さまに会えば復活するんじゃないかし  
ら」

アリサが重箱からだし巻き卵を取って、頼張ると幸せそうに頬を  
緩める。

「はいー？」

「喧嘩するほど仲がよろしいですもんね。きっと元気になるわ」  
笑みを絶やさずすがが口を挟む。

「そ、そうかな」

仲なんて別にそんな良くないってば、と言いつの言葉を飲み込ん  
で明日菜は赤面する。

「わたし、お見舞い行こうかな。あやかさんの顔見たいし」

「あ、賛成」

ナノ八の提案にすずかが片手を上げる。

「うち来る？」

「うん」

と、ナノ八がアリサに頷いて、場の空気はお見舞いに雪広家に行

く流れとなっていた。

「えーと、私も行つていい？」

明日菜もおずおずと言い出した。

「もちろんです」

アリサが宣言して、ナノハと顔を見合わせて笑った。

何、何なの？

意味ありげに笑うんじゃないわよ。

おこちゃま同士のくせに。

明日菜はコッペパンの最後の一口を口に放り込んでお茶を飲み干した。

四葉五月は給食当番である。

白衣姿の五月が現れると飢えた狼の群れことクラスの生徒達も一斉に大人しくなる。

その様はお弁当組も見惚れるほどで、いつの間にか五月は給食マイスターと呼ばれるようになっていた。

誰が呼んだかは不明だが、五月はこう見えても家庭科系スキルに適正があるのか、一度でも食べたことのある料理であれば、食材さえあれば再現して作り出すほどの腕前を持っていた。

まさに料理の鉄人といった所だろうか。

とはいっても給食はオバチャン達が作るので五月は運ぶだけ、しかし五月の料理の知識は厨房関係者ならみんな知るところで、みんなの人気者でもあった。

五月は美味しいものが大好きだ。

特に自分の作ったものをみんなが食べてくれるのが好きだ。

得意なのは肉まんづくりで、いつかは自分のお店を持つのが夢だ。

あんたって幸せの神様よね、と言ったのは、五月のクラスメイトのオレンジ髪の少女、神楽坂明日菜だった。

そうならいいな、と五月は自分を評価した明日菜にそう答えている。

それは偽らざる本心からの言葉だった。

自分の料理で誰かが幸せになって笑ってくれたら嬉しい。

そう笑う五月に、明日菜はどこか呆れた顔で、あんたって変な子ね、と言った。

変な子か…別に悪い気はしなかった。

確かに私は変わっているのかも知れない。

料理を食べてもらうことが最優先、私の作ったものでお腹を空かせた誰かを満腹にしてあげること。

そこには争いはなく、みんな穏やかに過ごせる世界がある。

それが私の理想、私が目指す世界。

「給食班長、おねがいします」

祐奈がわんを五月に差し出してそれを受け取る。

「大盛りでっ！」

「はい」

「あざーっす」

五月が盛ってトレイに乗せて、次の生徒に盛りつけて、とを繰り返して、みんなに行き渡ると五月は自分の分を盛り付ける。

寸胴の盛り付け量まで正確で、ほぼ生徒分の分量を配分する腕一つとっても、五月の技量はそこらの給食当番の比ではなかった。

「お待たせ」

「班長来た、じゃーいただきまーす」

トレイを持った五月を迎え入れたのはクラスの仲良し組である四

人だった。

明石裕奈、佐々木まき絵、和泉亜子、大河内アキラのグループだ。

「今日の給食美味しい〜」

スプーンを加えたまま、まき絵が器用に口の中で咀嚼して飲み込む。

「でさー、こないだね……」

ムードメーカーの祐奈が話を引っ張り、亜子とアキラがそれと耳をそばだて、まき絵がちやちやをいれる、そんないつもの風景の中で、五月はニコニコ笑っては給食を口に運ぶ。

「五月はさー、将来はやっぱりコックさん？」

まき絵が五月の方を見て尋ねる。

その言葉に釣られて顔を上げると、他の三人とも顔を合わせた。

「うん、そうかな。コックさん、なのかな？」

「五月ならお嫁さんってのもぴったりだね。すっごく料理作るの上手いしさ」

祐奈の言葉に五月は少し驚く。

お嫁さんというのはあまり考えたことなかった。

でも、きつとそれは好きな人ができたらありえる選択肢の一つなのだろうと思う。

「あのね」

短く発した言葉の後に、アキラと視線が絡み合つと、彼女は頷いてみせた。

うん、と、それで五月はどうにか言葉をまとめて想いを口にしていた。

「私ね、肉まん作るの好き…食べるのも好きなんだけど…」

そう言つて、いったんみんなの様子を伺つと、祐奈はうんうん、と五月の肉まん美味しいよね、と亜子に促して、亜子も、もちろん、と答えていた。

その言葉を口にするのは初めてだった。

その思いがあることを、心の隅にあった願いが確かにあることを自覚させてくれた少女の言葉を五月はまた思いいだす。

あんたって幸せの神様よね。

「自分のね、お店を持てたらなってると思うの。みんなが喜んでくれる私のお店」

そう言い切って、高鳴る胸を落ち着かせるようにそこに手を置いた。

わずかな間の、それが伝わっていく時間は少し長く感じた。最初に言葉を発したのはアキラだった。

アキラは少しはにかんで、言葉を慎重に選びながら伝えた。

「うん、五月ならその夢さ、きつと夢じゃなくて、本物を手に入れられるんじゃないかな」

ありがとう、その言葉を言おうとして、胸が熱くなる。

「そ、そうだよ。五月ならビッグなコックさんになれるって、ね、ゆーな」

「もちでしょ？ 肉まんさいこーだって。【超包子】にだって負けてないって」

まき絵が続き、祐奈が太鼓判を押した。

「そや、めっちゃ五月は努力家じゃん。うちらが保証するって、絶対、五月は夢叶えられる」

両手でガッツポーズを作って亜子が力説する。

胸に溢れた熱さはじんわりと溢れでて五月の中でこぼれ落ちる。

「あ、あり……がとう……」

何だか熱き込み上げてきたものは涙だった。

四人がぎよつとして互いに顔を見合わせる。

五月は笑ってみせようとしてちよつと失敗する。

「えへへ、おかしいな。これね、嬉し涙なの」

袖口で涙を拭って、ようやく何でもないよ、と風に繕って五月は

ペコリと頭を下げた。

戸惑う四人に五月はなんて言えばいいんだろうと思った。

「この事言ったの、初めてだから。私の夢」

何だか少し恥ずかしくなって、五月はふくよかな身を縮こめていた。

「あはは、五月、めっちゃ可愛いわ。うちのお嫁さんにしよか」

「え？」

「うんうん、亜子の嫁には勿体無い。まき絵さんのお嫁さんになりなよ」

「嫁さんなのかよっ！」

亜子とまき絵に祐奈が突っ込んで、五月は苦笑いする。

同じように笑うアキラと視線が絡み合って、彼女はぱっちり五月にウィンクしてみせた。

ありがとう、みんな、大好きだよ。

泣いた顔はどこに行ったやら、五月は思い切り笑顔で笑ってみせた。

### 学園路地・超包子

将来のこととか、なりたいもの、自分がそれになれるのかという不安はある。

確定しない自分のこととか、いろいろあるけれど、やりたいことは心に決めていた。

四葉五月は【超包子】の看板を見上げていた。

屋台の前には準備中の札がかかっていて、そのすぐ前にはすでに人だかりができていた。

今日も連日の大盛況、学生達が並ぶ姿は圧巻の一言に尽きる。

実は五月は【超包子】の大ファンだった。

あれほどの肉まん、五月でさえもまだ作ることはできない。

もう少し修行すれば追いつけそうな気もしたが、今はまだ手の届かない頂きにそれは存在した。

「何してるアル？」

五月の背にその少女が声を掛けたのは開店二十分前のことだった。恐る恐る振り向くと、そこには【超包子】のオーナーで店長の天才少女、超鈴音その人が立っていたのだ。

おだんご頭のチャイニーズつぽさを強調した髪型にチャイナドレスと謎のロボットを従えていた。

「忙しいアル、冷やかしは帰るね」

と、興味もなさげに去ろうとする背中に五月は勇気を振り絞って声をかけていた。

「あ、あの！」

「なにアルか？」

「こ、これ」

五月は折りたたんでいた広告紙を手に超に見せていた。それにはこう書かれていた。

『アルバイト求む！！ 【超包子】 肉まん作り経験者優遇！！』

「ああ、うちの広告アルね。アルバイト希望？」

と、超は値踏みするように五月を上から下まで眺め回す。

「はいっ！」

「良い返事アルね。迷いが無い。採用！」

「へ？」

「へ、じゃないアル、私忙しいね。まずは接客から覚えてもらっね。五月には慣れたら厨房を覚えてもらっアルからね！」

袖をまくってガッツポーズする超は五月とそう歳が変わらぬ少女

にしか見えないが、【超包子】をわずか数ヶ月で超人気店にしてしまったカリスマ経営者としての顔で五月の前に立っていた。

「はい、お願いします!!」

そう答えてから、何で自分の名前を知っているのだろうと首を傾げるのだが、開店と同時になだれ込んだ客の対応に追われてそんなことは忘れてしまった。

## 世界樹周辺

緑生い茂る林と丘陵の上に立って明石裕奈は溜息を付いた。

すぐ後ろに世界樹の大きく雄大な姿がそびえ立っていた。

「どこを探せど石見つからないね」

「そろそろ【ジュエルシード願いの種】も魔力を蓄え始める頃合いだと思う。一番の問題は宿主がいる場合だね。歪んだ願いを持った宿主なら、暴走する可能性が高いんだけど……」

そこでユーノは躊躇うように口をつぐんだ。

先日の雪広家の騒動のことだと祐奈は気がつく。

「あれ、誰だったんだろうね? 【ジュエルシード願いの種】は誰かに横取りされちゃうし、そのおかげで助かったみたいだけど、ユーノ、何か隠してるよね?」

「え? ……そんなことないよ」

なんか怪しい、と祐奈は詮索したくもあるが、今は気が急いでいた。

早く石を見つけないと先日みたいな騒ぎがまた起きるのだ。

そんなことになれば大変なことになる。

魔法の力を得た祐奈でもあの敵は倒しきれなかった。

しかし謎のお助けマンの手によって本体は倒されたんだ。

でも【ジュエルシード願いの種】は封印されてその反応は消えてしまったという。その誰かを探すのも課題なんだけど、話し合いで譲ってくれるような相手なら苦労しないのよね、と祐奈は頭を抱えなくなる。

ユーノの知り合いらしい人があの会場にいたことも気になるが、今一番の関心は【ジュエルシード願いの種】と謎のお助けマンの存在だった。

「駄目か、もう少し範囲を広げるか、範囲を絞り込んでサーチを圧縮して細かい反応を探るしかできなさそうだ。僕のサーチに引つかかるのは、ある程度魔力を蓄えているものでないと駄目なんだ。そろそろ引つかかる程度に成長してきてるはずなんだけど」

「役に立たないな、もう」

「ごめん」

祐奈の役立たず宣告にシュンとユーノが落ち込んだ声を上げる。

寶石の中で落ち込んでいるのだろうか、祐奈は石を取り出して中を覗く。

「あ!?!」

「へ?」

突然のユーノの叫びに祐奈は素っ頓狂な声を上げる。

「ジュエルシードの反応、活発化してる!?!」

「ちよ、いきなり?」

「あっちだ!」

「ああ、もう! 間に合え!」

段差を飛び越え、ユーノが教えるままに祐奈は駆け出していた。

## お知らせ的なこと

別記事と間違えて投稿しました。

この記事は投稿とは別目的で使用することにします。

登場人物紹介とか……

うっかりミスですね。

関係ありませんが、今後、ここの感想欄はできるだけ利用しないように願います。

見て分かる通り、よくわからないことになっています。

私は触れたくもないので、放置すると宣言してますので、読者さんも触れないようにお願いします。

今後どうするかは活動報告で書いていきますので、目を通してくださると助かります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4056v/>

---

なのはさんは死んでしまいました 転生ナノ八の物語

2011年9月26日16時41分発行